

千葉市蓑輪遺跡

1985

住宅・都市整備公団 東京支社
財団法人 千葉県文化財センター

ち　ば　し　みの　わ　い　せき
千葉市蓑輪遺跡

—サニータウンみのわ台造成に伴う
埋蔵文化財調査報告書—

1 9 8 5

住宅・都市整備公団 東京支社
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉市の西部を流れ、東京湾に注ぐ花見川流域は、自然環境にめぐまれ、先土器時代から歴史時代に至る多くの遺跡が所在しており、特に縄文時代の馬蹄形貝塚で国指定史跡となるいわゆる猿橋貝塚は著名です。

東京湾の東側沿岸に位置するこの地域は、近年鉄道や道路など交通網の整備が急速に進み、住宅地域として発展しています。

住宅・都市整備公団では、このような急激な人口増に伴う住宅需要に対応し、また、スプロール化を解消するため、千葉市畠町にサニータウンみのわ台の建設を計画しました。

千葉県教育委員会では、用地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、住宅・都市整備公団をはじめ関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりました。

その結果、用地内の遺跡については、現状保存が困難なため、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講じることとなり、財団法人千葉県文化財センターが調査機関の指定を受け、昭和58年11月1日から昭和59年3月7日まで調査を実施しました。

調査の結果、古墳時代前期から中期にかけての集落跡をはじめ、先土器時代の石器群や歴史時代の火葬墓を検出したことは、今まで調査例の少なかった当地域の古代文化解明にきわめて貴重な資料を提供することになると言えましょう。

このたび、その発掘成果を『千葉市菱輪遺跡』として刊行するに当たり、本書が学術資料としてはもとより、教育資料として広く活用されるとともに文化財保護思想の普及に貢献できればと、願ってやみません。

終りに当たり、発掘調査から報告書刊行までいろいろご指導、ご助言をいただいた千葉県教育委員会をはじめ、住宅・都市整備公団、地元関係諸機関各位のご協力にお礼申し上げるとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和60年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 今井 正

凡 例

1. 本書は、住宅・都市整備公団東京支社によるサニータウンみのわ台造成工事に伴い事前調査した千葉市蓑輪遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和58年11月1日から昭和59年3月7日まで実施した。
3. 発掘調査の実施は、住宅・都市整備公団東京支社の委託を受け、文化庁および千葉県教育委員会の指導により、財団法人千葉県文化財センターが行った。
4. 葩輪遺跡の遺跡コードは、行政管理庁指定統計コード千葉市（201）、千葉県文化財センター遺跡コード（051）を使用し、201-051とした。
5. 整理作業は、昭和59年3月8日から9月29日まで実施した。
6. 発掘調査および整理作業の担当職員は下記の通りである。

調査部長 白石 竹雄（59. 3. 31まで）

鈴木道之助

調査部長補佐 根本 弘（59. 3. 31まで）

岡川 宏道

班長 阪田 正一

調査研究員 加藤 正信

雨宮龍太郎（59. 3. 31まで）

7. 本書の編集・執筆は、鈴木道之助、岡川宏道、阪田正一の指導、助言のもと、加藤正信が行った。
8. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、住宅・都市整備公団東京支社、千葉県教育庁文化課の関係者各位をはじめとして、多くの方々から御指導・御助言をいただいたことをここに記して深く感謝の意を表したい。
9. 本書における遺構番号は原則として調査時と同一としたが、一部異なる遺構が存在するため、調査時の番号を本文中に（ ）で表示した。又一部欠番も存在する。
10. 本書に使用した図面の方位は、公共座標による座標北とした。
11. 掛図中に使用した網点は、遺構中の焼土の堆積、粘土塊（019号住居址のみ）または土器の赤彩を表わしている。住居址の炉址は輪郭を囲ったスクリーン・トーンを使用した。

本文目次

序文

凡例

目次

第1章 序説

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の環境と周辺遺跡	1
第3節 調査の方法と経過、層序	5

第2章 検出した遺構と遺物

第1節 先土器時代	9
第2節 古墳時代	17
第3節 歴史時代	65
第4節 その他	68

第3章 まとめ

第1節 先土器時代	73
第2節 古墳時代	73
第3節 歴史時代	76

挿図目次

第1図 製輪遺跡及び周辺遺跡位置図	2
第2図 製輪遺跡周辺地形図	3
第3図 グリッド配置及び遺構分布図	6
第4図 グリッド配置及び先土器時代調査図	7
第5図 土層断面図	8
第6図 A・B地点出土遺物実測図	9
第7図 C地点遺物出土状況図	10
第8図 C地点出土遺物実測図	11
第9図 D地点遺物出土状況図	13
第10図 D地点疊出土状況図	14
第11図 D地点出土遺物実測図(1)	15
第12図 D地点出土遺物実測図(2)	16

第13図	D地点出土遺物実測図(3).....	17
第14図	001号住居址実測図	18
第15図	001号住居址出土遺物実測図	19
第16図	002号住居址実測図	21
第17図	002号住居址出土遺物実測図	21
第18図	003号住居址実測図	22
第19図	004号住居址実測図	23
第20図	004号住居址出土遺物実測図	24
第21図	005号住居址実測図	26
第22図	005号住居址出土遺物実測図(1)	27
第23図	005号住居址出土遺物実測図(2)	28
第24図	006号住居址実測図	29
第25図	006号住居址出土遺物実測図	29
第26図	007号住居址実測図	31
第27図	007号住居址出土遺物実測図(1)	32
第28図	007号住居址出土遺物実測図(2)	33
第29図	007号住居址出土遺物実測図(3)	34
第30図	008号住居址実測図	36
第31図	008号住居址出土遺物実測図(1)	37
第32図	008号住居址出土遺物実測図(2)	38
第33図	009号住居址実測図	39
第34図	009号住居址出土遺物実測図	39
第35図	010号住居址実測図	41
第36図	010号住居址出土遺物実測図(1)	42
第37図	010号住居址出土遺物実測図(2)	43
第38図	011号住居址実測図	45
第39図	011号住居址出土遺物実測図	46
第40図	012号住居址実測図	48
第41図	012号住居址出土遺物実測図	49
第42図	013号住居址実測図	51
第43図	013号住居址出土遺物実測図	51
第44図	014号住居址実測図	52
第45図	014号住居址出土遺物実測図	52

第46図	015号住居址実測図	53
第47図	015号住居址出土遺物実測図	54
第48図	016号住居址実測図	56
第49図	016号住居址出土遺物実測図	57
第50図	017号住居址実測図	58
第51図	017号住居址出土遺物実測図	58
第52図	018号住居址実測図	60
第53図	018号住居址出土遺物実測図	60
第54図	019号住居址実測図	61
第55図	019号住居址出土遺物実測図	61
第56図	020号住居址実測図	62
第57図	020号住居址出土遺物実測図	62
第58図	021号住居址実測図	64
第59図	021号住居址出土遺物実測図	64
第60図	1号火葬墓実測図	66
第61図	1号火葬墓出土遺物実測図	66
第62図	2号火葬墓実測図	67
第63図	2号火葬墓出土遺物実測図	67
第64図	1号溝実測図	69
第65図	1号溝出土遺物実測図	69
第66図	1号土壤実測図	69
第67図	縄文土器拓影図	70
第68図	表面採集遺物及び近世以降の出土遺物実測図	70

図 版 目 次

- 図版 1 1. 遺跡遠景
2. 遺跡全景
- 図版 2 1. C地点遺物出土状況
2. D地点遺物出土状況
- 図版 3 1. C地点出土遺物
2. C、D地点出土遺物

- 图版 4 1. 008、012、013号住居址
2. 001、002、003、004、021号住居址
- 图版 5 1. 001号住居址全景
2. 002号住居址全景
- 图版 6 1. 004号住居址全景
2. 004号住居址遗物出土状况
- 图版 7 1. 005号住居址全景
2. 006号住居址全景
- 图版 8 1. 007号住居址全景
2. 007号住居址遗物出土状况
- 图版 9 1. 008号住居址遗物出土状况
2. 010号住居址全景
- 图版10 1. 010号住居址遗物出土状况
2. 010号住居址遗物出土状况
- 图版11 1. 011号住居址全景
2. 012号住居址遗物出土状况
- 图版12 1. 013号住居址全景
2. 015号住居址全景
- 图版13 1. 016号住居址全景
2. 017号住居址全景
- 图版14 1. 018号住居址全景
2. 021号住居址全景
- 图版15 001、002、004号住居址出土遗物
- 图版16 005、006、007号住居址出土遗物
- 图版17 007号住居址出土遗物
- 图版18 008、010号住居址出土遗物
- 图版19 010、012、013、015号住居址出土遗物
- 图版20 015、017、018号住居址、1号、2号火葬墓出土遗物
- 图版21 1. 石製模造品、滑石原石、铁製品
2. 轻石
- 图版22 1. 1号火葬墓
2. 2号火葬墓

第1章 序 説

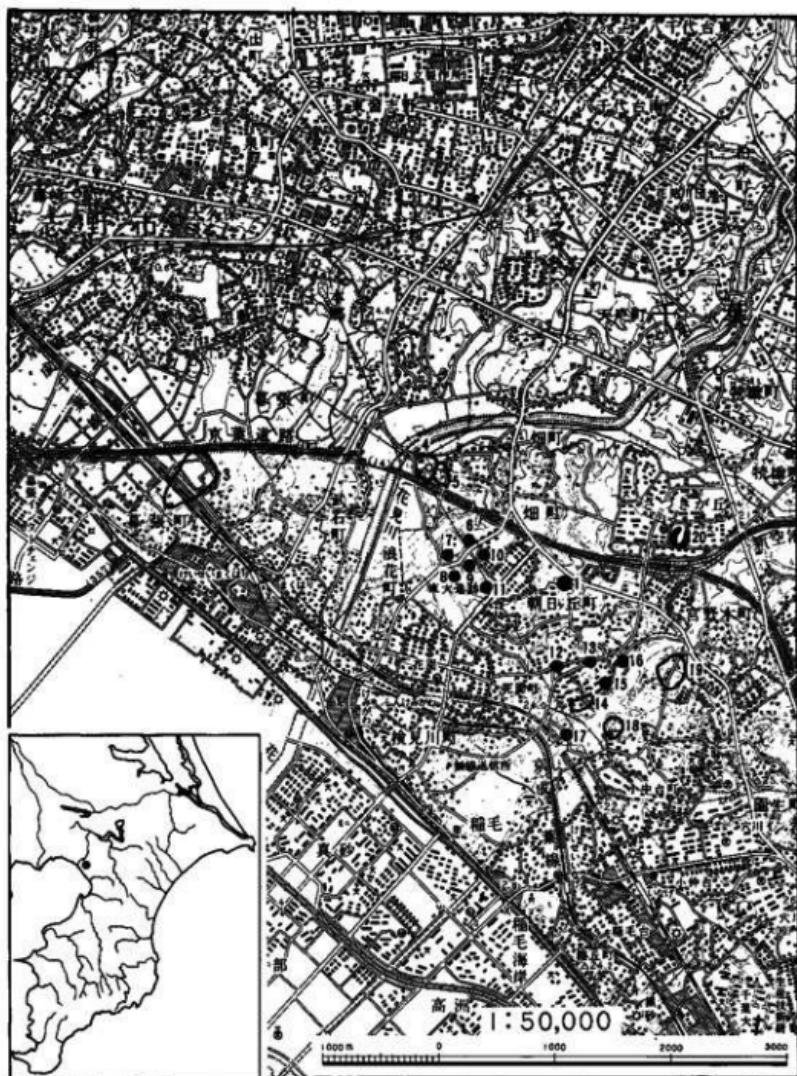
第1節 発掘調査に至る経緯

蓑輪遺跡は、住宅・都市整備公団東京支社によって計画されたサニータウンみのわ台の造成工事に伴って記録保存の対象となった遺跡である。住宅・都市整備公団東京支社によって計画されたサニータウンみのわ台事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会によって千葉県教育庁文化課は試掘調査を行い、古墳時代前・中期の遺構の所在することを確認し、その旨回答した。本遺跡の取扱いについて千葉県教育庁文化課では、住宅・都市整備公団東京支社と協議を重ねた結果、現状保存は困難であるとの結論に達し、記録保存の措置をとることで協議が整い、調査機関として財団法人千葉県文化財センターを指定した。これにより千葉県文化財センターは、住宅・都市整備公団東京支社と発掘調査についての詳細な調整を行い、発掘調査の委託契約が締結され、調査のはこびとなったものである。

蓑輪遺跡（調査面積5,000m²）の発掘調査は、当初昭和58年11月1日から翌59年3月31日までを調査期間として実施したが、作業が順調に進捗したため3月7日をもって終了した。これに伴って8日以降31日までは記録類の整理、および遺物の水洗、注記作業を実施し、昭和58年度の作業を完了した。昭和59年度は発掘調査で得られた資料の整理から分類、分析をし、報告書作成作業を実施すべく、4月1日より作業を開始し、9月29日をもって当初計画の通り原稿執筆まで完了した。

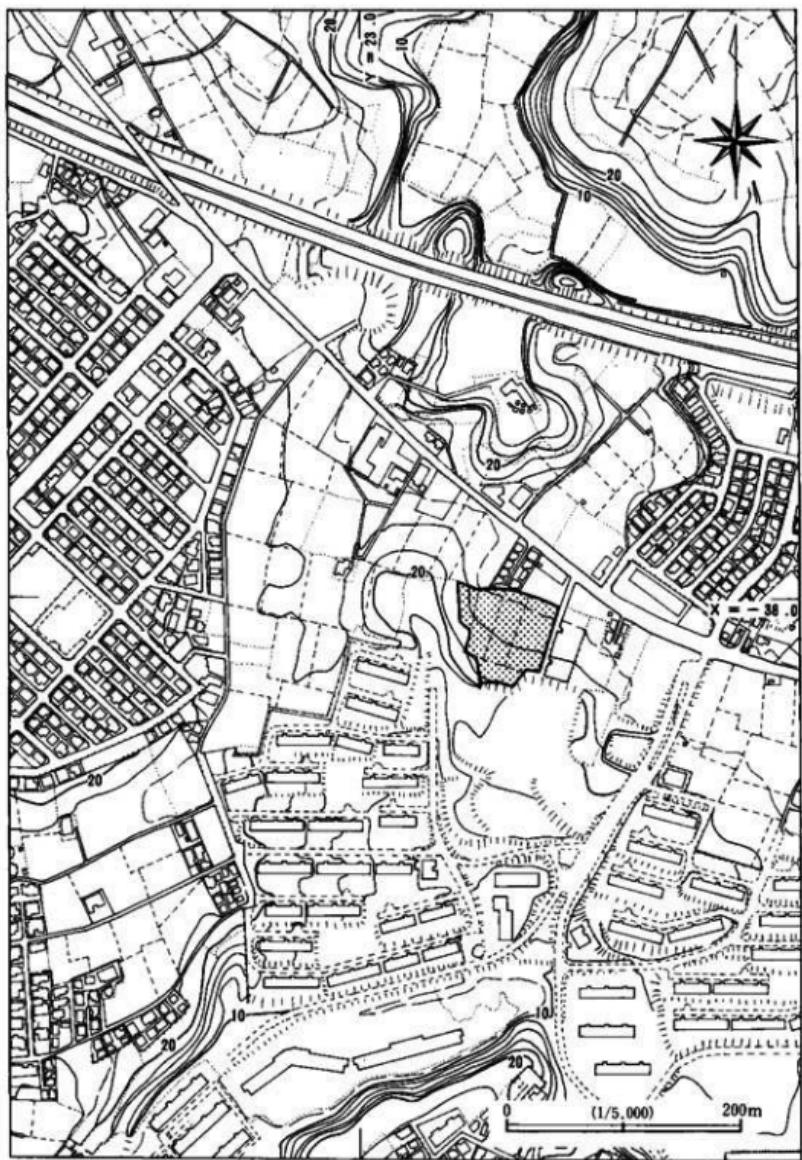
第2節 遺跡の環境と周辺遺跡（第1・2図）

蓑輪遺跡は、千葉市畑町626番地他に位置する。本遺跡は、東京湾に流入する花見川の小支谷に開析された台地上に所在している。沖積平地の少ない花見川は、河口近くに至り初めて沖積平地を形成するが、その花見川本谷の沖積地を本流から約1.7km遡った鶴牧支谷の最奥部に南面して本遺跡の所在する台地が位置している。台地は花見川によって樹枝状に複雑に開析され、遺跡付近では瘦尾根状を呈している。南側には本遺跡の面する鶴牧支谷、北側には上流より別の支谷が入り込んでいる。遺跡の所在する台地は、標高約25mで、支谷の基底面標高約10mとの比高15mを測り、調査区では北東から南西に極めてゆるく傾斜しており日照、通風、排水の良好であったことが窺われる。周辺の台地も標高約20~25mを測り、旧海岸線近く迄台地が切迫している。現在では旧海岸線から沖へ約2.6km先迄埋立が行われ、昔日の面影も全くないが、埋立以前は干潮時には約1kmの干潟が広がる砂浜海岸であった。本遺跡から旧海岸線迄の直線距離は約2.2kmを測る。



- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|--------------|-----------|
| 1. 裏輪遺跡 | 2. 外原遺跡 | 3. 上ノ台遺跡 | 4. 宮ノ後(宮跡)遺跡 | 5. 子安古墳群 |
| 6. 郡林遺跡 | 7. 犀山古墳 | 8. 落合遺跡 | 9. 中鶴牧遺跡 | 10. 上鶴牧遺跡 |
| 11. 鶴牧貝塚 | 12. 木戸尻遺跡 | 13. 烏込遺跡 | 14. 烏込貝塚 | 15. 烏込東貝塚 |
| 16. 烏込東遺跡 | 17. エグダ遺跡 | 18. 谷津台貝塚 | 19. 宮野木原遺跡 | 20. 横瀬貝塚 |

第1図 裏輪遺跡及び周辺遺跡位置図（国土地理院発行1/50,000地形図、千葉・佐倉を使用）



第2図 賽輪遺跡周辺地形図（千葉市発行 千葉市基本図IX-LE, 25-4を基に縮小編集）

本調査区は、台地南端の南と西を谷に面した北東から南西への極めて緩い傾斜の台地上に位置している。調査区内の最高所25.2m、最低所21.5mの比高3.7mを測るが、一部で谷の傾斜が始まっているため、遺構は23.5mから25.2mの部分に検出されていて、肉眼的には、台地先端のほぼ平坦地とみることができる。本遺跡の広がりについて言及するならば、遺構の検出状況、周辺地形からみて調査区の北側、東側へ更に続くことが考えられる。調査区西側は、南北から谷が入り込み平坦地をほとんど持たないため、遺跡の広がる可能性はまず考えられず、調査区の位置する台地平坦部の延長方向をみると、谷に南面する台地平坦部が東側へ広がっており、平坦部もかなり広い。このことと遺構の検出状況を考え合わせると、調査区の北側と東側へ遺跡の広がりが求められよう。

次に本遺跡周辺の遺跡に目を向けてみることにする。先土器時代は調査例が少なく、鳥込東遺跡⁽¹⁾、谷津台貝塚⁽²⁾で遺物が検出されている程度で今後の調査が期待される。次に縄文時代の遺跡についてみると、東京湾に面したこの地域は貝塚が多く知られ、本遺跡周辺には、谷津台貝塚⁽³⁾、櫛橋貝塚⁽⁴⁾、鳥込東貝塚⁽⁵⁾、鳥込貝塚⁽⁶⁾、鶴牧貝塚⁽⁷⁾等があげられ同時代の遺跡と併せて早期から晩期迄、長い時期にわたる生活の跡が見いだせる。弥生時代の遺跡は減少し、上ノ台遺跡⁽⁸⁾、大賀蓮の出土がよく知られる泥炭遺跡の落合遺跡、宮の後（宮脇）遺跡⁽⁹⁾が確認されているのみである。古墳時代以降は再び遺跡も増加し、古墳も子安古墳⁽¹⁰⁾群、殿山古墳⁽¹¹⁾等があげられるが、未調査のものが多く、その実態は不明といわざるをえない。集落遺跡としては、上ノ台遺跡、宮の後（宮脇）遺跡、中鶴牧遺跡⁽¹²⁾、御林遺跡⁽¹³⁾、宮野木原遺跡⁽¹⁴⁾等があげられるが、本遺跡と同時期の集落の調査例は少なく、上ノ台遺跡、宮の後（宮脇）遺跡、やや隔たるが、船橋市外原遺跡⁽¹⁵⁾が知られる程度である。又、該期の古墳の調査例もなく、今後集落と古墳との関連についても注目する必要があると思われる。

注

- (1) 千葉市史編纂委員会 「千葉市史 史料編 1」 千葉市 1976
- (2) 山口直樹他 「千葉市谷津台貝塚」 帰千葉県文化財センター 1983
- (3) 宍倉昭一郎 「縄文前期の遺跡」「千葉市史 第1巻」 千葉市 1974
青木 豊他 「谷津台貝塚」 千葉市遺跡調査会 1982
- (4) 山口直樹他 「千葉市谷津台貝塚」 帰千葉県文化財センター 1983
- (5) (1)に同じ
- (6) 神尾明正 「千葉市鳥込東貝塚発掘略報」「千葉県文化財調査報告書」 1964
神尾明正 「千葉県千葉市鳥込東貝塚」「日本考古学年報15」 日本考古学協会
- (7) 内野美三郎他 「鳥込貝塚」 1971
- (8) (1)に同じ
- (9) (1)に同じ
- (10) 玉口時雄他 「宮脇」「宮脇遺跡調査団」 1973
- (11) (1)に同じ

- (1)に同じ
(1)に同じ
(1)に同じ
(1)に同じ
道沢 明 「千葉市・宮野木原遺跡発掘調査報告書」 1981
(1)に同じ
八幡一郎他 「外原」 船橋市教育委員会 1972

第3節 調査の方法と経過、層序（第3・4・5図）

（1）調査の方法と経過

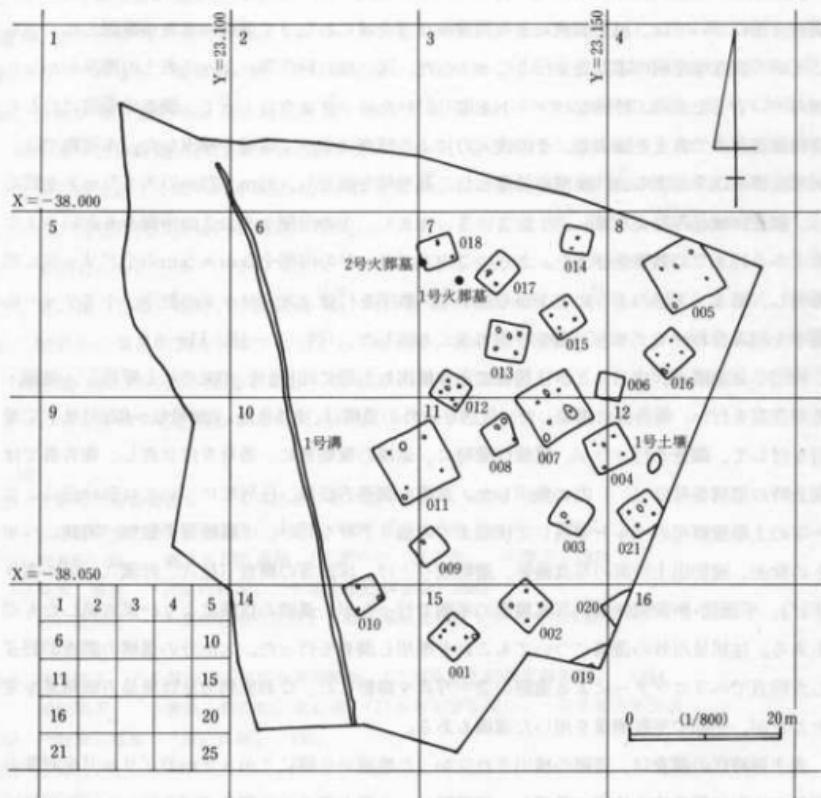
糞輪遺跡の発掘調査は、昭和58年11月1日から翌59年3月31日迄の契約で調査を開始した。調査方法については、試掘調査により調査地ほぼ全域にわたって遺構の存在が確認されていることから調査地全域の本調査を行うこととした。又、畑の耕作等によって表土の擾乱がかなり進んでいることから、特殊なバケットを取り付けたバックホウによって、調査地全域にわたり遺構確認面まで表土を除去し、その後人力による精査によって遺構を検出した。本遺跡では、国家座標系IX系による公共座標を基準として基準杭を設定し、25m×25mの大グリッドを設定し、調査区域北西端より東へ、1、2、3、4とし、1の南側を5、2の南側を6というよう1から16までの数字を与えた。さらにこの大グリッドの内部を5m×5mの小グリッドに25分割し、第3・4図のように、1から25までの数字を付け、大グリッドの数字、小グリッドの数字を組み合わせてグリッド名を呼称することにした。（例 2-18、11-8）

検出した遺構は、ほとんどが住居址であり検出した順に001号址、002号址と呼称し、発掘・整理作業を行い、報告書に掲載した。住居址以外の遺構は、025号址、026号址～028号址まで番号を付して、調査を行ったが、整理作業時に、遺構の種類別に、番号を付け直し、報告書では調査時の遺構番号は（ ）内に表示した。遺構の調査方法は、住居址については四分法により十字の土層観察用のベルトを残して床面までの掘り下げを行い、土層断面の観察、実測、ベルトの除去、遺物出土状況の写真撮影、遺物取り上げ、床面等の精査（柱穴、貯蔵穴、炉の掘り下げ）、平面図・断面図作成、写真撮影の手順を行ったが、遺構の状態により一部省略したものもある。住居址以外の遺構についてもこれを準用し調査を行った。大部分の遺構の調査が終了した時点でのリコプターによる遺跡の空中写真を撮影した。なお実測方法は簡易方眼測量を主としたが、一部で平板測量を用いた遺構もある。

先土器時代の調査は、遺構の検出されなかった地域から順に2m×2mのグリッドを対象の面積の4%に相当する比率で設定し、武藏野ローム層上面までの掘り下げを行った。その後、遺物の出土した4箇所についてA地点から順にB、C、D地点と呼称して本調査へ移行し、その周辺を拡張し、遺物の分布状況を調査した。調査は遺物出土状況の写真撮影、遺物出土状況

の図面作成、遺物取り上げ、土層断面実測の順で行ったが一部前後、省略した箇所もある。

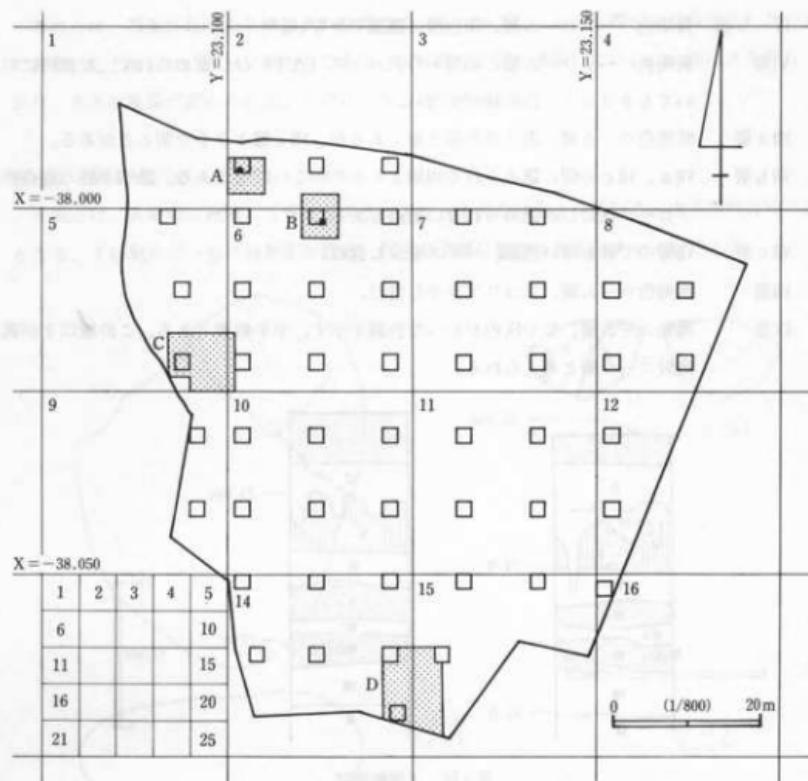
当初の契約では3月31日迄を調査期間としていたが、調査の進捗により調査期間の短縮が可能となった。そこで三者で協議を行った結果、調査期間を3月7日迄とすることとし、それ以降は整理作業を行うということで契約変更がなされた。そして3月7日に発掘調査の終了確認を行い調査を終了し、整理作業を開始した。調査期間が厳冬であり特に何十年に一度という寒波の中で連日の地面の凍結、降積雪によって作業能率が低下したが、調査の進捗に大きな影響を及ぼすことなく無事調査を終了した。



第3図 グリッド配置及び遺構分布図

調査の結果下記のとおりの遺構が検出された。

先土器時代の遺物出土地点	4
古墳時代の住居址	21
歴史時代の火葬墓	2
溝	1
土 壤	1



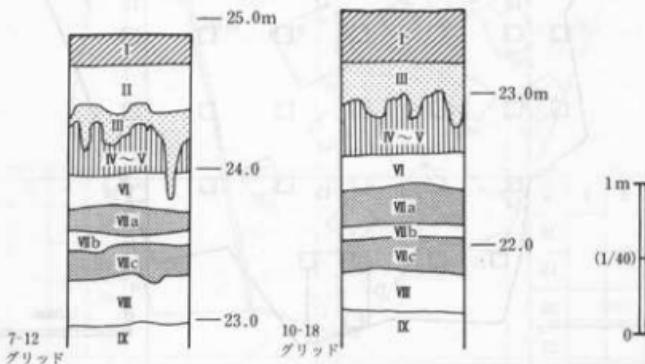
第4図 グリッド配置及び先土器時代調査図

(2) 層序

蓑輪遺跡の層序は、第5図のとおりである。台地平坦面の7-12グリッドと、西面した緩斜面の始まる10-18グリッドの北壁断面を標準層序としてあげておく。

VI層中にしばしば観察される始良・丹沢バミス(AT)のブロックは、肉眼では確認出来なかった。又第I黒色帶(V層)は、確認できず、第II黒色帶(VII層)は、中間にやや明るい間層(VIIb層)⁽¹⁾が認められた。

- I層 表土層。畑の耕作による擾乱が認められる。
- II層 暗褐色土層。ソフトローム漸移層。調査区全域に認められるものではなく部分的に認められる。
- III層 ソフトローム層。
- IV～V層 黄褐色ハードローム層。黒色帶は確認できない。
- VI層 黄褐色ハードローム層。始良・丹沢バミス(AT)は、認められず、乾燥時においてもクラック、白色味が少ない。
- VIIa層 暗褐色ローム層。第2黒色帶土層であるが、VIIc層よりやや明るさがある。
- VIIb層 VIIa、VIIcの間に認められる両層よりやや明るい間層である。識別不能の地点や、ブロック状にしか認められない地点もある。
- VIIc層 VII層中で最も暗い色調。バミスを少し含む。
- VIII層 黄褐色ローム層。スコリアを少し含む。
- IX層 褐色ローム層。やや灰色がかった色調を示す。やや軟質である。この層以下が武藏野ローム層と考えられる。



第5図 土層断面図

注

- (1) 大原正義他『佐倉市星谷津遺跡』(財)千葉県文化財センター 1978
 (財)千葉県文化財センター『房総考古学ライブラリー1 先土器時代』 1984

第2章 検出した遺構と遺物

第1節 先土器時代

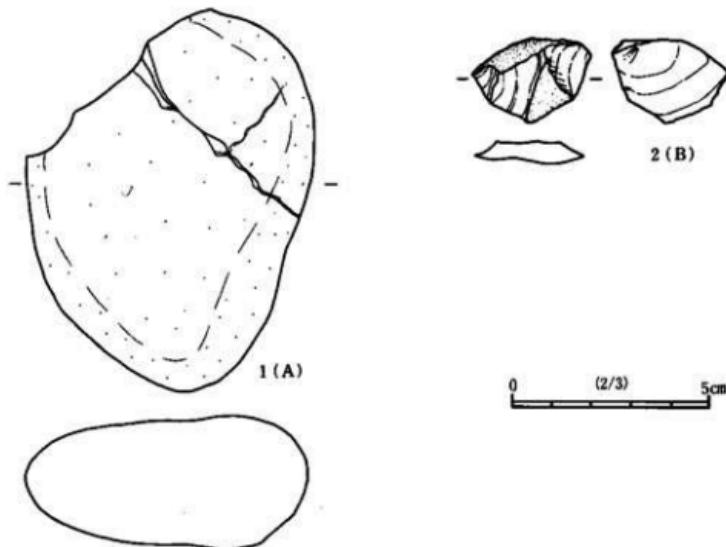
先土器時代石器群の調査は、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドの確認調査の結果、III層（ソフトローム層）以下より遺物の検出された4地点を拡張して精査を行った。遺物を検出した4地点を北から順に、A地点、B地点、C地点、D地点として取り扱い、拡張の結果、A地点、B地点は、確認時検出の1点のみの出土にとどまり、C地点22点、D地点211点の遺物の出土をみた。

A地点（第4・6図）

本地点は、調査区北端より検出された地点で、2-16グリッドから砾が1点検出されたのみである。出土層位は、IV～V層中位である。1は砾で上部を破損している。全体に火を受けており、大きな亀裂が認められる。石材は、安山岩である。

B地点（第4・6図）

本地点は、A地点に近隣して6-3グリッドから1点だけ出土している。出土層位はVIIc層となる。2は剥片で一部に自然面が残る。打点が上部に観察される。チャートである。

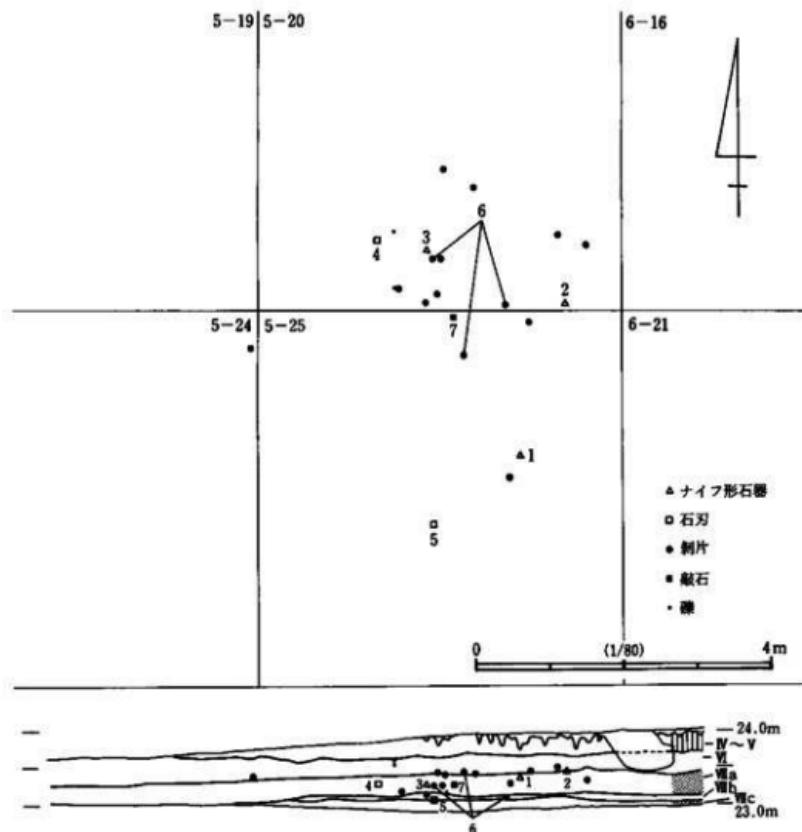


第6図 A・B地点出土遺物実測図

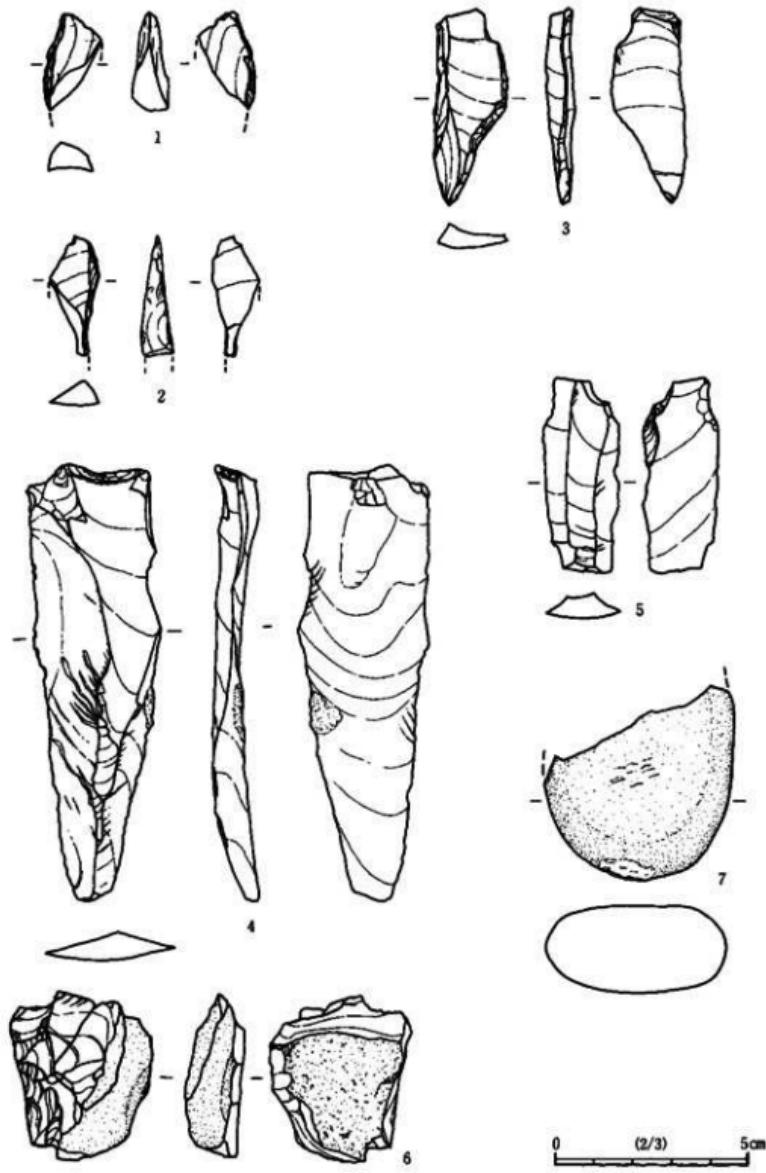
C地点 (第7・8図 図版2・3)

本地点は、調査区西側5-20・24・25グリッドより検出された地点である。本地点は、谷に西面した台地平坦部の崖際で谷への緩傾斜の始まる地点に存在している。遺物点数は22点を数え、出土層位は高低差にして約60cm、VI層上位からVIIb層にわたるが、概ねVI層下位からVIIa層にかけてとみてよからう。検出した遺物は、ナイフ形石器3、石刃2、敲石1、剝片14、礫2となっており、剝片のうち3点が接合した。石材別にみると、頁岩7、チャート4、蛇紋岩1、ホルンフェルス1、凝灰岩1、珪質岩2、黒曜石6となる。

遺物 1～3はナイフ形石器である。1、2共に切り出し形を呈し、基部を破損している。1は幅広の縦長剝片の両端を切断している。正面左側には急斜度のプランティングが認められる。刃部は素材の剝片の縁辺を加工せずにそのまま使用したものである。石材は頁岩である。



第7図 C地点遺物出土状況図



第8図 C地点出土遺物実測図

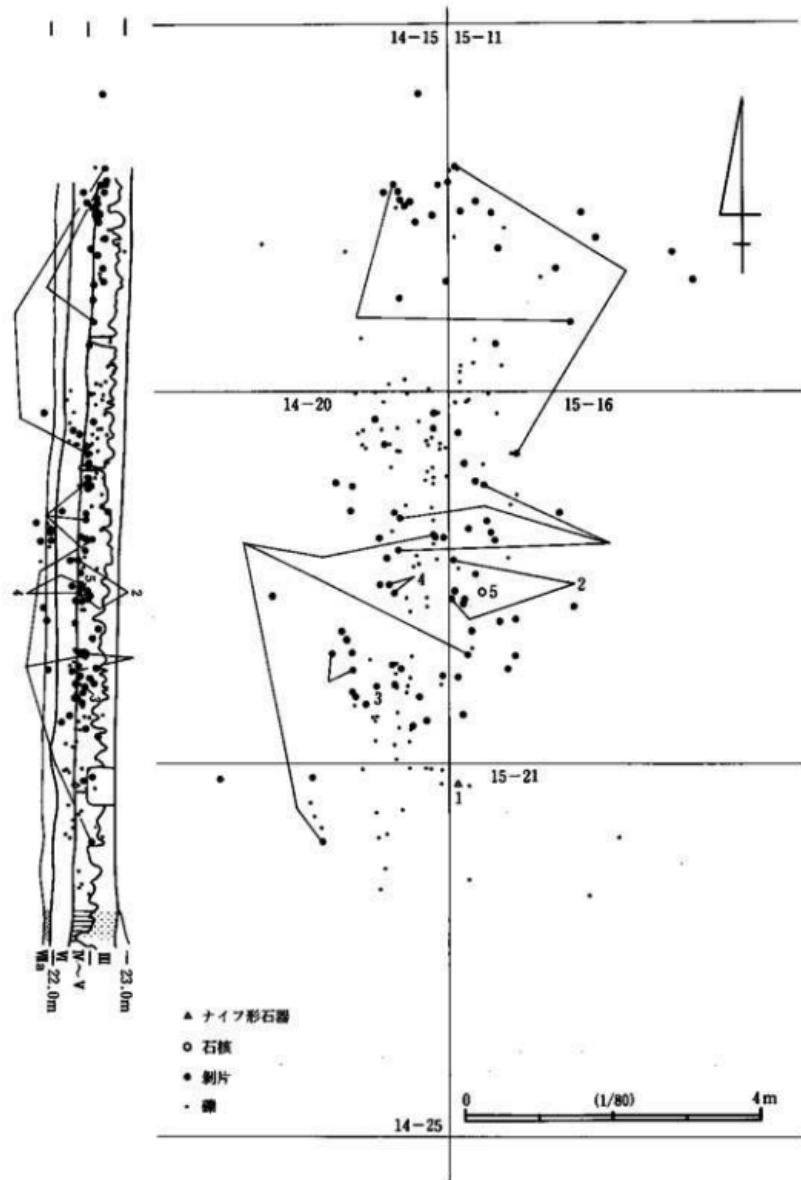
2も縦長剝片で正面左側に急斜度のプランティングが認められる。刃部には一部使用痕と思われる刃こぼれがみられる。石材は頁岩である。3は、縦長剝片を加工したもので、両縁に急斜度のプランティングが認められる。石材は頁岩である。4、5は石刃である。4は打面、打点がよく確認でき、両縁に使用痕と思われる小さな刃こぼれが多数認められる。石材はチャートである。5は表面に平行な稜が2条みられる。石材は頁岩である。6は接合資料で3点が接合したものである。自然面が多く残る原石からの連続した剝離が観察される。石材はチャートである。7は敲石で下端に打撃痕がみられる。火を受けており上半は破損している。石材は蛇紋岩である。

D地点（第9・10・11・12・13図 図版2・3）

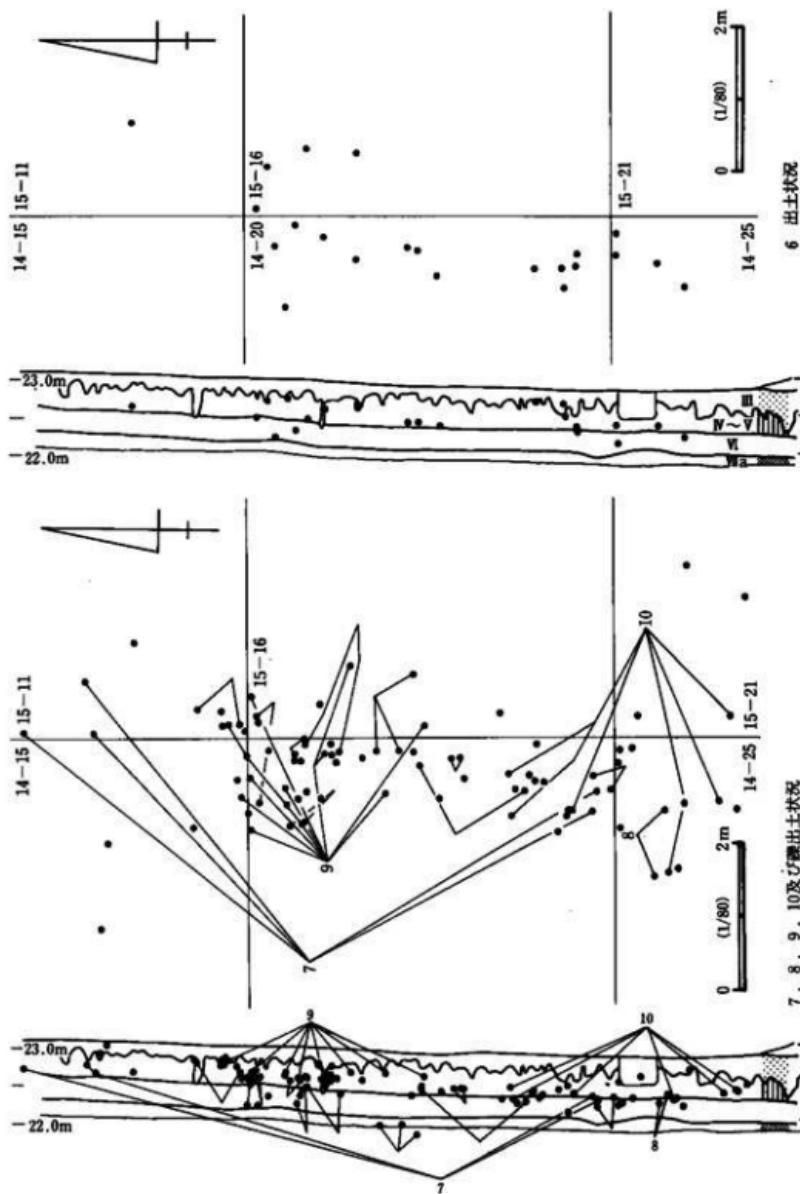
本地点は調査区南側の14-15・20・25、15-11・16・21グリッドより遺物が検出された。南北約10m、東西約6mの広がりを持ち、高低差も最大1m近くあり二つのユニットに分離されるべきかもしれない。しかし接合した同一個体の縁の平面の隔たりが8m、高低差60cmというものもあり、ここでは一つのまとまりとしてとらえておく。出土層位はIV～V層上位からVIIb層付近に迄及ぶが、垂直分布をみると中心となるのはIV～V層とVI層の境界付近とみられる。

検出した遺物は総数211点を数え、ナイフ形石器1、剝片92、石核1、礫117となっており、そのうち剝片は12点が接合して5個体となり、礫は67点が接合して14個体となった。礫は火を受けた破碎礫が大部分を占め、接合する点数も多く分布もユニット全域に及んだが原形を窺えるものは少なかった。石材別にみると、チャート12、珪岩5、安山岩89、砂岩56、流紋岩40、蛇紋岩7、泥岩1、黒曜石1となり、石器、剝片についてみると、94点中89点が安山岩で多数を占めている。

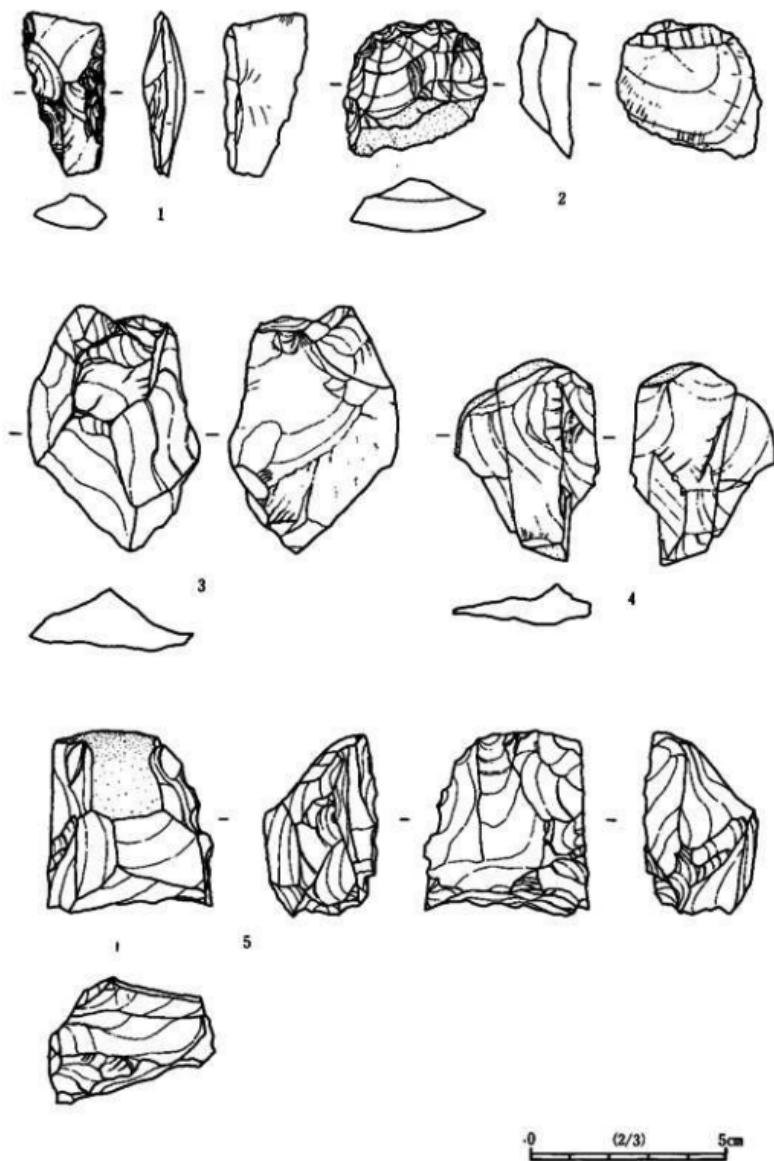
遺物 1はナイフ形石器で切り出し形を呈し幅広の縦長剝片の両端を折断しており、両縁にプランティングが認められる。刃部は素材の剝片の縁辺をそのまま利用したものである。石材は安山岩である。2・4は接合資料である。2は2点が接合し、連続した剝離が観察される。表面に一部自然面が残る。石材はチャートである。4も2点が接合した例である。一部に自然面が残る安山岩である。3は比較的大型の剝片である。不規則な剝離が行われている。石材は安山岩である。5は石核と思われる。一部に自然面を残し、多方向から剝離されている。石材は安山岩である。6～10は礫である。復元度のよいもの、大きいものをとりあげる。すべて火熱を受けており、細片に破碎されている。石材は、6、8、10は砂岩、7、9は流紋岩である。6は22点が広範囲にわたって接合し、7は2か所に分散して出土接合している。



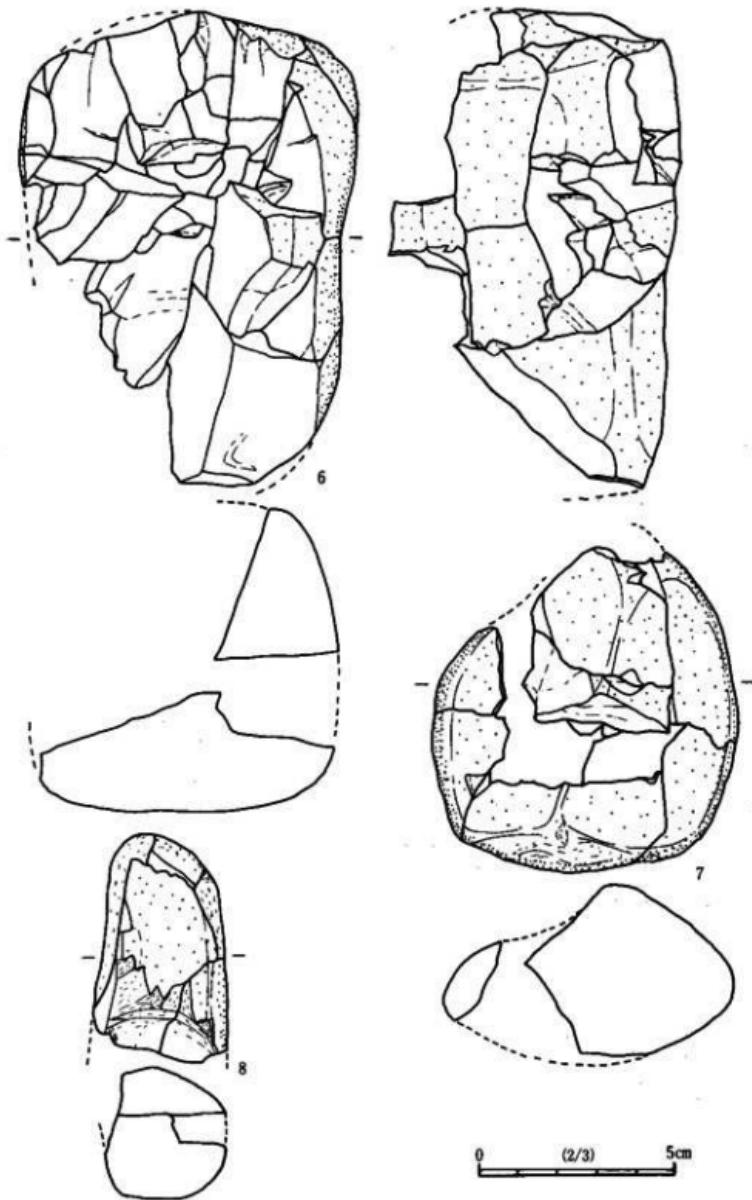
第9図 D地点遺物出土状況図



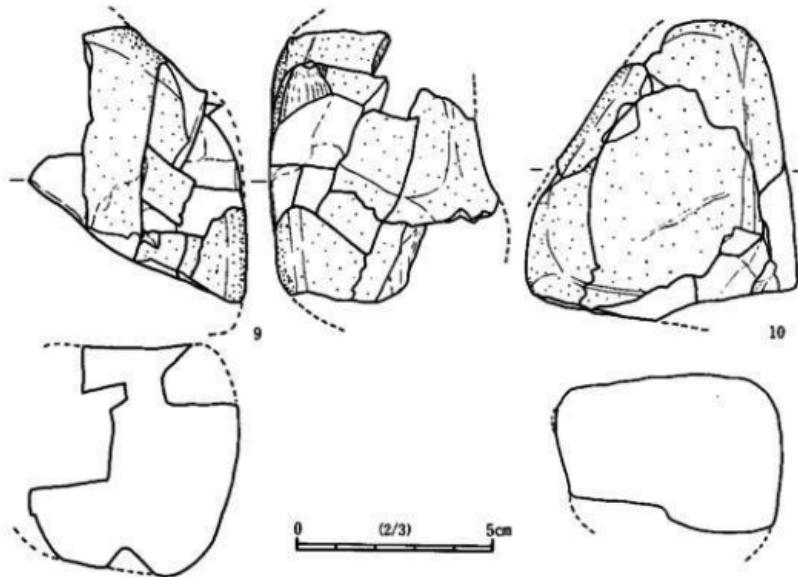
第10図 D地点縹出土状況図



第11図 D地点出土遺物実測図(1)



第12図 D地点出土遺物実測図(2)



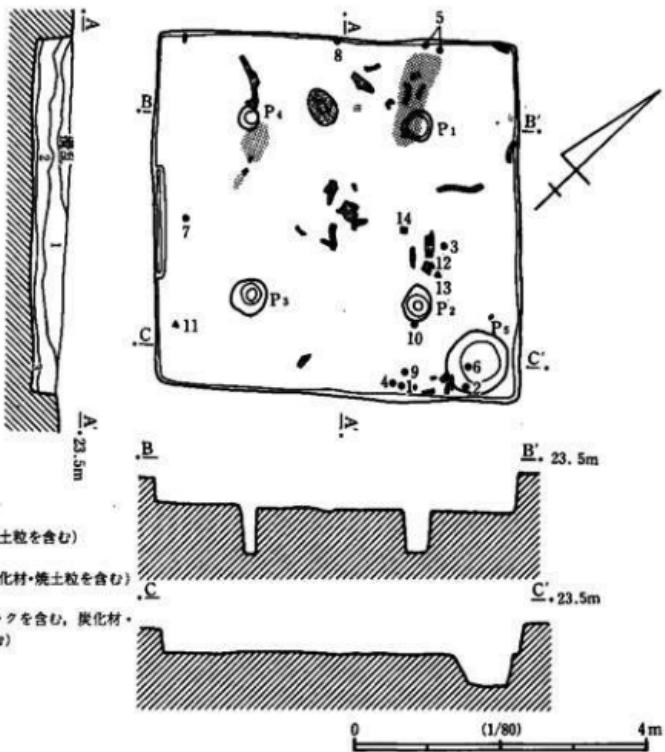
第13図 D地点出土遺物実測図(3)

第2節 古 墳 時 代

本遺跡の遺構の大部分を占めるのが古墳時代の住居址で、21軒検出された。調査区のほぼ東半部のみに存在し、重複関係を持つものではなく、ほぼ均一に分散して存在している。調査区外へ続いているものが4軒検出されており、遺跡の広がりは更に南東から北東へ続いている事が窺われる。

001号住居址（第14・15図 図版5・15・21）

本住居址は、調査区南側15-1・2・6・7グリッドに位置し、南西に向った緩斜面へ続く平坦面に所在している。4.9m×5.0mの方形を呈し、主軸方向はN-47°-Wを測る。掘り込みは深くしっかりとしており、壁は垂直に近く立上る。覆土は黒色土による自然埋没状態を示し、床面近くには炭化材・焼土を多く含んでいる。床面にも炭化材・焼土が分布しており、焼失住居であると考えられる。床面は堅く踏み固められており、周溝が南西壁の中央付近で、長さ1.5mにわたって検出された。柱穴は対角線上に規則正しく4本検出され($P_1 \sim P_4$)、柱間距離は



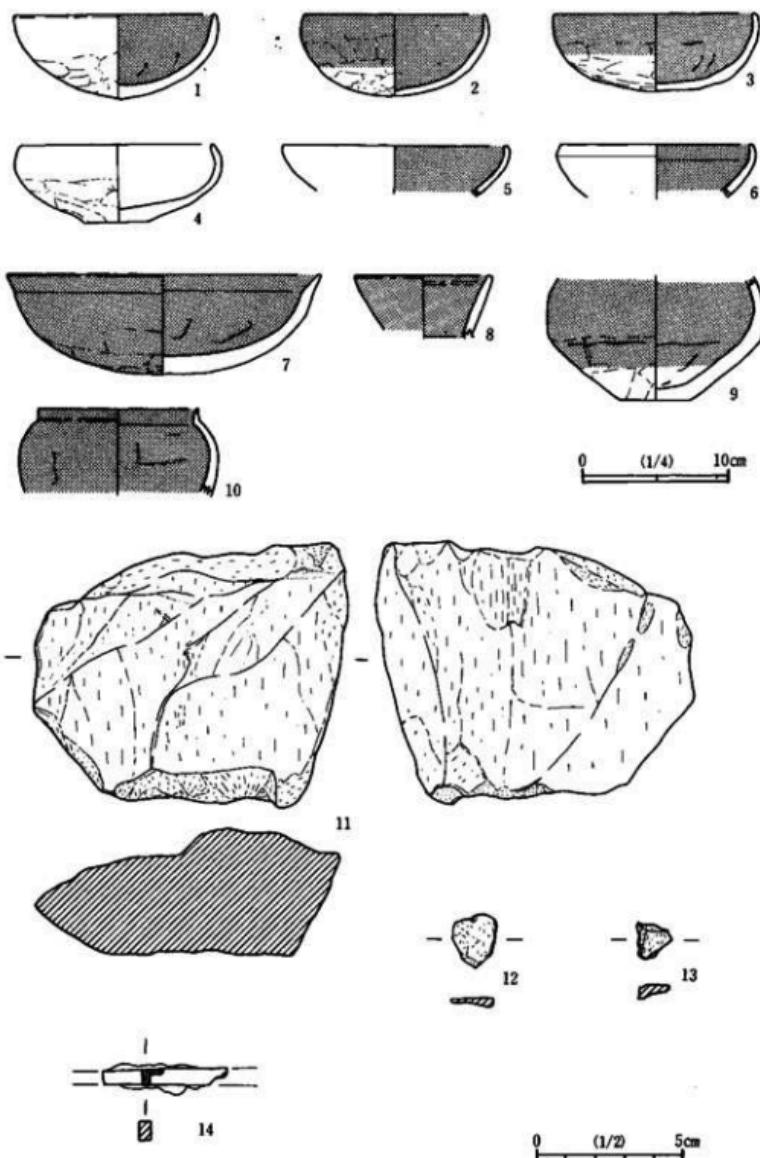
第14図 001号住居址実測図

各2.3m、2.5mを測る。貯蔵穴とみられるピット(P_s)が東コーナーから検出されている。各ピットの深さは、 P_1 57cm、 P_2 68cm、 P_3 46cm、 P_4 66cm、 P_5 45cmを測る。炉は北西壁寄りの P_1 、 P_4 のほぼ中間に位置し、50cm×35cmの楕円形を呈し、掘り込みは8cmの深さを測る。

遺物等出土状況 住居址全域に粗に分布する炭化材・焼土と共に遺物が分散して出土している。 P_s 周辺には、壙(1、2、4、6)、壇(9)がややまとまって出土している。滑石の原石1点(11)、破片2点(12、13)が出土しているが計3点しか検出されず、また成品は検出されなかった。

002号住居址 (第16・17図 図版5・15・21)

本住居址は、調査区南東15-3・4グリッドを中心に位置し、ほぼ平坦地に所在する。5.4m×



第15図 001号住居址出土遺物実測図

001号住居址出土遺物一覧（第15図）

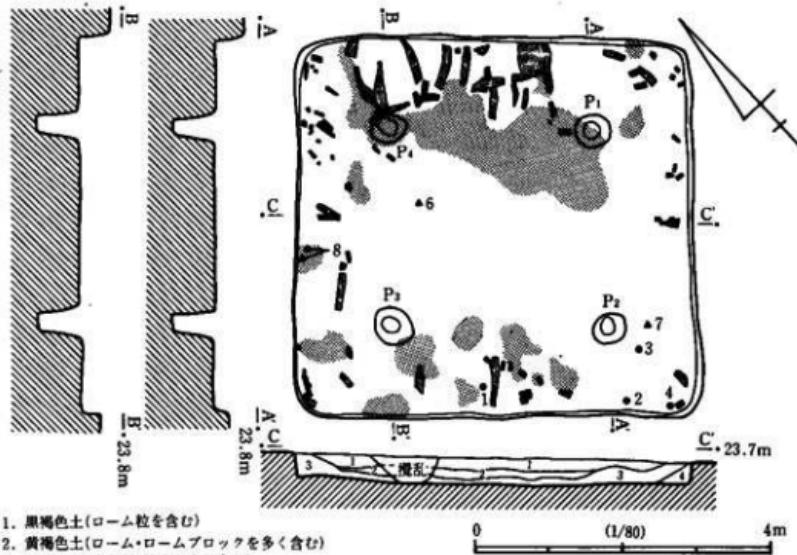
番号	名 称	遺 存 度	口 縁 ()推定	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	坏	%	14.2 5.8	口縁部内外面横ナデ、体部内外面ヘラケズリ後ナデ。赤影。	床面直上	二次焼成
2	坏	ほぼ完形	13.5 5.6	口縁部内外面横ナデ、体部内面ナデ、外面ヘラケズリ後ナデ。赤影。	床面密着	
3	坏	ほぼ完形	14.0 5.4	口縁部内外面横ナデ、体部内面。外面上部ヘラケズリ後ナデ、体下部ヘラケズリ。赤影。	床面直上	二次焼成
4	坏	ほぼ完形	13.2 5.4	口縁部内外面横ナデ、体部内面ヘラケズリ後ナデ、外面ヘラケズリ後粗いミガキ。底部ヘラケズリ。	床面直上	二次焼成 器面剥離
5	坏	口縁部%	(16.0)	口縁部内外面横ナデ、体上部内外面ヘラケズリ後粗いナデ。赤影。	床面直上	二次焼成
6	坏	口縁部%	(13.3)	口縁部内外面横ナデ、体部内面ヘラケズリ後ナデ、外面ヘラケズリ後粗いミガキ。赤影。	P ₃ 覆土	二次焼成
7	坏	ほぼ完形	21.5 7.2	口縁部上部内外面横ナデ、体下部内外面ヘラケズリ後ナデ。赤影。	床面直上	二次焼成 器面剥離
8	壇	口縁部完形	9.6 —	口縁部内外面横ナデ。赤影。	覆土	
9	壇	胴 部 %	—	輪積み。胴上部外面横ナデ、下部外面ヘラケズリ。内面ヘラケズリ後ナデ。底部ヘラケズリ。赤影。	床面密着	二次焼成 器面剥離
10	塊	%	(11.0)	口縁部内外面横ナデ。体上部内外面ヘラケズリ後ナデ。赤影。	床面密着	二次焼成
11	石製品	長さ8.8cm、幅10.9cm、厚さ4.3cmを測り、不整形を呈する。二面がやや平坦になっているが研磨の痕跡は認められない。滑石。覆土。				
12	石製品	長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。滑石。床面直上。				
13	石製品	長さ1.2cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmを測る。滑石。床面直上。				
14	鉄製品	長さ4.3cm、幅0.7cm、厚さ0.4cmを測る。両端を折損する。中央付近に桜皮が付着している。鉄錠と思われる。床面直上。				

5.2mのほぼ方形を呈し、長軸方向はN-45°-Wを測る。掘り込みはやや浅いがしっかりしており、壁はほぼ垂直に立上る。覆土は自然埋没の状態を示し、床面近くには炭化材・焼土が多く含まれている。床面には炭化材・焼土のやや密な分布がみられ、焼失住居であることが窺われる。床面は堅く踏み固められており、周溝は確認できなかった。柱穴は、対角線上に規則正しく4本検出され(P₁～P₄)、柱間距離は各2.7m、2.8mを測る。深さは、P₁: 56cm、P₂: 60cm、P₃: 58cm、P₄: 57cmを測る。貯蔵穴・炉は検出されなかった。

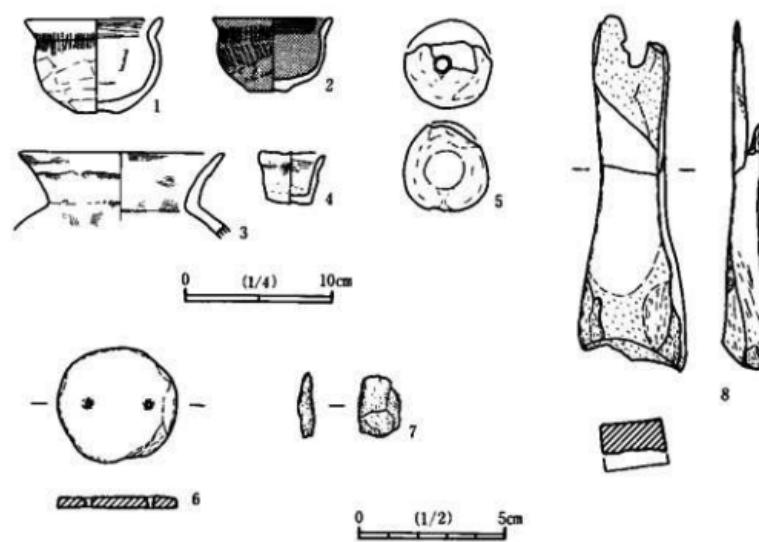
遺物等出土状況 ほぼ住居全域に焼土、炭化材の分布がみられる。遺物は量が少ないが、北西壁際から砥石(8)、P₃、P₄の中間付近に双孔円板(6)が出土している。

003号住居址（第18図）

本住居址は、調査区中央から南東寄りの11-14+15+19+20グリッドに位置している。4.7m×4.6mのゆがんだ方形を呈し、主軸方向はN-54°-Wを測る。掘り込みは浅く壁の立上りも緩やかである。覆土は、ほぼ単一な黒褐色土で床面近くに焼土を少し含んでいる。炉の上より炭化材の出土をみたが量が少なく焼土の分布もほとんどみられないため焼失住居とは言い難い。床面の中央は堅緻であるが、周囲は軟弱であった。周溝は南西、南東壁の一部に検出された。柱穴・貯蔵穴共に検出できなかったが、炉が大小2基検出された。大きい方は、80cm×65cm、



第16図 002号住居址実測図



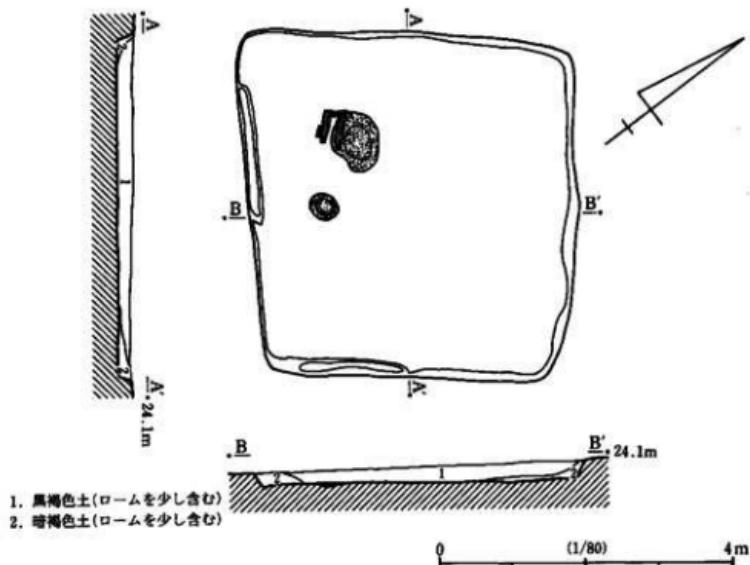
第17図 002号住居址出土遺物実測図

002号住居址出土遺物一覧 (第17図)

番号	名 称	遺 存 度	口 幅 (推定	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	塊	完 形	9.2 6.5	口縁上部ハケメ後ヨコナデ。下部ハケメ。胸 上部ヘラケズリ後ナデ、下部ヘラケズリ。内 面口縁ハケメ、胸上部ヘラケズリ後ナデ、下 部ナデ。底部ヘラケズリ。	床面直上	二次焼成
2	塊	ほほ 完形	8.2 5.0	口縁上部ハケメ後ヨコナデ。下部ハケメ。胸 上部ハケメ後ミガキ、下部ヘラケズリ。内 面口縁ハケメ、胸上部ハケメ後ナデ、下部ヘラ ケズリ後ナデ。底部ヘラケズリ。赤彩。	床面直上	二次焼成
3	壺	口縁部完形	14.1	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。頸部外面ハ ケメ後ミガキ。	床面密着	
4	ミニチュア	完 形	4.4 3.5	輪様み。口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。胸 部外面ナデ。頸部内部ヘラケズリ後ナデ。底 部ヘラケズリ。	床面直上	二次焼成
5	土 玉	半分欠損するが直径2.8cm、孔径0.5cmを測る。側面に平坦面があらわれる。二次焼成を受けている。覆 土。	—	—	—	—
6	双孔円板	径4.0cm、厚さ4mmを測る。基部に径2mmの小孔が2か所認められる。滑石。片岩質。床面直上。	—	—	—	—
7	石 製 品	長さ2.0cm、幅1.4cm、厚さ5mmを測る。8の破片と思われる。凝灰岩。床面密着。	—	—	—	—
8	砥 石	長さ11.9cm、幅3.6cm、厚さ1.4cmを測る。両端を折損し、裏面も剥離している。三面に使用痕が認め られる。凝灰岩。覆土。	—	—	—	—

深さ9cmを測り、小さい方は、40cm×30cm、深さ8cmの小規模なもので、一時的な使用
がなされたものと考えられる。

遺物等出土状況 炉上面より炭化材が検出されている他は、覆土中より土器の細片が少量出
土しただけで、図示できるようなものはなかった。

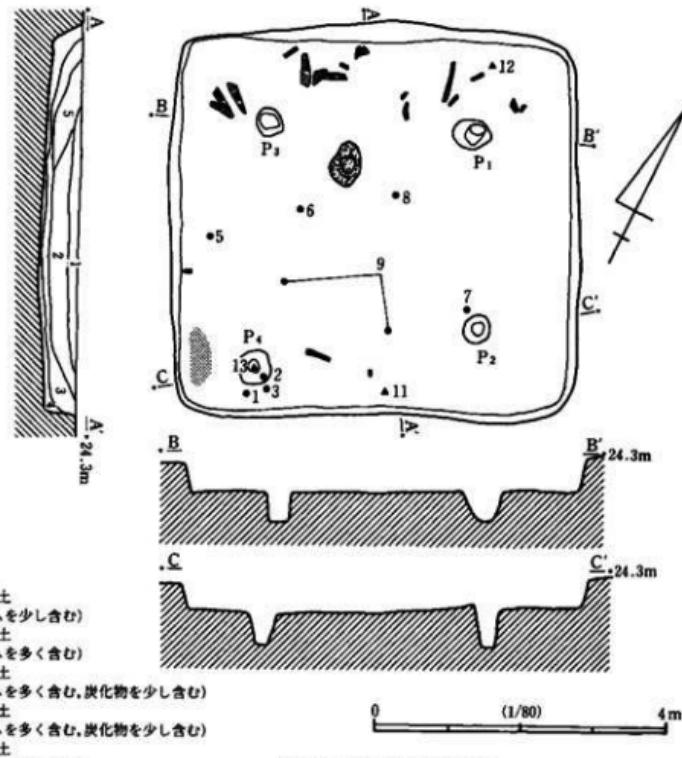


第18図 003号住居址実測図

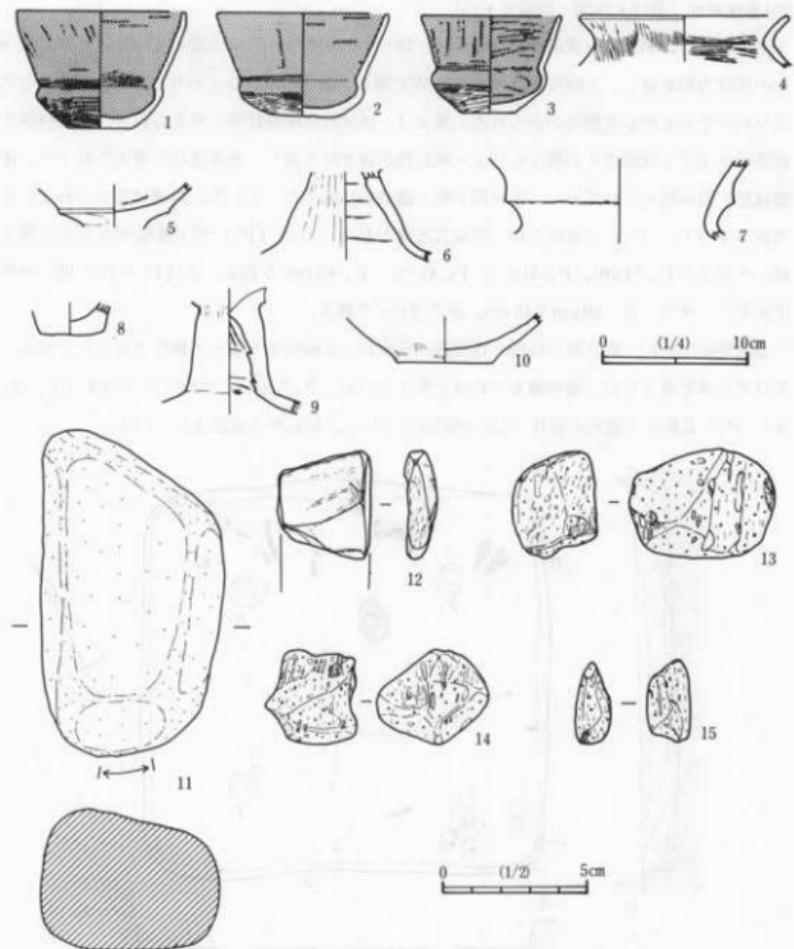
004号住居址 (第19・20図 図版 6・15)

本住居址は、調査区中央東側11-5・10、12-1・6グリッドに位置している。5.3m×5.6mのほぼ方形を呈し、主軸方向はN-28°-Wを測る。掘り込みはしっかりしているが、壁の立上りがややゆるやかな箇所がみられる。覆土は、ほぼ自然埋没状態と考えられる。炭化材が北西壁際に出土し床面近くの覆土に焼土・炭化物が含まれており、焼失住居と考えられよう。床面は堅く踏み固められており、中央部が極く緩やかに低くなっている。周溝は認められず、柱穴は3本($P_1 \sim P_3$)が確認され、貯蔵穴と思われるピット(P_4)が1基検出された。深さは、それぞれ P_1 44cm、 P_2 51cm、 P_3 42cm、 P_4 46cmを測る。炉は P_1 と P_3 の間、やや中央寄りに検出され、60cm×45cm、深さ8cmを測る。

遺物等出土状況 炭化材が住居北西壁側の床面から比較的まとまって検出されたが、量としてはそれほど多くない。遺物量もそれほど多くないが、 P_4 周辺から完形の埴3個体(1、2、3)、 P_1 の北側から磁石の破片(12)が出土している。軽石が3点出土している。



第19図 004号住居址実測図



第20図 004号住居址出土遺物実測図

004号住居址出土遺物一覧 (第20図)

番号	名 称	遺 存 度	口 径 高 (推定)	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	壺	完 形	12.0 8.2	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、外面胴上部ヨコナデ、下部ハケメ。内面胴部ヘラケズリ後ナデ。赤彩。	床 面 密 着	二次焼成 器面剥離
2	壺	完 形	12.0 7.2	口縁部外面ヘラケズリ後ヨコナデ、胴上部ヨコナデ、下部ハケメ。内面ヨコナデ。赤彩。	床 面 密 着	二次焼成 器面剥離

3	培	完 形	9.8 6.8	口縁部外面へラケズリ後ヨコナデ、胴上部ヨコナデ、胴部ハケメ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ、胴部内面へラケズリ後ナデ。赤彩。	床 面 密 着	二次焼成
4	甕	口縁部 %	(14.6) —	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、胴上部内外面ハケメ。	覆 土	
5	高 壁	壁 部 %	—	壺型内外面へラケズリ後ミガキ。	覆 土	
6	高 壁	脚 部 %	—	輪積み。脚部外表面へラケズリ後ミガキ。内面粗いナデ。	覆 土	二次焼成
7	甕	口縁部 %	—	口縁部外面へラケズリ後ミガキ、内面ミガキ。	覆 土	
8	ミニチュア	底 部 のみ 完 形	—	手窓ね。外表面指頭抨擦、内面へラケズリ後ナデ。底部へラケズリ。	覆 土	
9	高 壁	裾部を除く 脚 部 完 形	—	輪積み。脚部外表面ミガキ。内面上部へラケズリ、胴上部内面の圧痕一部あり。	床 面 着 上	二次焼成 器面剥離
10	甕	底 部 %	—	胴下部へラケズリ後ナデ。最下部ハケメ後ナデ。内面へラケズリ後ナデ。	覆 土	二次焼成
11	石 製 品			長さ11.1cm、幅6.3cm、厚さ4.8cmを測る。表面が極めて滑らかに磨かれている。下面一部に磨耗痕が認められる。砂岩。床面密着。		
12	砾 石			長さ3.7cm、幅3.2cm、厚さ1.2cmを測る。前面二面を使用しており磨耗が著しい。下端は折損している。凝灰岩。床面密着。		
13	軽 石			長さ3.8cm、幅4.9cm、厚さ2.9cmを測る。表面は平滑である。覆土。		
14	軽 石			長さ3.3cm、幅3.9cm、厚さ3.2cmを測る。一部表面は平滑である。覆土。		
15	軽 石			長さ2.8cm、幅1.5cm、厚さ1.2cmを測る。表面は平滑である。覆土。		

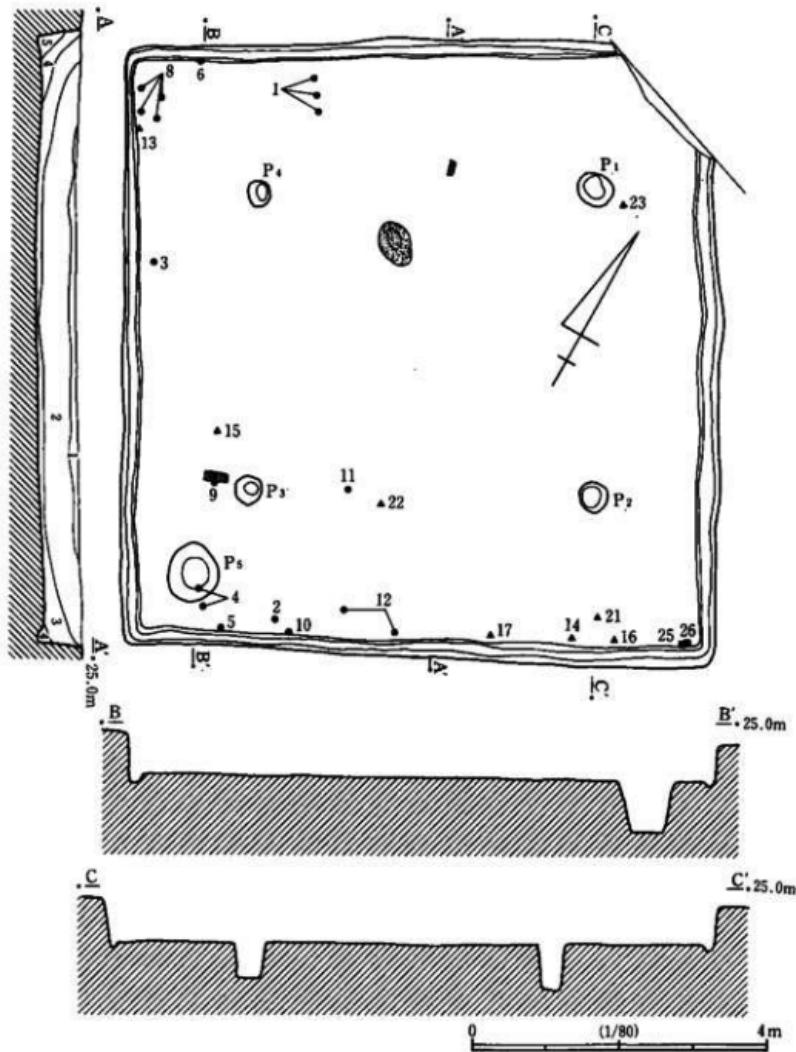
005号住居址（第21・22・23図 図版7・16・21）

本住居址は、調査区北東端部8-2・3・7・8・12・13グリッドに位置しており、北側コーナー部は調査区域外のため調査出来なかった。8.5m×8.1mのほぼ方形の大形の住居址で、主軸方向はN-30°-Wを測る。掘り込みは深く、しっかりしており、壁の立上りも垂直に近い。覆土は自然埋没の状態を示している。床面から極く少量の炭化材が検出されているが、焼失住居とみると炭化材が少なく焼土もほとんどみられないことから疑問が残る。床面は踏み固められておらず、軟弱である。周溝は未調査部分を除いて全周し、深さ5~20cmとばらつきがある。柱穴は規則正しく4本存在し($P_1 \sim P_4$)、柱間距離は、各々約4.1m、4.6mである。貯蔵穴(P_5)が南コーナーから検出され、80cm×70cmの大きさを示す。ピットの深さは P_1 45cm、 P_2 63cm、 P_3 72cm、 P_4 67cm、 P_5 71cmを測る。炉は P_1 と P_4 の中間や中央寄りに検出され、60cm×45cmの大きさで、深さ7cmと浅い。

遺物等出土状況 床面から極く少量の炭化材が検出されている。遺物は壁際から出土しており、量としては、それほど多くない。完形品も少なく、住居廃絶後の流れ込みか廃棄によるものと考えられよう。軽石が大小とわずかにわたり出土したこと、滑石片(23)が1点のみ出土したことが特筆されよう。

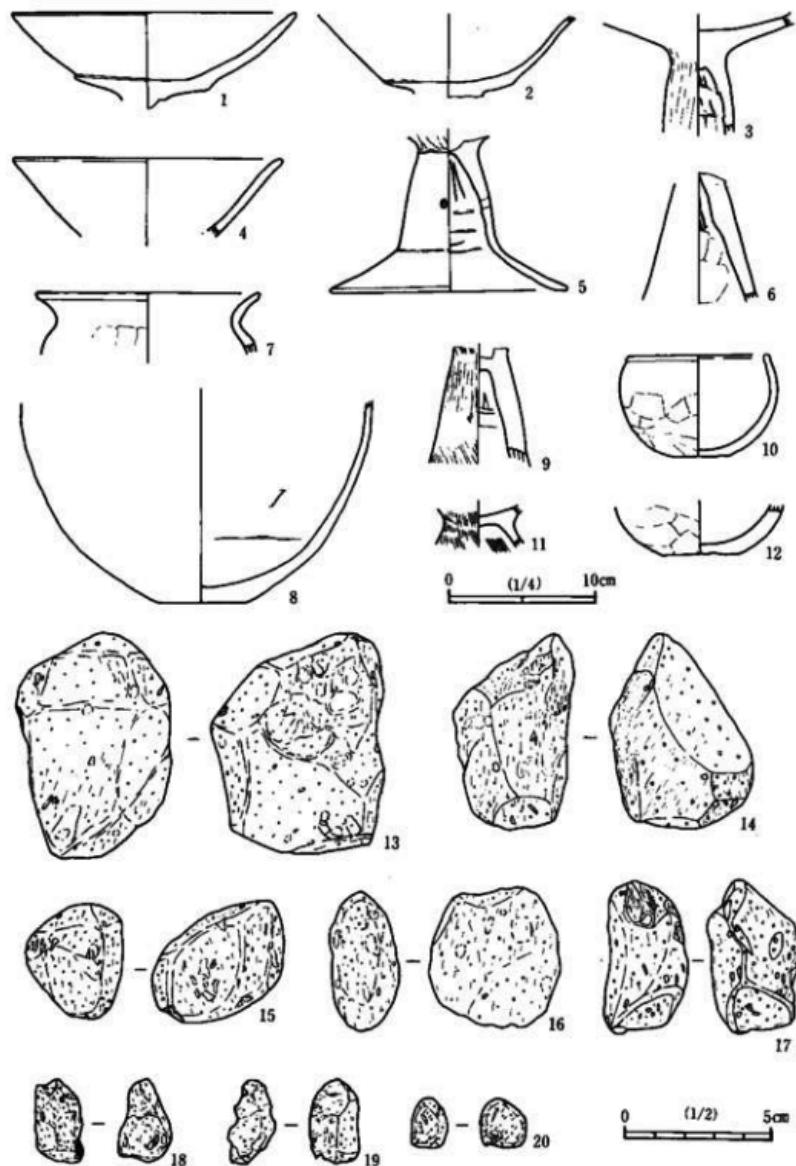
006号住居址（第24・25図 図版7・16）

本住居址は、調査区東側7-25、8-21グリッドに位置する。3.5m×3.4mのほぼ正方形を呈し、長軸方向はN-81°-Wを測る小形の住居址である。掘り込みはやや浅いがしっかりして

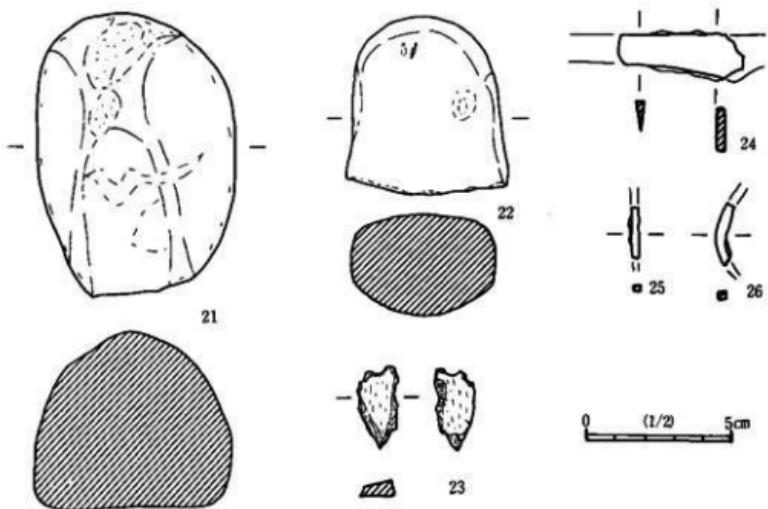


1. 暗褐色土(ロームを少し含む)
 2. 黒色土(ロームを少し含む)
 3. 黄褐色土(ロームを多く含む)
 4. 暗褐色土(ロームを多く含む)
 5. 黄褐色土(ソフトロームを主とする)

第21図 005号住居址実測図



第22図 005号住居址出土遺物実測図 (1)

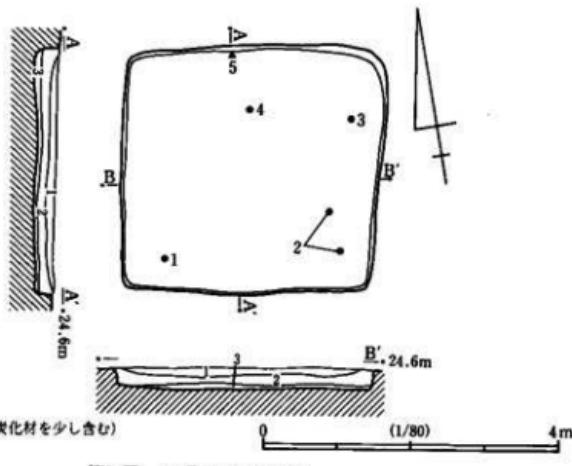


第23図 005号住居址出土遺物実測図(2)

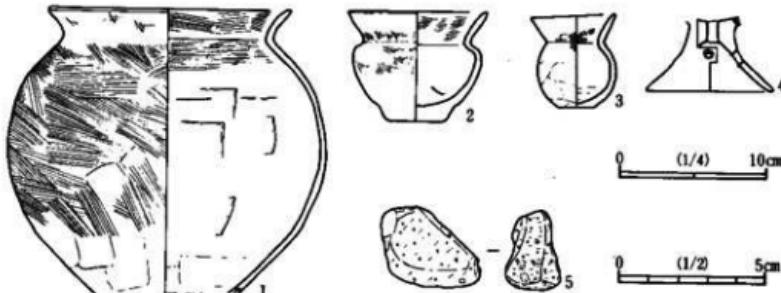
005号住居址出土遺物一覧(第22・23図)

番号	名 称	遺 存 度	口 線 高 () 推定	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	高 坏	坏 部 分	(19.6) —	口縁部内外面ヨコナデ、脚下部内外面ヘラケズリ後ミガキ。	床 面 直 上	
2	高 坏	坏 部 分	—	坏部内外面ヘラケズリ後ミガキ。	床 面 直 上	二次焼成
3	高 坏	坏下部脚上部、ほぼ完形	—	外面ヘラケズリ後ミガキ。坏内面ヘラケズリ後ミガキ。脚内面上部ヘラケズリ、下部一部ヘラケズリ。	床 面 密 着	二次焼成 器面剥離
4	高 坏	坏 部 分	(18.5) —	口縁部内外面ヨコナデ、脚部内外面ミガキ。	床 面 密 着	二次焼成 器面剥離
5	高 坏	脚 部 分	—	輪模み。脚外表面ミガキ、捲上部外面ナデ後ミガキ、下部外面ヨコナデ。脚内面上部ヘラケズリ、下部ナデ、捲内面ヘラケズリ後ナデ。穿孔2穴。	床 面 密 着	
6	高 坏	脚 部 分	—	脚外表面ミガキ。脚内面上部粗いヘラケズリ、下部ヘラケズリ。	床 面 密 着	
7	甕	口 縫 部 分	(15.4) —	口縁部内外面ヨコナデ。脚部外面ヘラケズリ。	覆 土	
8	甕	脚 部 以 下 完 形	—	脚部内外面ヘラケズリ後粗いミガキ。底部ヘラケズリ。	床 面 密 着	
9	高 坏	脚 部 分	—	脚部外面ハケメ後ミガキ、内面上部粗いヘラケズリ、下部ヘラケズリ。	床 面 密 着	
10	塊	完 形	9.6 6.7	口縁部内外面ヨコナデ。脚部外面ヘラケズリ後ナデ。底部ヘラケズリ。内面ナデ。	床 面 直 上	二次焼成
11	台 付 甕	底 部 分	—	脚部内外面ハケメ。底部内面ナデ。	覆 土	二次焼成
12	塊 (?)	底 部 分	—	脚部外面ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。内面ナデ。	床 面 密 着	器面剥離
13	峰 石	長さ7.4cm、幅5.2cm、厚さ5.9cmを測る。表面は平滑である。	—	床面直上。		

14	輕石	長さ6.6cm、幅4.9cm、厚さ4.2cmを測る。表面は平滑である。床面直上。
15	輕石	長さ3.9cm、幅4.4cm、厚さ3.3cmを測る。表面は平滑である。床面直上。
16	輕石	長さ4.8cm、幅4.5cm、厚さ2.4cmを測る。両面は平滑である。床面直上。
17	輕石	長さ5.3cm、幅2.8cm、厚さ3.1cmを測る。表面は平滑である。床面直上。
18	輕石	長さ2.8cm、幅1.7cm、厚さ1.8cmを測る。表面は平滑である。覆土。
19	輕石	長さ2.8cm、幅1.7cm、厚さ1.5cmを測る。裏面を一部破損する。覆土。
20	輕石	長さ1.7cm、幅1.6cm、厚さ1.2cmを測る。表面は平滑である。覆土。
21	石製品	長さ9.7cm、幅6.7cm、厚さ6.0cmを測る。一面だけ平坦面を持つ。安山岩。床面密着。
22	石製品	長さ6.2cm、幅5.5cm、厚さ3.4cmを測る。下端を折損している。両側に磨耗した面を持つ。表面は、火を受けて変色しているが、平滑である。花崗岩。覆土。
23	石製品	長さ2.7cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。滑石。床面密着。
24	刀子(?)	長さ4.3cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmを測る。両端は折損している。覆土。
25	鉄製品	長さ1.7cm、0.25cm角の太さの鉄製品。両端は折損する。断面形は、正方形を呈し、釘と思われる。床面密着。
26	鉄製品	長さ2.1cm、0.25cm角の太さの鉄製品。両端を折損し、中央付近で屈曲している。断面は、正方形を呈し、釘と思われる。床面密着。



第24図 006号住居址実測図



第25図 006号住居址出土遺物実測図

006号住居址出土遺物一覧（第25回）

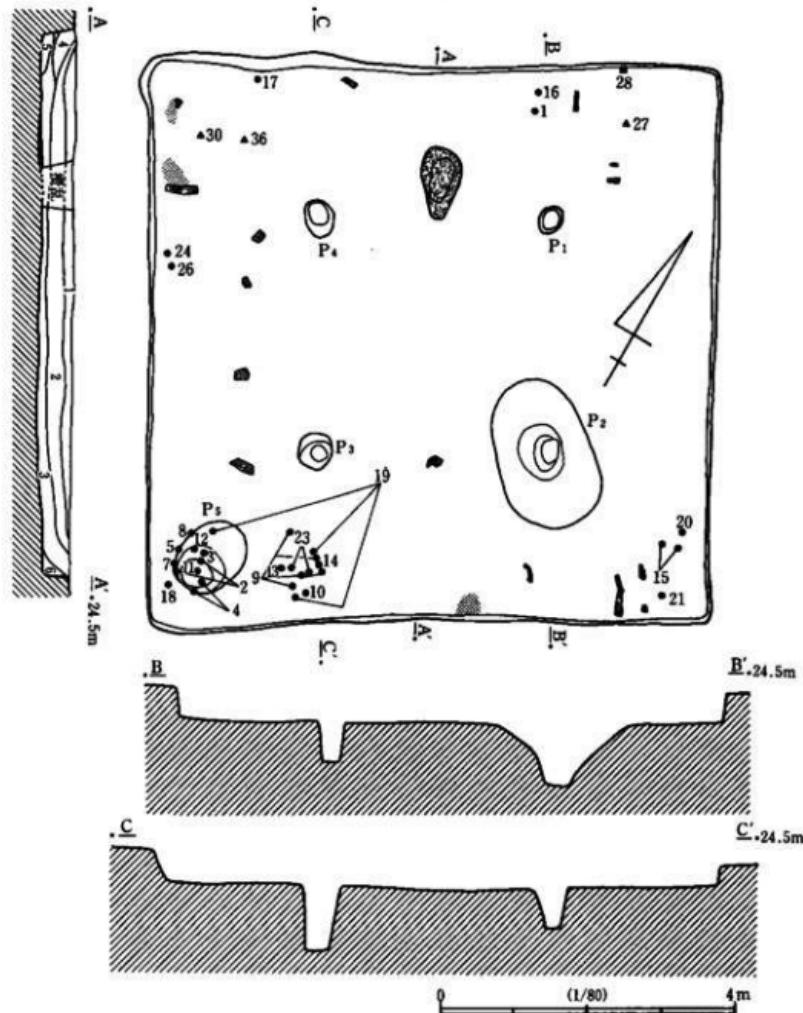
番号	名 称	遺 存 度	口 径 深 度 ()推定	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	壁	×	(16.7) —	口縁部外面ハケメ後ヨコナデ、外側胴上部ハケメ、胴中部ハケメ後一部ヘラケズリ、胴下部ヘラケズリ。口縁部内面ハケメ後ナデ、内側胴上部ハケメ、胴中部ヘラケズリ後ナデ、胴下部ヘラケズリ。	床 面 直 上	二次焼成 台付壁か(?)
2	堵	×	(9.6) 7.4	口縁部外面ヨコナデ、胴上部ハケメ後ナデ、胴下部ヘラケズリ後ナデ。口縁部内面ハケメ後ヨコナデ。胴上部内面ヨコナデ、胴下部ヘラケズリ後ナデ。	床 面 直 上	二次焼成
3	堵 完 形		5.6 6.3	口縁部外面ハケメ後ヨコナデ、外側胴上部ハケメ後ミガキ、胴下部ハケメ後ヘラケズリ。胴部内面ナデ、底部ヘラケズリ。	床 面 直 上	
4	器 台 脚 部 完 形		— —	脚部外面ハケメ後ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ。穿孔4穴。	床 面 直 上	
5	壁 石	長さ2.7cm、幅3.4cm、厚さ1.9cmを測る。表面は平滑である。			床 面 直 上	

おり壁はほぼ垂直に立上る。覆土は自然埋没の状態を示す。床面は軟弱でわずかな起伏を持っている。周溝、ピット、炉等の掘り込みは検出されなかった。

遺物等出土状況 遺物はすべて床から約10cm以上浮いた状態で出土しており住居廃絶後のものとみられる。

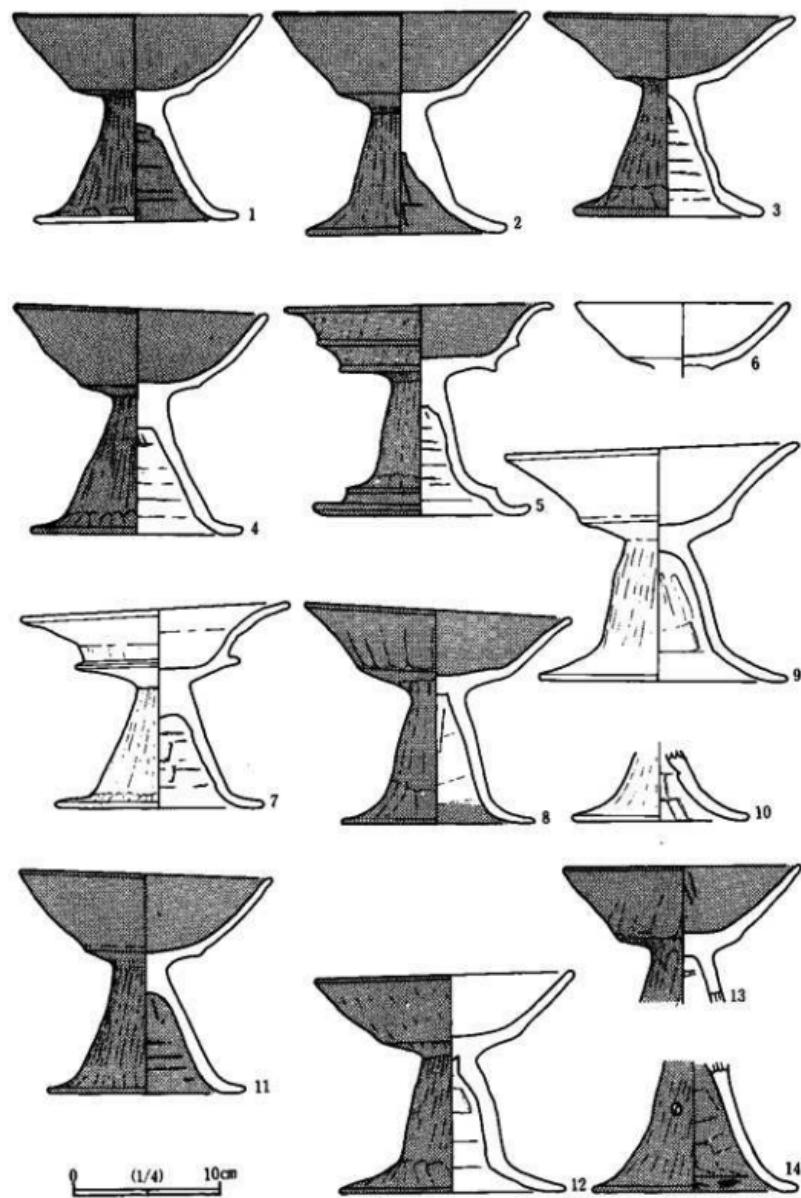
007住居址（第26・27・28・29図 図版8・16・17・21）

本住居址は、調査区中央やや東寄り7-23・24・25、11-3・4・5・9グリッドに所在している。7.4m×7.7mの方形を呈し、主軸方向はN-30°-Wを測る大形の住居址である。掘り込みは深くしっかりとおり、壁も一部を除いてはほぼ垂直に立上る。覆土は自然埋没の状態を呈し、床面近くでは炭化物・焼土の混入がみられる。床面には少量ではあるが炭化材が分布し、焼土も散在しているので焼失住居と考えられよう。床面はやや軟弱で踏み固められておらず、周溝は検出されなかった。柱穴が対角線上に規則正しく4本検出されたが(P₁～P₄)、その中でP₂は特異な形態を示す。長円形の土壤状の掘り込みを呈し、底の一部を更に円形に掘り下げた形態を呈している。外側の長円形プランは、2.0m×1.3m、床面からの深さ約70cmを測り、内部の円形部分のプランは、50cm×35cm、長円形部の底面から更に12cm程掘り込まれ床面よりの深さ82cmを測る。P₂の検出及び調査時の状況から判断すると、住居構築時か、それ以前に長円形に掘り込んだ土壤を柱の設置と同時に埋め戻して床面を形成したものと考えられる。長円形の土壤は覆土にロームブロックを多く含み埋め戻された状態を呈しており、本住居の使用時には何の機能も果さなかったものと思われる。なお長円形の土壤部分からは遺物は何も検出されていない。南コーナーに貯蔵穴(P₅)が検出されている。ピットの深さはそれぞれ、P₁ 56cm、P₂ 82cm、P₃ 54cm、P₄ 86cm、P₅ 83cmを測る。なお、柱間距離は3.2mではほぼ正方形を示している。炉はP₁、P₄の間に検出され100cm×60cm、深さ7cmを測る。

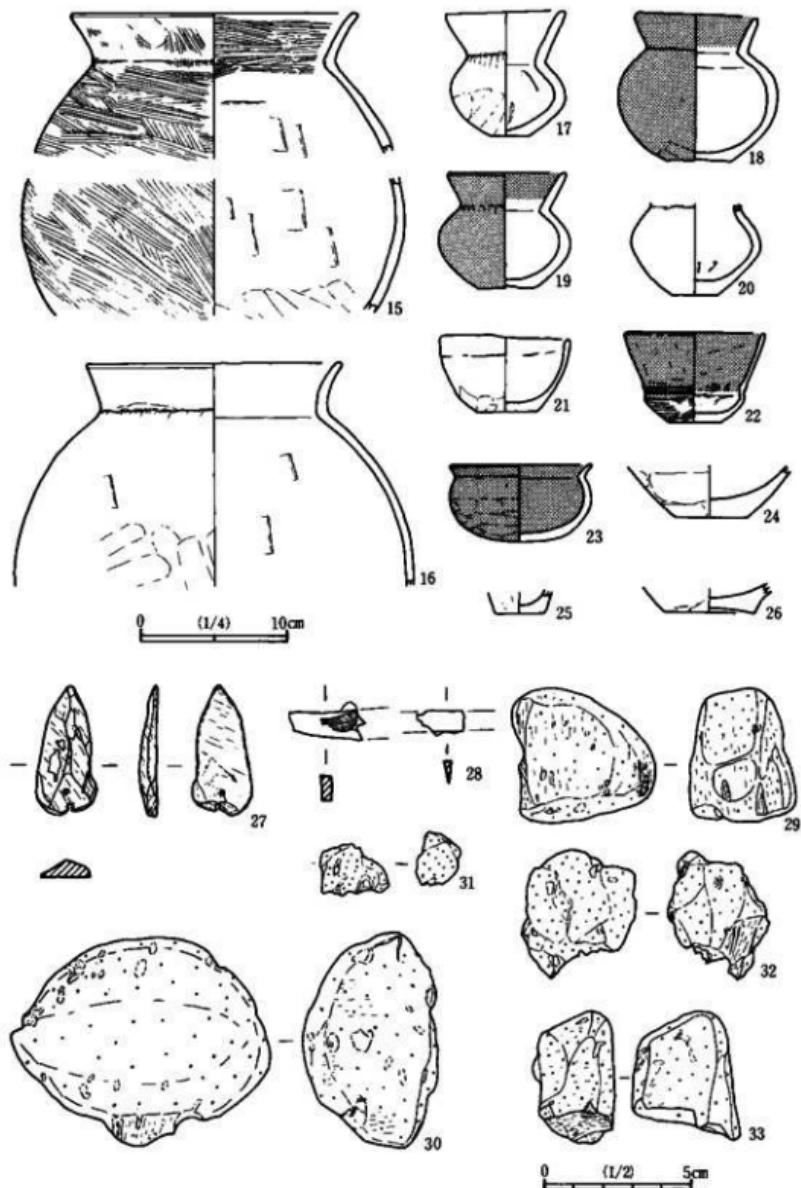


1. 黒褐色土(粒子が粗い)
2. 黒褐色土(ロームを少し含む、炭化物・焼土を少し含む)
3. 暗褐色土(ソフトロームを多く含む、炭化物・焼土を少し含む)
4. 暗褐色土(ロームを多く含む)
5. 黑褐色土(ロームを多く含む、焼土を多く含む)
6. 暗褐色土(ロームを多く含む、炭化材を少し含む)

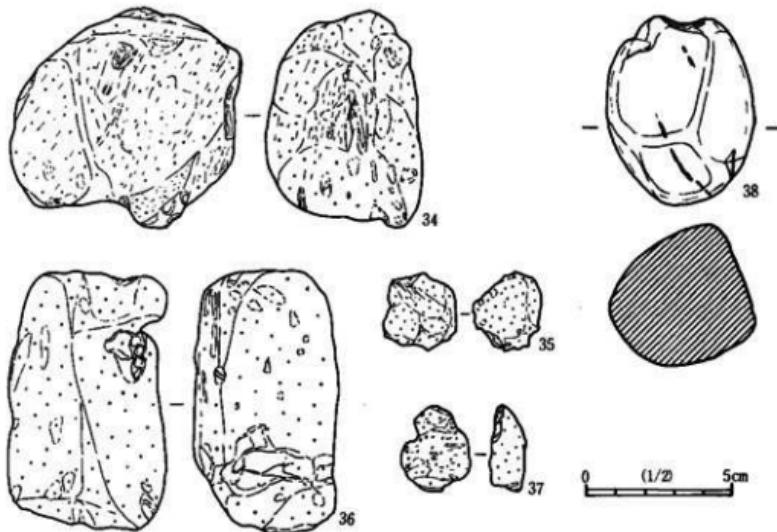
第26図 007号住居址実測図



第27図 007号住居址出土遺物実測図(1)



第28図 007号住居址出土遺物実測図 (2)



第29図 007号住居址出土遺物実測図(3)

007号住居址出土遺物一覧(第27・28・29図)

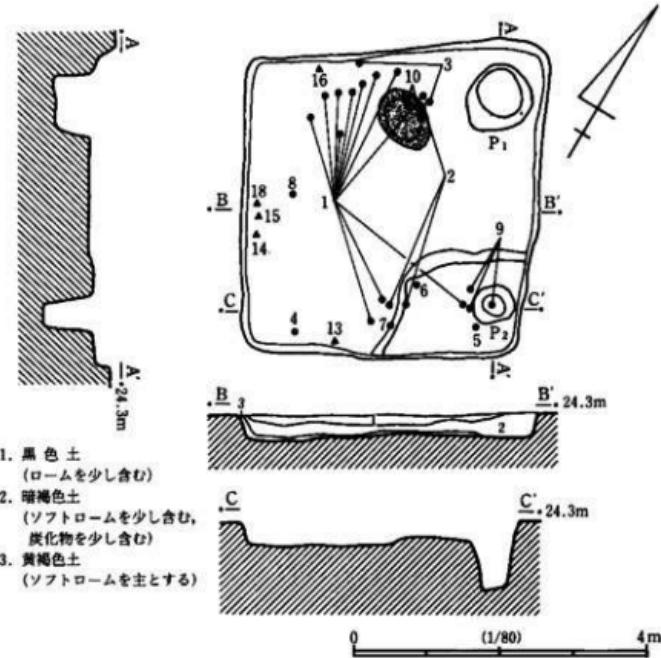
番号	名称	遺存度	口径高 (推定)	成形・整形・調整等	出土層位	備考
1	高 壁	ほぼ完形	17.5 14.3	口縁部内外面ヨコナデ、坏部外面へラケズリ後ミガキ。脚部外面へラケズリ後ミガキ、裾部外面へラケズリ、内面ナデ。赤彩。	床面密着	二次焼成器面剥離
2	高 壁	ほぼ完形	17.8 15.3	口縁部内外面ヨコナデ、坏部外面へラケズリ後ミガキ。脚部外面ミガキ、内面へラケズリ。裾部外面へラケズリ後ミガキ、内面へラケズリ後ナデ。赤彩。	床面密着 P.覆土	二次焼成器面剥離
3	高 壁	ほぼ完形	17.2 14.0	口縁部外面ヨコナデ、坏部外面へラケズリ後ミガキ、内面ミガキ(?)。脚部外面へラケズリ、内面ヨコナデ。裾部外面へラケズリ後ヨコナデ。赤彩。	P.覆土	二次焼成
4	高 壁	ほぼ完形	17.4 15.4	坏部外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面上部へラケズリ、下部ヨコナデ。裾部外面へラケズリ後ミガキ、内面ヨコナデ。赤彩。	床面密着 P.覆土	二次焼成器面剥離
5	高 壁	ほぼ完形	18.5 14.3	口縁部外面ヨコナデ。坏部外面ミガキ、腰のふヨコナデ、内面へラケズリ後ミガキ。脚部外面ミガキ、内面上部へラケズリ、下部ヨコナデ。裾部外面上部へラケズリ、内面ヨコナデ。赤彩。	床面密着	二次焼成器面剥離
6	高 壁	坏部%	(14.9) —	口縁部外面ヨコナデ。坏部外面ミガキ。	覆土	
7	高 壁	ほぼ完形	18.5 13.8	口縁部外面ヨコナデ。坏部外面へラケズリ後ミガキ、内面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面へラケズリ。裾部外面へラケズリ、内面ヨコナデ。	床面密着	二次焼成
8	高 壁	ほぼ完形	18.5 15.0	口縁部外面ヨコナデ。坏上部外面へラケズリ、内面へラケズリ後ミガキ。下部外面ナデ、内面ミガキ。脚部外面へラケズリ後ナデ、内面へラケズリ。裾部内面ヨコナデ。赤彩。	床面密着	二次焼成

9	高 坏	坏 部 脚 部 %	(21.0) (16.1)	口縫部内外面ヨコナデ。坏部外面ミガキ、内面ヘラケズリ後ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ヘラケズリ。無部内面ヨコナデ。	床面直上	
10	高 坏	脚 部 %	—	脚部内外面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	
11	高 坏	ほほ 完 形	17.3 15.0	口縫部内外面ヨコナデ。坏部内外面ミガキ。脚部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ナデ。赤影。	P.覆 土	二次焼成 器面剥離
12	高 坏	ほほ 完 形	17.9 14.9	口縫部内外面ヨコナデ。坏部外面上部ヘラケズリ後ミガキ、下部ヘラケズリ、内面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ヘラケズリ。無部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ヨコナデ。赤影。	P.覆 土	二次焼成 器面剥離
13	高 坏	坏 部 脚 上 部 %	(16.3) —	口縫部内外面ヨコナデ。坏部外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ後ナデ。脚部上部内外面ヘラケズリ。赤影。	床面直上	二次焼成 器面剥離
14	高 坏	脚 部 完 形	—	脚部外面ハケメ後ミガキ、内面ヘラケズリ。脚部内面ハケメ後ヨコナデ。穿孔1穴。赤影。	覆 土	
15	要	%	(19.9) —	口縫部外面ハケメ後ヘラケズリ又はミガキ、内面ハケメ。脚部外面ハケメ、内面ヘラケズリ後ナデ。	覆 土	二次焼成 脚部上下接合せず。
16	要	%	(17.7) —	口縫部内外面ヨコナデ。脚上部外面ヘラケズリ後ナデ、下部外面ヘラケズリ。内面ヘラケズリ後ミガキ。	床面密着	二次焼成
17	培	完 形	8.1 8.8	口縫上部内外面ヨコナデ。下部外面ミガキ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ。脚上部外面ヘラケズリ後ミガキ、下部ヘラケズリ。内面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	
18	培	ほほ 完 形	8.5 10.2	口縫部内外面ヨコナデ。脚上部外面ヘラケズリ後ナデ、下部ヘラケズリ。内面ナデ(?)。赤影。	床面密着	二次焼成 器面剥離
19	培	ほほ 完 形	8.2 8.0	口縫上部内外面ヨコナデ。下部ナデ後ミガキ。脚部外面ミガキ(?)、内面ヨコナデ(?)。赤影。	床面直上	二次焼成 器面剥離
20	培	脚 部 完 形	—	脚上部外面ヨコナデ後ミガキ、内面ヨコナデ。 脚下部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ。	床面密着	二次焼成
21	塊	完 形	8.8 5.3	口縫部外面ヨコナデ後ミガキ、内面ヨコナデ。脚部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキ。	床面密着	二次焼成 器面剥離
22	培	%	(9.7) 6.1	口縫部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヨコナデ。脚部外面ハケメ後一部ナデ、内面ハケメ後ナデ。赤影。	覆 土	二次焼成
23	塊	%	(9.8) 5.2	口縫部脚上部外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ。赤影。	床面直上	二次焼成
24	要	底部のみ	—	外面ヘラケズリ、内面ナデ後ミガキ。底部ヘラケズリ。	床面直上	
25	ミニチュア	底部のみ	—	手捏ね。外観ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ。 底部ヘラケズリ後ナデ。	覆 土	
26	要	底部のみ	—	外観ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。底部ヘラケズリ。	床面密着	二次焼成
27	刺 模 品	形	長さ4.4cm、幅2.1cm、厚さ0.6cmを測る。基部に径1mm、1.5mmの小孔が2か所認められ1か所は破損している。片面のみ中央に鍔を有し断面は三角形を呈する。滑石。床面密着。			
28	鉄 製 品	品	2片からなり、各々長さ2.5cm、1.6cm、幅1.0cm、0.7cm、厚さ0.4cm、0.3cmを測る。断面形は各々長方形、三角形を呈する。長方形断面のものは片面に木質部が一部附着する。刀子片と考えられる。覆土。			
29	軽 石		長さ4.5cm、幅4.7cm、厚さ3.6cmを測る。表面は平滑である。覆土。			
30	軽 石		長さ7.0cm、幅8.8cm、厚さ4.6cmを測る。裏面を除き表面は平滑である。床面密着。			
31	軽 石		長さ1.8cm、幅2.4cm、厚さ1.6cmを測る。表面はザザラしている。黒色コークス状。覆土。			
32	軽 石		長さ4.4cm、幅3.8cm、厚さ3.4cmを測る。表面はザザラしている。黒色コークス状。覆土。			
33	軽 石		長さ4.5cm、幅2.8cm、厚さ3.4cmを測る。下端は折損するが他の面は平滑である。覆土。			
34	軽 石		長さ7.6cm、幅7.7cm、厚さ5.4cmを測る。表面はザザラしている。黒色コークス状。覆土。			
35	軽 石		長さ2.6cm、幅2.6cm、厚さ2.3cmを測る。表面はザザラしている。黒色コークス状。覆土。			
36	軽 石		長さ8.7cm、幅5.4cm、厚さ4.9cmを測る。三角形断面の三面は平滑である。床面密着。			
37	軽 石		長さ2.9cm、幅2.4cm、厚さ1.2cmを測る。裏面は平滑である。覆土。			
38	石 製 品		長さ6.5cm、幅5.1cm、厚さ4.9cmを測る。円錐で表面はやや平滑である。安山岩。覆土。			

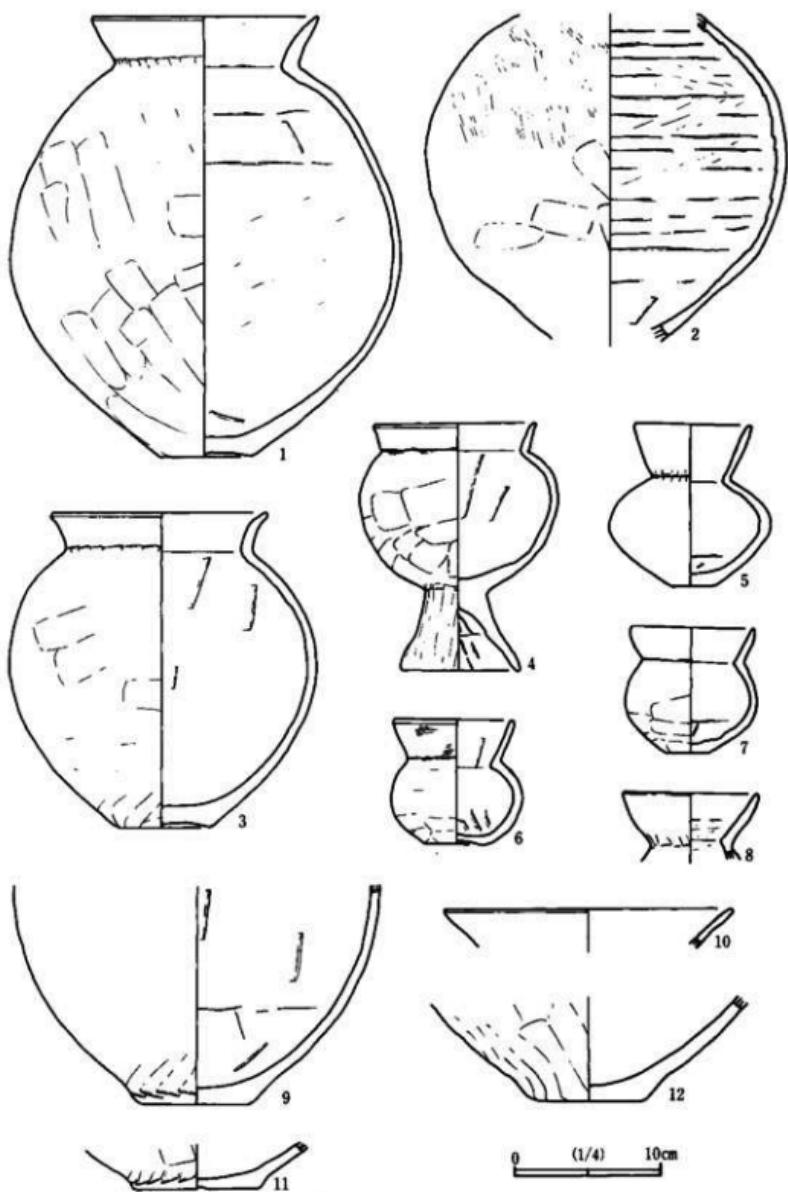
遺物等出土状況 床面に少量の炭化材・焼土の分布がみられる。遺物量は全体的に多く、特に南側から多く出土している。そのうち高環12個体（2、3、4、5、7、8、9、10、11、12、13、14）、壺2個体（18、19）、壺1個体（23）がP₁周辺床面から出土しており、格納施設の機能が窺える。剣形石製模造品（27）がP₁の北側より、又、大小の軽石（29～37）が覆土中や床面から出土している。

008号住居址（第30・31・32図 図版9・18・21）

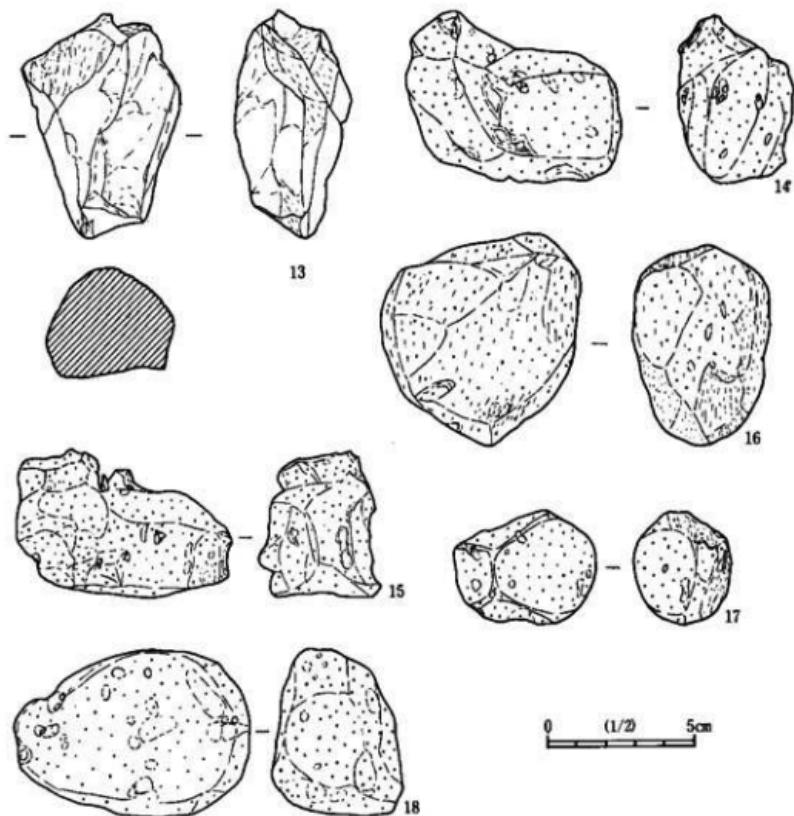
本住居址は、調査区中央部11-2・3・7・8グリッドに位置している。4.1m×4.1mの北側へややゆがんだ形を呈し、主軸方向はN-28°-Wを測る。掘り込みはしっかりとおり壁もほぼ垂直に立上る。覆土は自然埋没の状態を示している。床面は堅く踏み固められており東コーナーにテーブル状の高まりを持っている。この高まりは、東コーナーから北へ約1.4m、南へ2.0mのほぼ長方形を呈し、床面より約5cm高く地山を掘り残して作られており堅く踏み固められている。周溝・柱穴は検出されず貯蔵穴とみられるピットが北コーナーと（P₁）、東コーナーのテーブル状の高まりの中に（P₂）計2基検出されている。P₁は深さ49cm、P₂は深さ64cmを測る。炉はP₁の南西側に1基検出され、90cm×60cm、深さ14cmを測る。



第30図 008号住居址実測図



第31図 008号住居址出土遺物実測図(1)

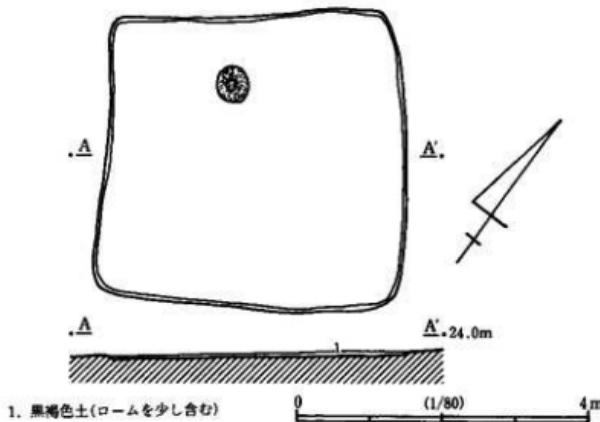


第32図 008号住居址出土遺物実測図(2)

008号住居址出土遺物一覧(第31・32図)

番号	名 称	遺 存 度	口 器 径 () 高 () 推定	成 形・整 形・調 整 等	出土 層位	備 考
1	甕	ほぼ完形	15.7 30.2	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリ後ミガキ。内面ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	二次焼成 器面剥離
2	壺	肩 部	2/4	輪郭み。肩上部外面ハケメ後ミガキ。下部外 面ヘラケズリ後ミガキ。内面粗いミガキ一部 ヘラケズリ。	床面密着	二次焼成 器面剥離
3	甕	ほぼ完形	14.8 21.4	口縁部内外面ヨコナデ。胴上部外面ヘラケズ リ後ミガキ。下部外面ヘラケズリ後ナデ。胴 部内面ヘラケズリ後ナデ。	床面密着	二次焼成
4	台付 甕	完 形	11.4 11.8	口縁部内外面ヨコナデ。胴上部ハケメ後ナデ。 中腰ヘラケズリ後ミガキ。下部ヘラケズリ。 内面ヘラケズリ後ナデ。胴部外面ヘラケズリ 後ミガキ。内面ヘラケズリ、後一部ミガキ。	床面密着	

5	塔	ほぼ完形	8.1 11.2	口縁部内外面ヨコナデ。胸部外面へラケズリ後ナデ、内面上部ナデ。下部へラケズリ後ナデ。	床面密着	二次焼成
6	塔	ほぼ完形	8.5 8.4	口縁上部外面ハケメ後ヨコナデ、下部ハケメ後ミガキ、内面へラケズリ後ヨコナデ。胸上部外面へラケズリ後ミガキ、内面ヨコナデ。胸下部外面へラケズリ、内面へラケズリ後ヨコナデ。	床面直上	二次焼成
7	塔	ほぼ完形	8.6 8.7	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、胸上部外面へラケズリ後ミガキ、内面ヨコナデ。胸下部外面へラケズリ、内面指壓押捺後ナデ。	床面密着	二次焼成
8	塔	口縁部完形	8.6 —	口縁部外面ヨコナデ後ミガキ、内面上部ヨコナデ、下部へラケズリ。	床面直上	
9	甕	胸下部 %	—	胸部外面へラケズリ後ミガキ、内面へラケズリ後ナデ、底部へラケズリ後ミガキ。	床面密着 P.s.覆土	二次焼成
10	高坏	坏部 %	(20.0) —	口縁部外面ヨコナデ。	床面直上	
11	甕	底部 %	—	胸下部外面へラケズリ、内面ナデ。	覆土	内面に黑色炭化物付着
12	甕	底部完形	—	胸下部外面へラケズリ、内面へラケズリ後ナデ。	覆土	二次焼成 器面剥離
13	石製品	長さ7.7cm、幅5.4cm、厚さ3.9cmを測る。断面はカマボコ形を呈する。滑石。床面直上。				
14	輕石	長さ5.9cm、幅7.4cm、厚さ4.0cmを測る。表面はザラザラしている。黒色コーケス状。床面直上。				
15	輕石	長さ5.0cm、幅7.3cm、厚さ4.2cmを測る。凹凸が著しく、表面はザラザラしている。黒色コーケス状。床面直上。				
16	輕石	長さ7.1cm、幅6.8cm、厚さ4.7cmを測る。何面かの平滑な面を持つ。床面密着。				
17	輕石	長さ3.9cm、幅4.9cm、厚さ3.3cmを測る。表面はザラザラしている。黒色コーケス状。覆土。				
18	輕石	長さ5.6cm、幅8.0cm、厚さ4.5cmを測る。表面はザラザラしている。黒色コーケス状。床面直上。				



第33図 009号住居址実測図



第34図 009号住居址出土遺物実測図

009号住居址出土遺物一覧（第34図）

番号	名 称	遺 存 度	口 器 ()推定	径 高 ()	成 形・整 形・調 整 等	出土層位	備 考
1	甕	底部完形	—	—	脚下部外面ハケメ、内面ヘラケズリ後ミガキ。 底部木葉痕後ヘラケズリ。	覆 土	

遺物等出土状況 遺物量はやや多く、炉の周辺、テーブル状高まりの周辺に集中して出土している。1の甕は全域に散乱しており、10の高坏は炉の中より出土している。南壁際から滑石(13)が出土しており、原石と考えられる。西壁際では大きな軽石が3点(14、15、18)近接して出土している。

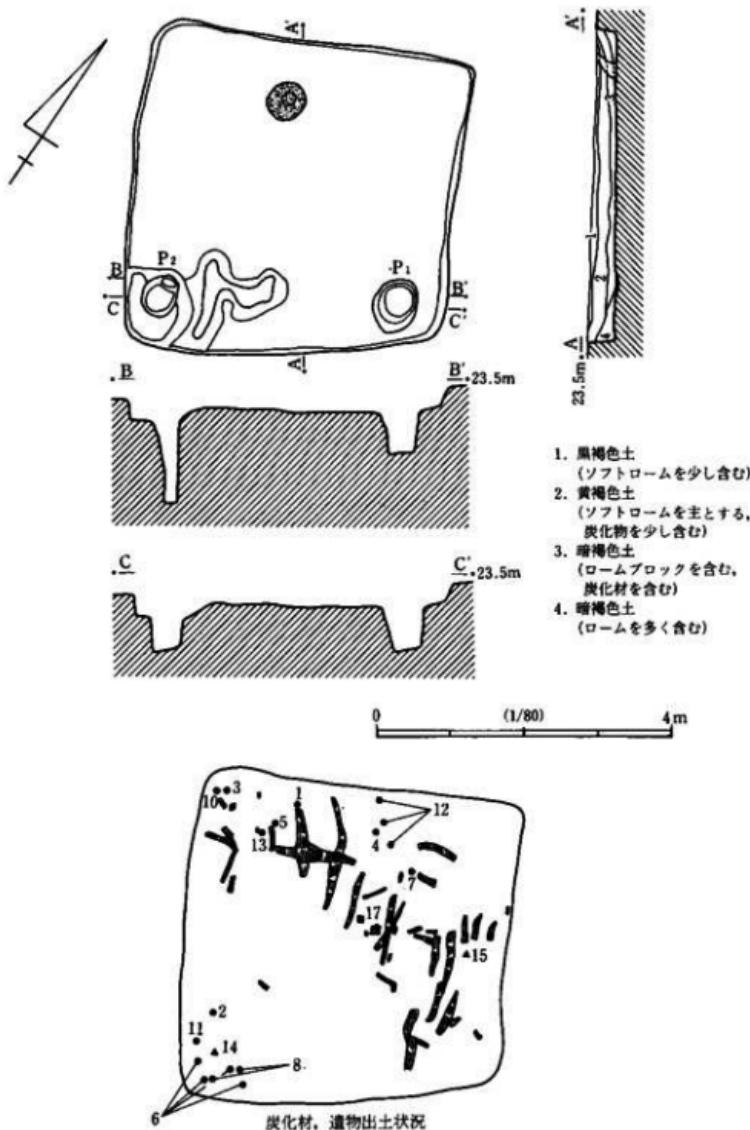
009号住居址（第33・34図）

本住居址は、調査区中央やや南側10-20・25、11-16・21グリッドに位置している。掘り込みの浅い住居であったらしく確認面からの深さは5cm程度しか遺存していなかった。4.0m×4.1mのややいびつな方形を呈し、主軸方向はN-36°-Wを測る。掘り込みは極めて浅く約5cmで、黒色の覆土を少し掘り下げるとき床面が露呈するといった状態で壁の立上りは不明瞭であった。床面は中央部ではかなり堅く踏み固められていたが、壁付近では軟弱で床面の検出に苦労した。周溝、柱穴等の掘り込みはみられず、北西壁側に炉が検出されたのみである。炉は50cm×40cm、深さ10cmを測る。

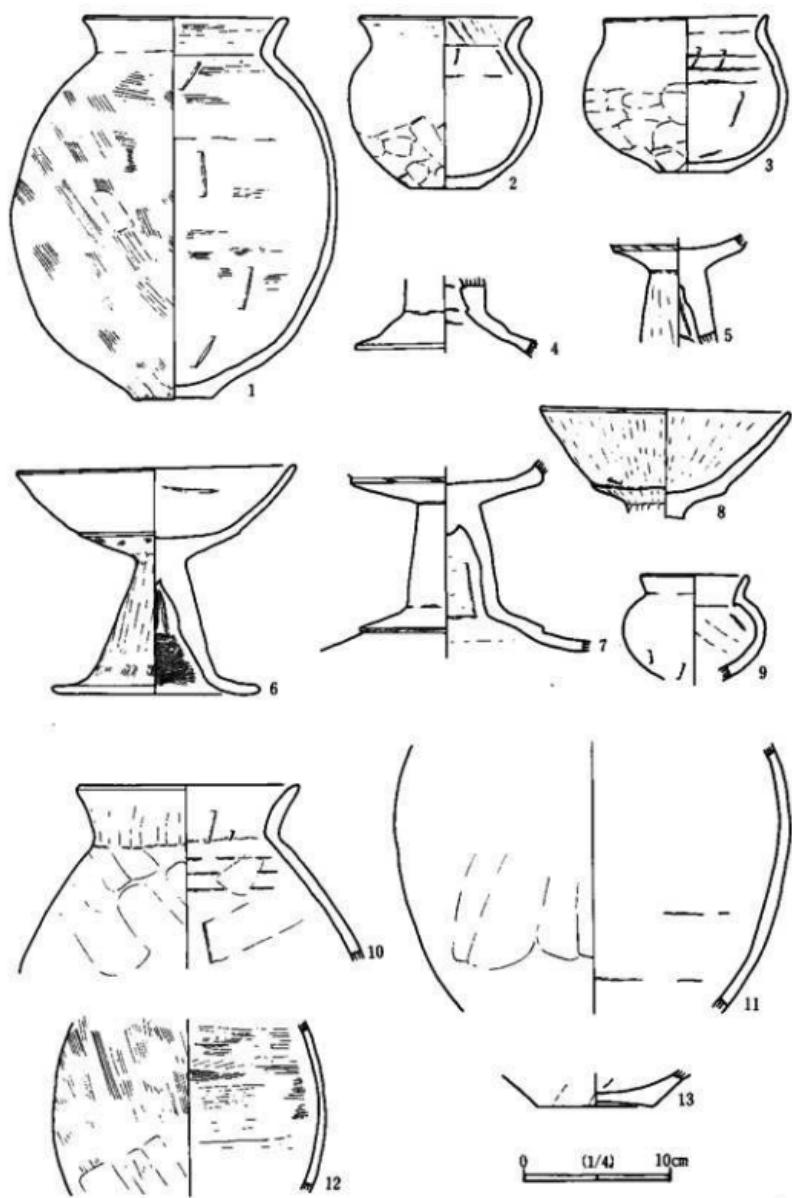
遺物等出土状況 遺物量は極めて少なく数片が出土したのみである。図示できたのは1点にすぎない。

010号住居址（第35・36・37図 図版9・10・18・19・21）

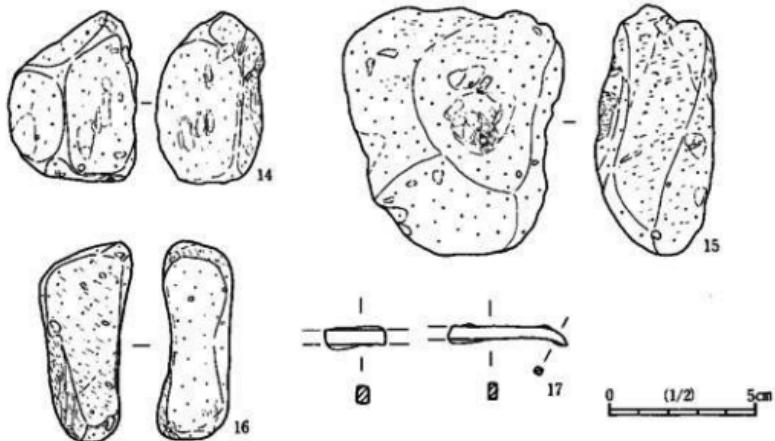
本住居址は、調査区南西部10-24、14-4グリッドに所在し、西面する支谷への緩傾斜の始まる地点に位置している。地山は緩やかに北東から南西へ傾斜し、北東コーナーと南西コーナーの確認面では33cmの比高がある。本址は4.3m×4.4mのゆがんだ方形を呈し、主軸方向はN-27°-Wを測る。掘り込みはやや浅めであるが、壁の立上りはほぼ垂直に立上る。覆土は自然埋没の状態を示し、床面近くでは炭化材を多く含んでいる。床面には、北西から南東にかけて炭化材が多く分布し、焼失住居であることが窺える。床面は堅く踏み固められてほぼ平坦であるが、南コーナー付近に貯蔵穴(P₁)を中心とする浅い掘り込みと、そこから北東へ不整形を呈し土手状に延びる小さな高まりがみられる。高まりは床面からの高さが3~8cm位の低いもので、その形も主軸方向へ延びる幅40cm、長さ1m程の土手状のものに、不整構円形の90cm×50cmの土手が付属したような形態を呈している。この高まりは、地山の掘り残しによって作られており堅く踏み固められていた。周溝、柱穴とみられるピットはなく、貯蔵穴と思われるピット2基(P₁、P₂)が検出された。そのうちP₁は前述の深い掘り込みとそれに続く土



第35図 010号住居址実測図



第36図 010号住居址出土遺物実測図(1)



第37図 010号住居址出土遺物実測図(2)

010号住居址出土遺物一覧(第36・37図)

番号	名 称	遺 存 度	口 径 器 () 高 度 推定	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	甕	ほぼ完形	(14.1) 21.1	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケメ後ヨコナデ。胴部外面ハケメ後ヘラケズリ、内面ハケメ後ヨコナデ。	床面直上	
2	甕	%	(12.1) 11.9	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケメ後ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリ後ヨコナデ、内面ヘラケズリ後ナデ。胴下部外面ヘラケズリ、内面ナデ(?)。底部木葉痕後ヘラケズリ。	床面密着	二次焼成 器面剥離
3	甕	ほぼ完形	11.4 10.8	口縁部内外面ヨコナデ。胴上部外面ヘラケズリ後ナデ、下部ヘラケズリ。内面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	
4	高 壁	脚下部完形	— —	脚部外面ミガキ、内面ナデ。裾部内面ヨコナデ。	床面直上	二次焼成 5と同一個体か(?)
5	高 壁	脚上部完形	—	脚下部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。脚上部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ヘラケズリ。	床面直上	二次焼成 4と同一個体か(?)
6	高 壁	ほぼ完形	19.3 15.3	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケメ後ヨコナデ。环下部ナデ、下部ハケメ後ナデ。内面ヘラケズリ後ナデ。脚部外面ヘラケズリ後ミガキ。内面上部ヘラケズリ、下部ハケメ。裾部内外面ハケメ後ナデ。	床面密着 P覆土	
7	高 壁	环上部以外 %	—	环下部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ミガキ。脚部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ヘラケズリ。裾部内外面ヘラケズリ後ミガキ。	床面密着	
8	高 壁	坏部完形	17.2	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ。环下部外面ミガキ。裾部ヘラケズリ、内面ミガキ。	床面密着 P覆土	二次焼成
9	壠	%	7.4 —	口縁部内外面ヨコナデ。内面ヘラケズリ後ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリ、内面上部ヨコナデ一部ヘラケズリ、下部ヘラケズリ。	覆土	
10	甕	胴以上完形	15.3	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリ、内面上部ヨコナデ一部ヘラケズリ、下部ヘラケズリ。	床面直上	二次焼成
11	甕(?)	脚 部 %	—	脚外側ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキ。	床面密着	二次焼成

12	甕	胴部 完形	—	胴上部内外面ハケメ後ミガキ。胴下部外面ハケメ後ヘラケズリ、内面ミガキ後ミガキ。	床面直上	二次焼成
13	甕 (?)	底部 ½	—	胴下部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ヘラケズリ後ナフ。底部ヘラケズリ後ミガキ。	床面直上	二次焼成
14	軽石	長さ 5.9cm、幅 4.4cm、厚さ 3.8cm を測る。平滑な面を五面持つ。	P ₁ 覆土。			
15	軽石	長さ 8.5cm、幅 7.6cm、厚さ 4.2cm を測る。中央に径約 2cm の窪みを持つ。表面は平滑である。窪み周辺に赤色塗装が認められる。底面密着。				
16	軽石	長さ 6.7cm、幅 3.2cm、厚さ 2.6cm を測る。中央がややくびれ細くなっている。表面は平滑である。覆土。				
17	鉄製品	2片に分れ、各々長さ 2.4cm、4.1cm、幅 0.6cm、0.5cm、厚さ 0.4cm、0.3cm を測る。短い方は両端を折損し、断面は長方形。長い方は、一端を折損し、他端は屈曲し、細くなっている。鉄錆片と思われる。覆土。				

手状の高まりを持ち、更にピットの中が2段に掘られている。深さはP₁が57cm、P₂の周囲の浅い掘り込みが約15cm、P₃は深い方が58cm、深い方が120cmを測る。炉は北西壁寄りに検出され、55cm×50cm、深さ13cmを測る。

遺物等出土状況 床面で北西コーナーから南東コーナーの北半分に炭化材が密集して検出されたが南半分からは、ほとんど検出されなかった。遺物は、P₂周辺で高壙が2個体(6、8)甕(2、11)とややまとまって出土し、北西壁際でもまとまって出土している。本址でも軽石が出土している。

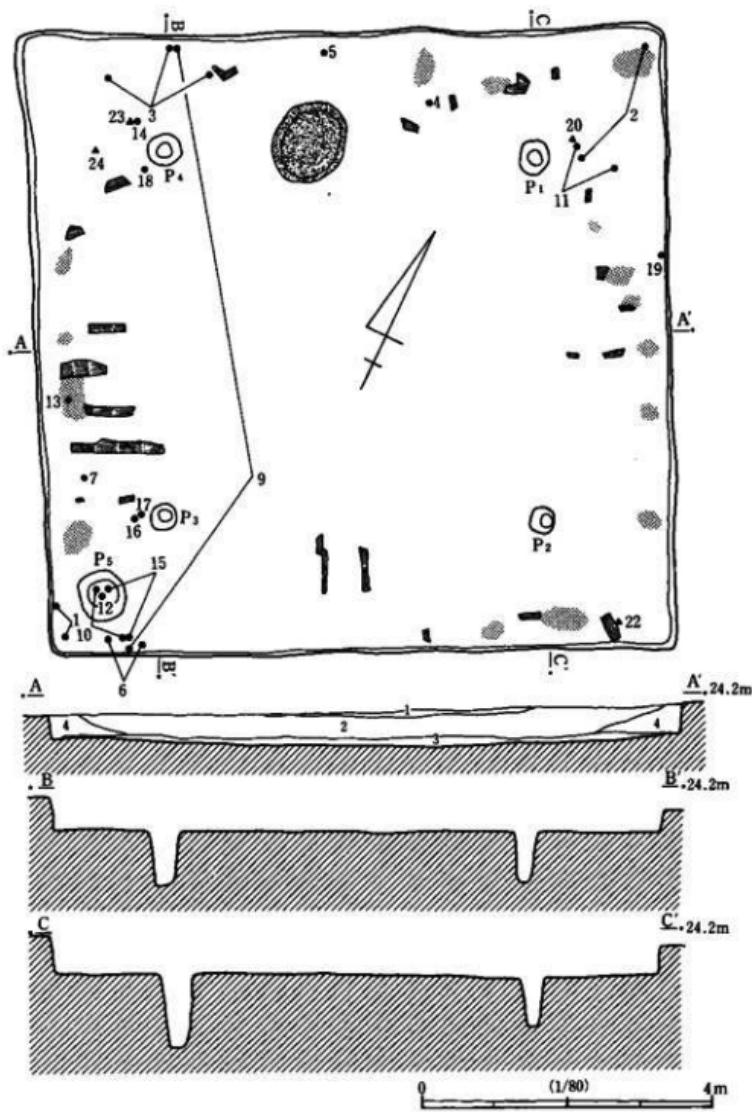
011号住居址(第38・39図 図版11)

本住居址は、調査区中央の10-5・9・10・15、11-1・6・11グリッドに所在する。8.8m×8.5mの本遺跡中最大規模の住居址で、整った方形を呈し、主軸方向はN-27°-Wを測る。掘り込みは深くしっかりとしており、壁の立上りもほぼ垂直に近い。覆土は自然埋没の状態を示し、床面近くでは焼土・炭化材を含んでいる。床面には、多くはないが炭化材・焼土が分布し、焼失住居と思われる。床面は中央では堅く踏み固められているが、周辺では軟弱であった。周溝は検出されず、柱穴は対角線上に規則正しく検出され(P₁~P₄)、柱間距離は各5.0m、5.2mを測る。南コーナーには貯蔵穴と思われるピットが検出された(P₅)。深さは、P₁ 103cm、P₂ 65cm、P₃ 70cm P₄ 75cm、P₅ 65cmを測る。炉はP₁とP₂の間ややP₄寄りに検出され120cm×100cm、深さ5cmを測る。

遺物等出土状況 住居全域にわたって炭化材・焼土の分布がみられるが量は少ない。遺物は中央ではほとんど出土せず、壁際に多く出土している。特にP₂周辺にまとまって出土している。滑石片が4点出土しているが成品はみられず分布もまとまっているとは言い難い。P₁脇からは磁石(20)が出土している。

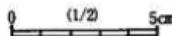
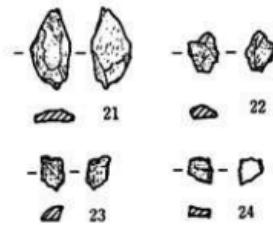
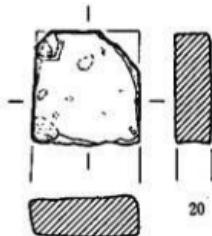
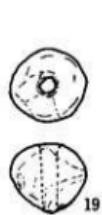
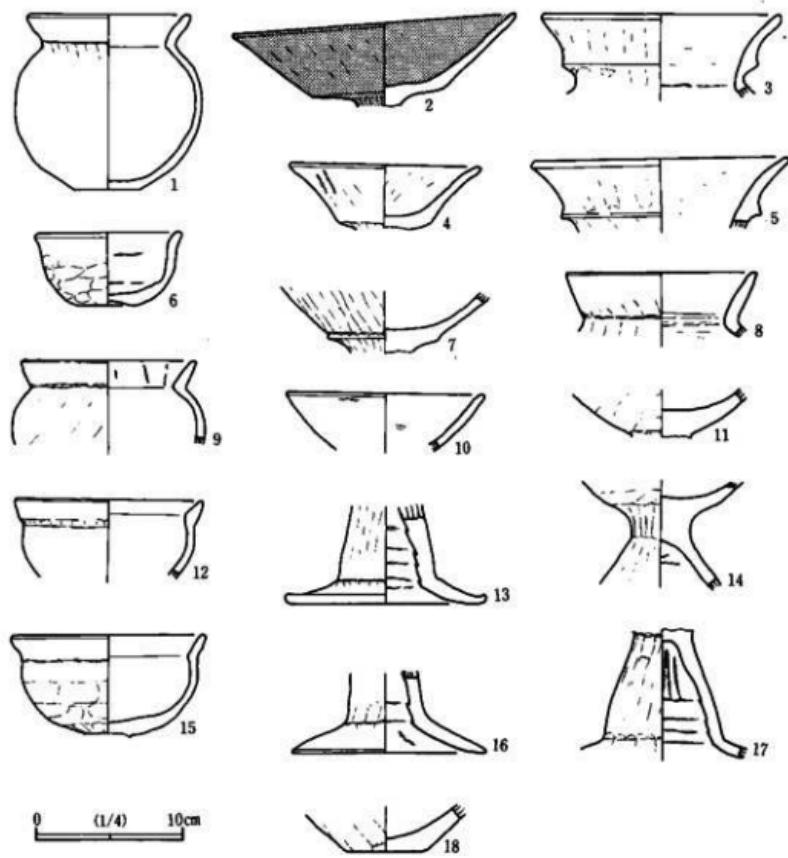
012号住居址(第40・41図 図版11・19)

本住居址は、調査区ほぼ中央7-21・22、11-1・2グリッドに位置している。4.3m×4.3mのほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-57°-Wを測る。掘り込みはしっかりとしているが、壁は



1. 暗褐色土(ザラザラしている)
2. 黒色土(ロームを少し含む)
3. 黄褐色土(ソフトロームを多く含む)
4. 黄褐色土(ロームを多く含む,炭化物を少し含む)

第38図 011号住居址実測図

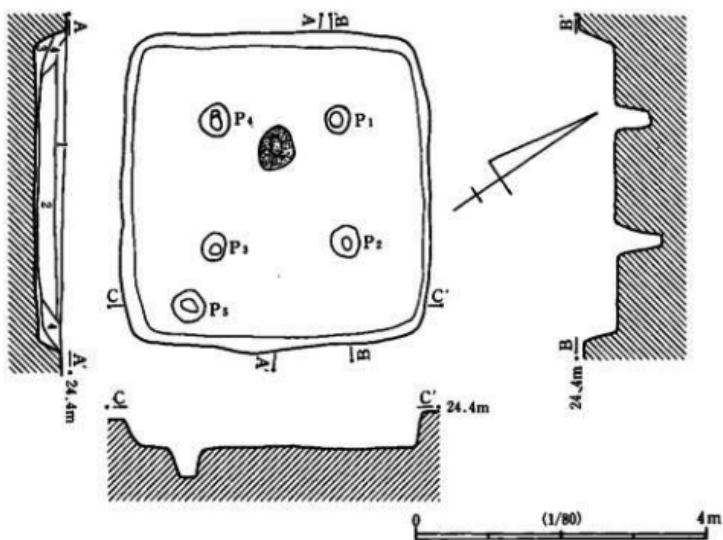


第39図 011号住居址出土遺物実測図

011号住居出土遺物一覧（第39図）

番号	名 称	遺存度	口 縁 () 高 さ 推定	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	壺	ほぼ完形	(11.3) 12.0	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ。胴部外面ミガキ。内面ナデ。	床面密着	二次焼成 器面剥離
2	高 壱	壺 部 分	(19.6) —	口縁部内外面ヨコナデ。壺上部外表面ヘラケズリ後ナデ。下部ヨコナデ、内面ヘラケズリ後ナデ。赤彩。	覆 土	二次焼成
3	壺	口縁部完形	16.6 —	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ。	覆 土	二次焼成 器面剥離
4	高 壱	壺 部 完 形	13.3 —	口縁部内外面ヨコナデ。壺部内外面ミガキ。	床面密着	二次焼成
5	壺	口縁部 分	(17.7) —	口縁部上部内外面ヨコナデ。下部内外面ミガキ。	床面直上	二次焼成
6	壺	ほぼ完形	10.0 5.0	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。	床面密着	二次焼成 器面剥離
7	高 壱	壺 部 分	—	壺部外面ヘラケズリ後ミガキ。内面ミガキ。	床面直上	二次焼成 器面剥離
8	壺	口縁部 分	13.1 —	口縁部内外面ナデ。胴上部外表面ヘラケズリ、内面ミガキ。	覆 土	二次焼成
9	壺	胴部以上 分	(12.1) —	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ後ナデ。胴上部外表面ヘラケズリ後ミガキ、内面ナデ。	床面直上	
10	高 壱	壺 部 分	(13.7) —	内外面ナデ後ミガキ。	床面直上	
11	高 壱	壺 部 分	—	外表面ヘラケズリ後ミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	二次焼成
12	壺(?)	胴部以上 分	(12.9) —	口縁部、胴上部外表面ヨコナデ。胴下部外表面ヘラケズリ後ミガキ。内面ヨコナデ。	覆 土	高壺の可能性 あり
13	高 壱	脚 部 完 形	—	輪積み。脚部外面ヘラケズリ、内面粗いナデ。脚部外表面ヘラケズリ、内面ヨコナデ。	覆 土	二次焼成
14	高 壱	分	—	壺部内外面ミガキ、脚部外面ミガキ。内面ヘラケズリ後ナデ。	覆 土	
15	高 壱	壺部ほぼ完形	13.4 —	口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ。外面胴上・中・下部、ミガキ・ヘラケズリ後ミガキ。ヘラケズリ。内面ナデ後ミガキ。	床面直上	二次焼成 器面剥離
16	高 壱	脚 部 分	—	輪積み。脚部外面ヘラケズリ、内面指頭押捺。脚部外表面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ後ヨコナデ。	床面直上	二次焼成
17	高 壱	脚 部 完 形	—	輪積み。脚部外面ミガキ。内面上部ヘラケズリ、下部ナデ。	床面直上	二次焼成
18	壺	底 部 分	—	胴下部外表面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ後ナデ。	床面直上	二次焼成
19	土 玉	直 径 2.5cm の円形を呈し、中央に 5.5mm の穿孔を有する。床面密着。				
20	砥 石	長さ 3.8cm、幅 3.7cm、厚さ 1.3cm を測る。下端を折損する。長方形の断面を有し、折損面以外は、平滑である。凝灰岩。床面直上。				
21	石 製 品	長さ 2.7cm、幅 1.4cm、厚さ 0.4cm を測る。薄い剝片状を呈する。滑石。覆土。				
22	石 製 品	長さ 1.4cm、幅 1.0cm、厚さ 0.4cm を測る。薄い剝片状を呈する。滑石。床面密着。				
23	石 製 品	長さ 1.2cm、幅 0.8cm、厚さ 0.4cm を測る。剝片状を呈する。滑石。床面直上。				
24	石 製 品	長さ 0.9cm、幅 0.9cm、厚さ 0.4cm を測る。剝片状を呈する。滑石。床面密着。				

やや緩い角度で立上る。覆土は自然埋没の状態を示し床面近くでは炭化材を多く含んでいる。床面は堅く踏み固められており、一面に炭化材が分布し、焼失住居と考えられる。周溝は存在せず、柱穴は、対角線上に規則正しく 4 本検出され ($P_1 \sim P_4$)、柱間距離 1.8m を測る。貯蔵穴と考えられるピットが南コーナーに 1 基検出された (P_5)。ピットの深さは、 P_1 47 cm、 P_2 62 cm、 P_3 48 cm、 P_4 57 cm、 P_5 40 cm を測る。炉は P_1 と P_4 の中間やや中央寄りに検出され 60 cm × 50 cm、深さ 12 cm を測る。



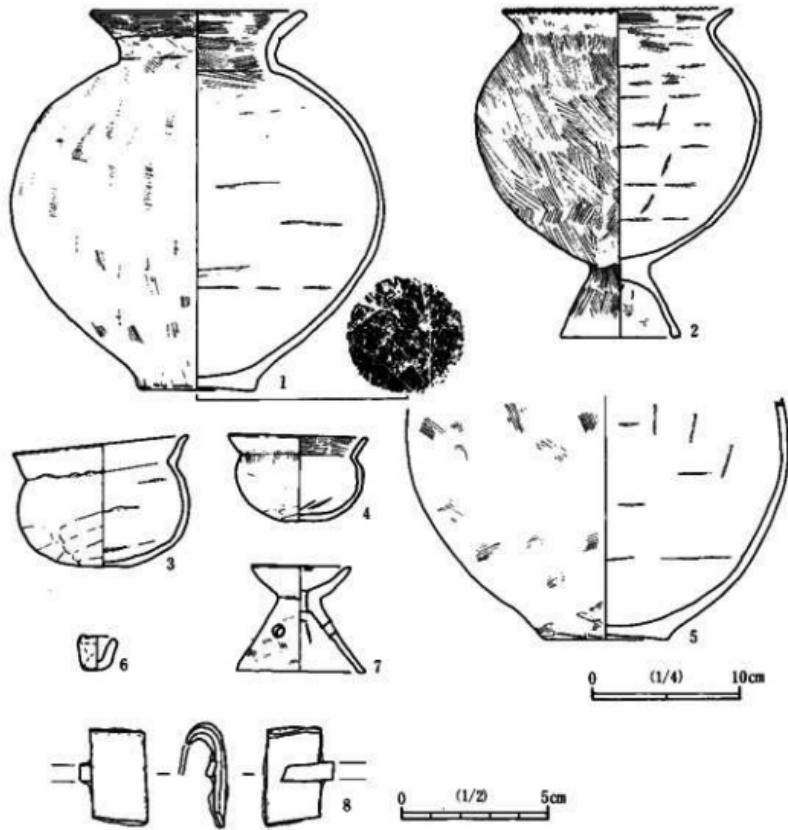
1. 黒褐色土
(ロームを少し含む)
2. 暗褐色土
(ソフトロームを多く含む、炭化物を多く含む)
3. 暗褐色土
(ロームを少し含む、炭化材を多く含む、焼土を少し含む)
4. 黑褐色土
(ロームを多く含む、炭化物を少し含む)



炭化材、遺物出土状況

第40図 012号住居址実測図

遺物等出土状況 床全面に炭化材の分布がみられるが規則正しい配列はみられない。遺物量は多くはないが遺存のよいものが出土している。P₅周辺にまとまって出土しており1・5の壺、2の台付壺は原位置を保っていると考えられよう。3の壺はやや隔たって出土し接合している。6のミニチュアは床面から約30cm浮いており流れ込んだものと考えられる。



第41図 012号住居址出土遺物実測図

012号住居址出土遺物一覧（第41図）

番号	名 称	遺 存 度	口 器 高 (推定)	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	壺	完 形	15.0 26.0	口縁部外面ハケメ、内面ハケメ後ミガキ。胴 上部外側ハケメ後ミガキ、内面ヘラケズリ。 胴下部外側ハケメ後ミガキ、内面ヘラケズリ。 底部木裏痕。	床 面 密 着	二次焼成 土圧による変 形あり
2	台付 壺	ほぼ完形	15.8 22.5	口唇部キザミ。口縁部内外面ハケメ後ヨコナ デ。胴部外面ハケメ、内面上部ハケメ、下部 ヘラケズリ後ナデ。脚部外側面ハケメ、下 部ヨコナデ。内面上部ヘラケズリ後ナデ。下 部ハケメ後ヨコナデ。	床 面 密 着	二次焼成 脚部剥離
3	壺	ほぼ完形	12.4 9.0	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上部ヘラケ ズリ後ミガキ、下部ヘラケズリ、内面ナデ。	床 面 密 着	二次焼成

4	塊	完 形	9.5 5.7	口縁部内外面ハケメ後ナデ。脚部外面上部ハケメ後ミガキ、下部ヘラケズリ、内面ヘラケズリ後ナデ。	床 面 密 着	二次焼成
5	蓋 (?)	脚部 完 形	— —	脚部外縁ハケメ後ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ。	床 面 密 着	二次焼成
6	ミニチュア	完 形	2.3 2.3	手型ね。指頭押捺。口縁上面に4か所の小さいキザミ。	覆 土	二次焼成
7	臺	完 形	6.8 7.1	口縁上部外縁、ヨコナデ、内面ハケメ後ヨコナデ。口縁下部外縁ナデ後ミガキ、内面ミガキ。脚部外縁ハケメ後ミガキ、内面ヘラケズリ。穿孔3穴。	床 面 密 着	二次焼成
8	鉄 製 品	長さ3.3cm、幅2.4cm、厚さ1.3cmを測る。馬蹄形に折り曲げた鉄板に棒状鉄製品が付随したもので、馬蹄形の片側と棒状の部分が折損している。覆土。				

013号住居址（第42・43図 図版12・19）

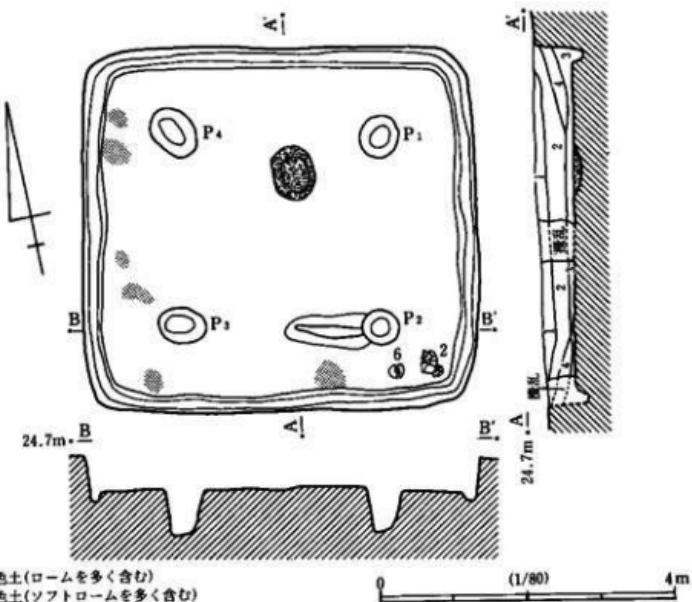
本住居址は、調査区中央やや北東寄りの7-17・18グリッドに位置している。4.9m×5.4mの整った長方形を呈し、主軸方向はN-11°-Eを測る。掘り込みは深くしっかりしており、壁もほぼ垂直に立上る。覆土は自然埋没の状態を示している。床面は平坦で堅く踏み固められており、周溝が全周している。床面にP₁からP₃の方へ向って、長さ 105 cm、幅 50 cm、高さ 3 ~ 5 cm の低い土手状の高まりがみられる。これは地山の掘り残しを堅く踏み固められたものである。柱穴は対角線上に規則正しく4本存在し（P₁～P₄）、柱間距離は各2.6m、2.8mを測る。深さは、P₁ 63 cm、P₂ 57 cm、P₃ 62 cm、P₄ 52 cm を測る。貯蔵穴は検出されなかつた。炉はP₁とP₄の間やや中央寄りに検出され、80 cm×60 cm、深さ 9 cm を測る。

遺物等出土状況 炭化材は全く検出されなかつたが、床面から少し浮いた状態で焼土が少量検出されている。遺物量は少なく、6の底部と2のS字状口縁の台付甕が南東コーナーから隣接して出土している。他は覆土中よりの出土である。軽石が2点出土している

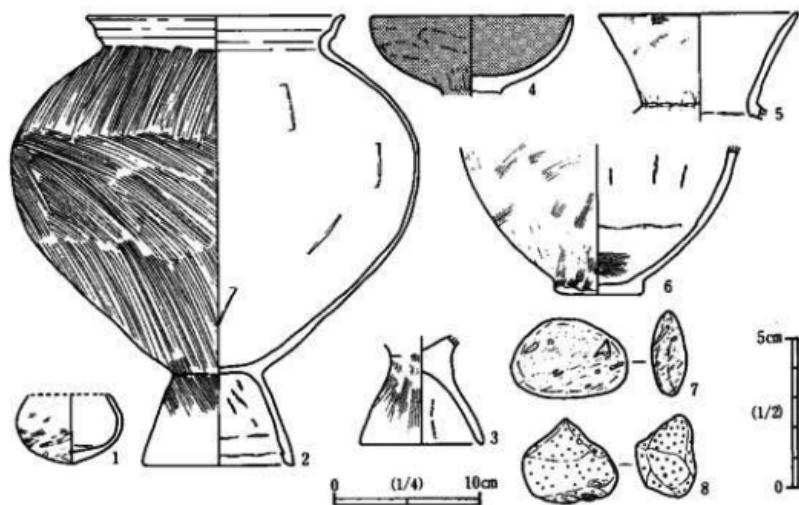
014号住居址（第44・45図）

本住居址は、調査区北側7-4・5・9・10グリッドに位置している。3.6m×3.9mの丸味を帯びた正方形を呈し、主軸方向はN-14°-Eを測る。壁は掘り込みは深いが不明瞭で、立上がりも緩やかな角度を呈している。調査時に壁の立上がりが検出出来ずに一部掘り過ぎてしまい、土層断面で確認した部分があった。覆土はしまっており自然埋没の状態を示している。床面は軟弱で踏み固められてはいない。周溝は検出されず、南壁側に深さ 14 cm の浅いピットが1基検出されたのみである。中央やや北寄りに炉が検出され、55 cm×45 cm、深さ 13 cm を測り、炉床はよく焼けていた。

遺物等出土状況 床面南西側に焼土が少量検出された。遺物は土器片が2~3片、金属製品が2点検出されたが何れも床面からではなく流れ込みによるものと思われる。



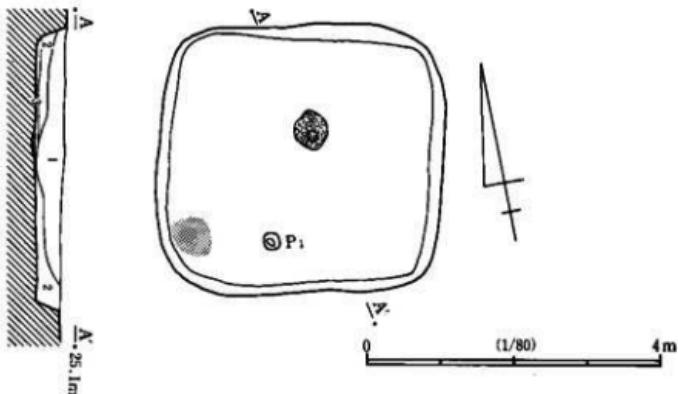
第42図 013号住居址実測図



第43図 013号住居址出土遺物実測図

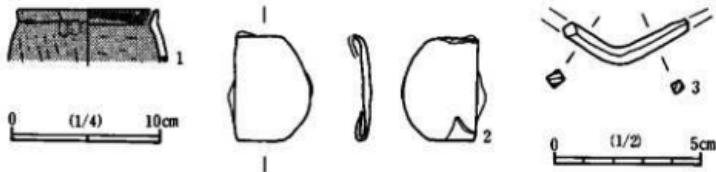
013号住居址出土遺物一覧 (第43図)

番号	名 称	遺 存 度	口 器 高 () 推定	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	小 形 塙	%	(5.6) (4.6)	口縁部内外面ナデ(?)。胴上部外面ハケメ、下部ヘラケズリ、内面ナデ(?)。	覆 土	二次焼成
2	台 付 壺	%	17.7 30.1	S字口縁。口縁部外面ヨコナデ。胴部外面ハケメ、内面ヘラケズリ後ナデ。胴上部外面ハケメ、下部ナデ、内面ナデ。船土に微跡(1~3mm)を多く含み、蓋母片を少し含む。蓋壁は3~4mmと薄い。	床 面 密 着	二次焼成
3	台 付 壺	脚 部 完 形	-	脚部外面ハケメ、内面ヘラケズリ後ナデ。	覆 土	二次焼成
4	高 壺	壺 部 %	(14.0)	口縁部外面ヨコナデ後ミガキ、内面ミガキ。壺部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキ。赤彩。	覆 土	
5	壺	口 縁 部 %	(13.6)	口縁部外面ハケメ後ミガキ、内面ミガキ。	覆 土	
6	壺	胴 下 部 完 形	-	胴上部外面ハケメ後ミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ。胴下部外面ハケメ後ミガキ、内面ハケメ。	床 面 直 上	二次焼成
7	經 石	長 32.7cm、幅3.9cm、厚さ1.2cmを有する。表面は平滑である。覆土。				
8	經 石	長 32.9cm、幅3.2cm、厚さ2.0cmを有する。表面はザラザラしている。スラグ状で気泡多い。覆土。				



1. 黒褐色土(ソフトロームを少し含む)
2. 暗褐色土(ソフトロームを多く含む)
3. 明褐色土(ソフトロームを多く含む)

第44図 014号住居址実測図



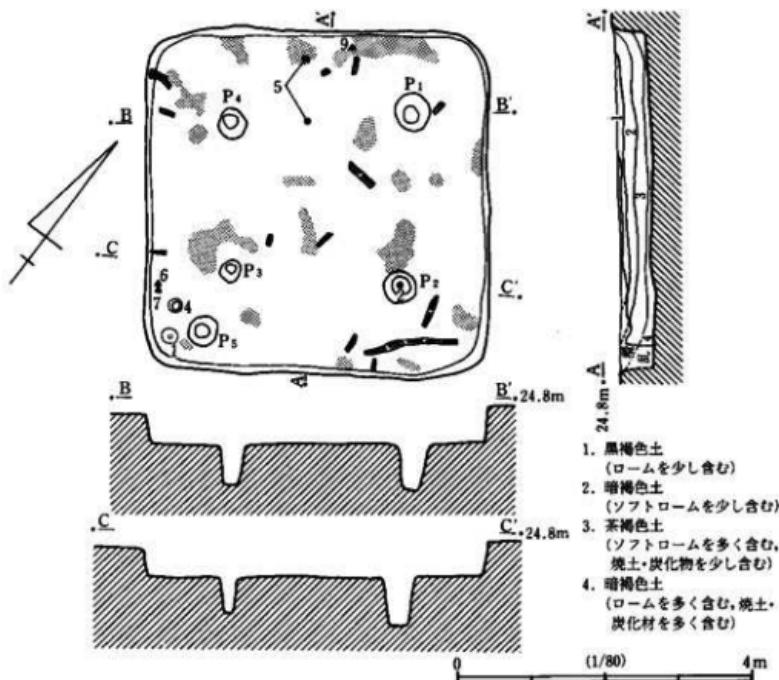
第45図 014号住居址出土遺物実測図

014号住居址出土遺物一覧（第45図）

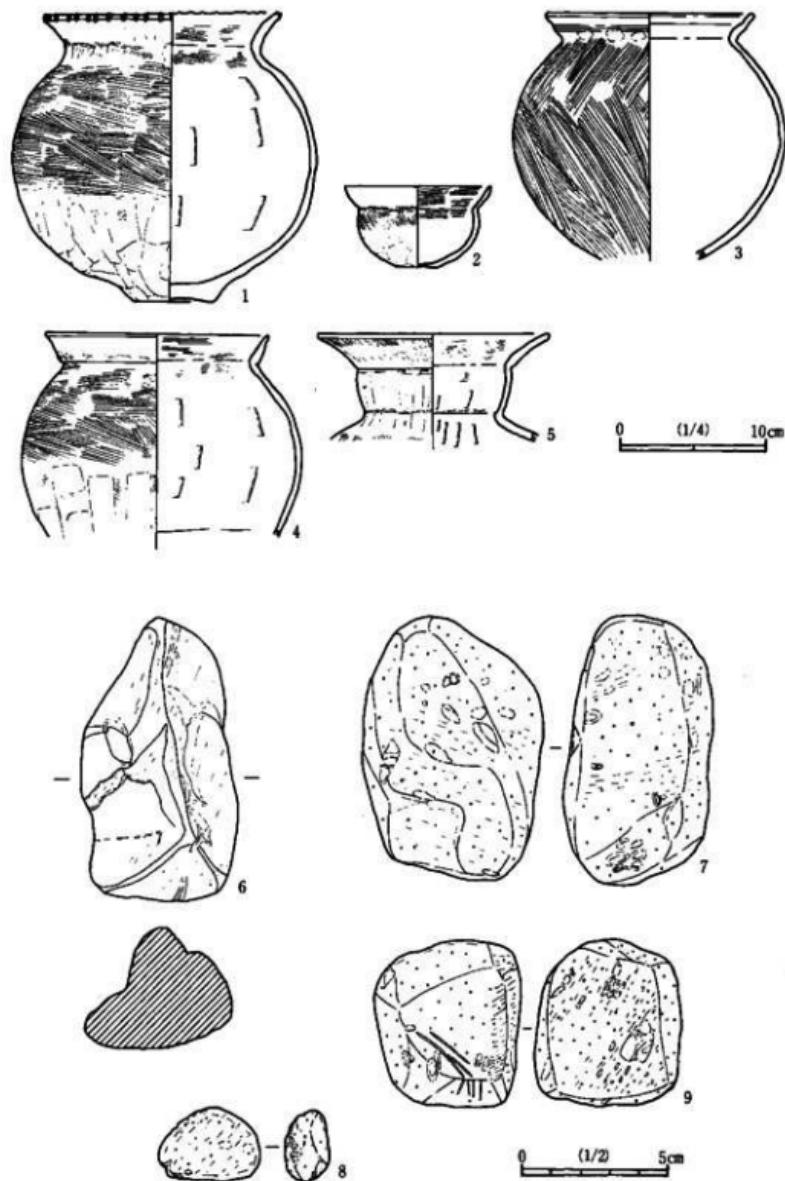
番号	名 称	遺 存 度	口 径 径 ()推定	成 形・整 形・調 整 等	出土層位	備 考
1	塊	口縁部 1/4	(9.7) —	口縁部外面ヨコナデ後ミガキ、内面ハケメ後 ミガキ。胴上部内外面ミガキ、赤彩。	覆 土	二次焼成
2	鐵 製 品	長さ3.5cm、幅2.6cm、厚さ0.5cmを測る。カマボコ形の鉄板の両端を折り返したもので折り返し部分は、 破損している。先金具に繋ぐものと思われる。覆土。				
3	鐵 製 品	長さ4.3cm、太さ0.5cmを測る。正方形の断面を呈し、一方から他方へ太さを減じ、中央で屈曲してい る。両端は、折損している。釘と思われる。覆土。				

015号住居址（第46・47図 図版12・19・20・21）

本住居址は、調査区北東寄りの7-14・15・19・20グリッドに位置している。4.7m×4.7mの正方形を呈し、主軸方向はN-37°Wを測る。掘り込みは深くしっかりとしており、壁の立上がりも、ほぼ垂直に立上がる。覆土は自然埋没状態を示し、床面近くには炭化材・焼土を多く含んでいる。床面の炭化材・焼土からみて、焼失住居と考えられる。床面は堅く踏み固められており平坦である。周溝は検出されなかった。柱穴はほぼ対角線上に4本検出され（P₁～P₄）てい



第46図 015号住居址実測図



第47図 015号住居址出土遺物実測図

015号住居址出土遺物一覧（第47図）

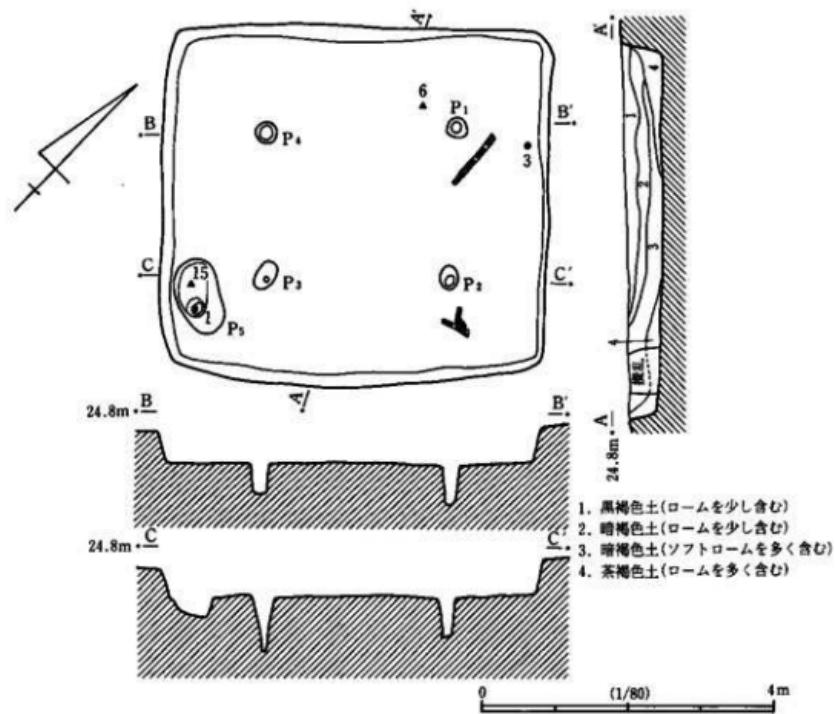
番号	名 称	遺 存 度	口 器 ()推定	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	甕	完 形	16.3 19.8	口唇部キザミ。口縁部内外面ハケメ後ナデ。胴上部外縫ハケメ、下部ハケメ後ヘラケズリ。内面ヘラケズリ後ナデ。	床 面 密 着	上半部二次焼成。内面炭化物付着
2	甕	少	10.2 5.6	口縁部外縫ヨコナデ、内面ハケメ後ナデ。胴上部外縫ハケメ、下部、ヘラケズリ後ミガキ。内面ナデ。	床 面 密 着	二次焼成
3	台付甕(?)	脚部を除く 少	(14.5) —	S字口縁。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケメ、内面ナデ。	覆 土	二次焼成 外縫炭化物付着
4	甕	胴 下 部 を 除 く 完 形	15.4 —	口縁部外縫ヨコナデ、内面ハケメ後ヨコナデ。胴上部外縫ハケメ、下部ハケメ後ヘラケズリ。内面ヘラケズリ後ナデ。	床 面 密 着	
5	甕	口縁部完形	16.1 —	口縁部内外面ハケメ後ナデ。胴部外面ミガキ。内面ヘラケズリ後ヨコナデ。胴上部外面ハケメ後ミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ。	床 面 直 上	
6	石 製 品	長さ9.5cm、幅5.4cm、厚さ4.1cmを測る。断面は三角形を呈し、表面は平滑である。珪質頁岩。床面密着。				
7	軽 石	長さ8.8cm、幅6.2cm、厚さ5.1cmを測る。表面は平滑である。床面密着。				
8	軽 石	長さ2.6cm、幅3.5cm、厚さ1.5cmを測る。多孔質だが表面は平滑である。覆土。				
9	軽 石	長さ5.7cm、幅5.1cm、厚さ5.0cmを測る。ほぼ立方形を呈し、二面に数条の刻線が認められる。床面直上。				

るが柱間距離にややばらつきがみられる。南コーナーには貯蔵穴と思われるピット(P_s)が検出された。柱穴・ピット、それぞれの深さは、P₁ 64 cm、P₂ 66 cm、P₃ 48 cm、P₄ 53 cm、P₅ 32 cmを測る。炉は検出されなかった。

遺物等出土状況 床面に少量の炭化材と焼土が分布している。P_sの南西側には、1・4の甕が原位置を保って出土している。1の甕は床面に伏せられた状態で出土し、その内からは貝が検出された。貝は火を受けており破損、剥離等が認められ、遺存が極めて悪かったが、確認できたのは数個体であり、そのうち1個体はシオフキガイ(Mactra veneriforinis REEVE)の右殻、もう1個体はニッコウガイ科もしくはそれに近い種類のものであることが同定された。⁽¹⁾ 4の甕は、体下部を欠損したものが床面に正位で置かれていた。甕、軽石が4に近接して出土している(6、7)。9の軽石には数条の刻線が認められる。

016号住居址（第48・49図 図版13・21）

本住居址は、調査区北東側8-17・18・22グリッドに位置している。5.3m×4.9mの整った長方形を呈し、主軸方向はN-42°-Wを測る。掘り込みは深くしっかりしており、壁の立上りも垂直に近い状態を示す。覆土は自然埋没状態を示している。床面近くに炭化材の出土が少量みられるが、量が少なく焼失住居とみるには疑問がある。床面はやや軟弱で、周溝は検出されなかった。柱穴は対角線上に規則正しく4本検出され(P₁~P₄)、柱間距離は各2.1m、2.6mを測る。各々の深さは、P₁ 51 cm、P₂ 52 cm、P₃ 73 cm、P₄ 42 cmを測る。P_sの南西側に貯蔵穴と思われるピット(P_s)が検出された。P_sは2段に掘り込まれており、広く浅い部分は深さ25 cmを測り、更にその南東端部を7 cm程掘り込み、全体で32 cmとなっている。炉は



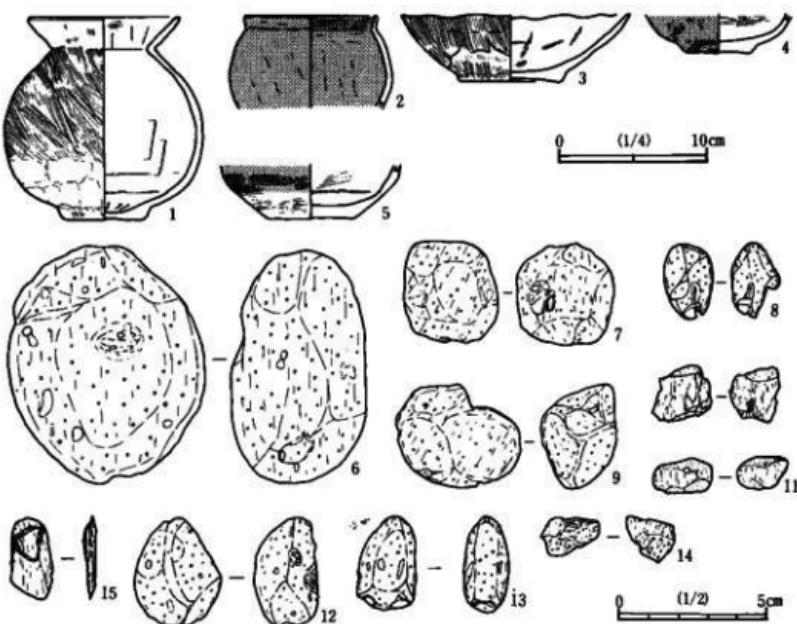
第48図 016号住居址実測図

検出されなかった。

遺物等出土状況 P₁、P₂の脇、床上から炭化材が少量出土している。遺物の量は少なく、1の甕がP₅の覆土中より、3の運転用の塊が北東壁際より出土している。大小の軽石(6~14)と滑石片(15)1点が出土している。

017号住居址 (第50・51図 図版13・20・21)

本住居址は、調査区北側の7-7・8・12・13グリッドに位置している。4.1m×4.9mの横長方形を呈し、主軸方向はN-49°-Wを測る。掘り込みはやや浅めであるがしっかりしており、壁も垂直に近い立上りを示す。覆土は自然埋没状態を示し、床面近くでは焼土・炭化材を少量含んでおり、焼失住居と考えられる。床面はやや堅く踏み固められている。周溝は検出されなかった。対角線上に浅いピットが3基検出されており(P₁~P₃)、柱穴と考えられようが、深さがP₁ 15cm、P₂ 16cm、P₃ 19cmと浅く、P₃は炉に近接しすぎることを考えると柱穴であるか疑問が残る。炉はP₃に近接して位置し、75cm×55cm、深さ10cmを測る。

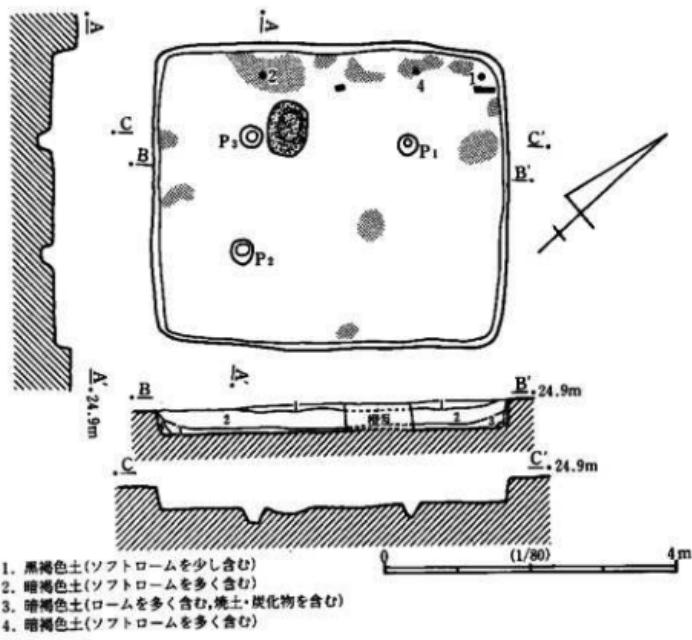


第49図 016号住居址出土遺物実測図

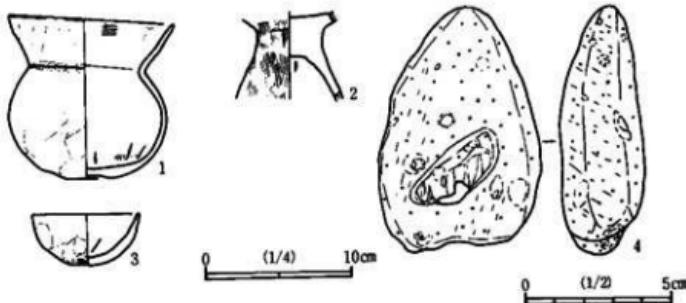
016号住居址出土遺物一覧（第49図）

番号	名 称	遺 存 度	口 器 径 高 ()推定	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	壺	×	10.5 13.9	口縁部内外面ハケメ後ナデ。外面胴上部ハケメ、下部ハケメ後ラケズリナデ。	P ₁ 覆 土	二次焼成
2	塊	×	(9.2) —	口縁部外面ミガキ。内面ハケメ後ナデ。胴部内外面ミガキ。赤影。	覆 土	
3	塊	完 形	15.5 4.6	外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ。底部周辺に網代痕。要の底部を焼成後、内外面より研磨し口縁として仕上げをしている。不規則な波状口縁になっている。	床 面 密 着	二次焼成 壺の転用と思われる。
4	要 (?)	底 部 完 形	—	胴外面ハケメ後ミガキ、内面ハケメ。胴下部外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ。赤影。	覆 土	二次焼成
5	塊 (?)	底 部 ×	—	胴上部外面ナデ、中部ハケメ、内面ハケメ、胴下部外面ハケメ後ミガキ、内面ナデ。赤影。	覆 土	
6	軽 石	長さ8.0cm、幅6.7cm、厚さ4.6cmを測る。	—	全体的に平滑である。覆土。		
7	軽 石	長さ3.4cm、幅3.2cm、厚さ3.3cmを測る。	—	いびつな球形を呈し、表面は滑らかである。覆土。		
8	軽 石	長さ2.6cm、幅1.6cm、厚さ1.7cmを測る。	—	一部破損している。表面は滑らかである。覆土。		
9	軽 石	長さ3.5cm、幅4.4cm、厚さ2.6cmを測る。	—	ややいびつな形を呈す。表面は滑らかである。覆土。		
10	軽 石	長さ1.9cm、幅2.0cm、厚さ1.7cmを測る。	—	不規則な多面体で、表面はザラザラである。黒色コクス状。覆土。		
11	軽 石	長さ1.2cm、幅2.0cm、厚さ1.7cmを測る。	—	表面はザラザラしている。黒色コクス状。覆土。		
12	軽 石	長さ3.6cm、幅2.9cm、厚さ2.2cmを測る。	—	表面は平滑である。覆土。		
13	軽 石	長さ3.1cm、幅2.0cm、厚さ1.6cmを測る。	—	表面は平滑である。覆土。		

14	經 石	長さ1.3cm、幅1.9cm、厚さ1.6cmを測る。不規則な形を呈し、表面はザラザラしている。黒色コーカス 状。覆土。
15	石 製 品	長さ2.7cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。薄い剝片状を呈する。滑石。P ₃ 覆土。



第50図 017号住居址実測図



第51図 017号住居址出土遺物実測図

017号住居址出土遺物一覧（第51図）

番号	名 称	遺 存 度	口 径 高 ()推定	成 形・整 形・調 整 等	出土 層位	備 考
1	壇	完 形	11.7 11.2	口縁部外面ミガキ、内面ハケメ後ミガキ。脚 上部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ナデ。脚 下部外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ後ナデ。	床 面 寄 着	二次焼成 一部炭化物付 着
2	台 付 壺	脚 部 ½	— —	脚部外面ハケメ一部ナデ、内面ヘラケズリ後 ナデ。	床 面 寄 着	二次焼成
3	ミニチュア	½	7.3 3.5	口縁部外面ヨコナデ。脚部外面ヘラケズリ、 内面ヘラケズリ後ナデ。	覆 土	
4	軽 石	長さ8.3cm、幅5.6cm、厚さ3.0cmを測る。		中央が窪み、裏面に達する穴が認められる。全体的には、平 滑である。床面密着。		

遺物等出土状況 床面に焼土が散布し、炭化材が極く少量検出されている。遺物量は少なく、北西壁際に1の壇、2の台付壺の破片、4の軽石が出土した。

018号住居址（第52・53図 図版14・20・21）

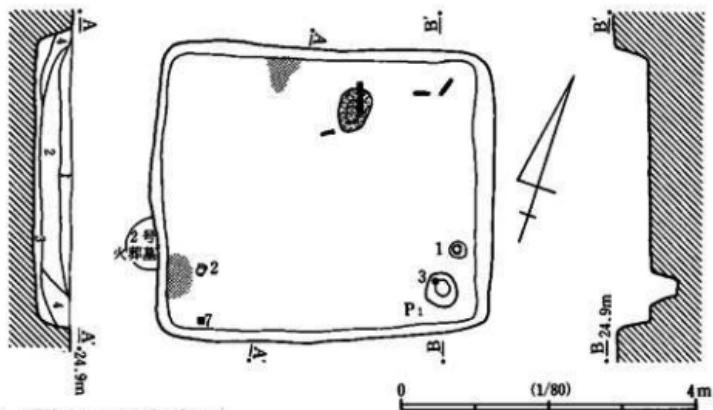
本住居址は、調査区北側7-1・6グリッドに位置し西壁の一部と覆土を掘り込んで2号火葬墓が築かれている。本址は4.0m×4.7mの長方形を呈し、主軸方向はN-19°-Wを測る。掘り込みは深くしっかりしているが、壁の立上りはやや緩い角度を呈している。覆土は自然埋没状態を示し、床面には少量の炭化材・焼土がみられるが焼失住居とは考え難い。床面は堅く踏み固められており、周溝・柱穴は検出されなかった。南東コーナーに貯蔵穴と思われるピット（P₁）が1基検出され、深さは37cmを測る。炉は北壁側に検出され60cm×40cm、深さ5cmの浅いものである。

遺物等出土状況 床面に極く少量の炭化材・焼土が散布している。P₁の北側の床面で下半を欠損した1の壺が出土しているが体部2ヶ所に、数条の線刻がみられ、床面に設置されていた様な状況から何らかの台座として用いられていたと考えられる。2の壇は南西コーナー近くより出土し、7の鎌は、床面より約12cm浮いた状態で出土している。

019号住居址（第54・55図 図版21）

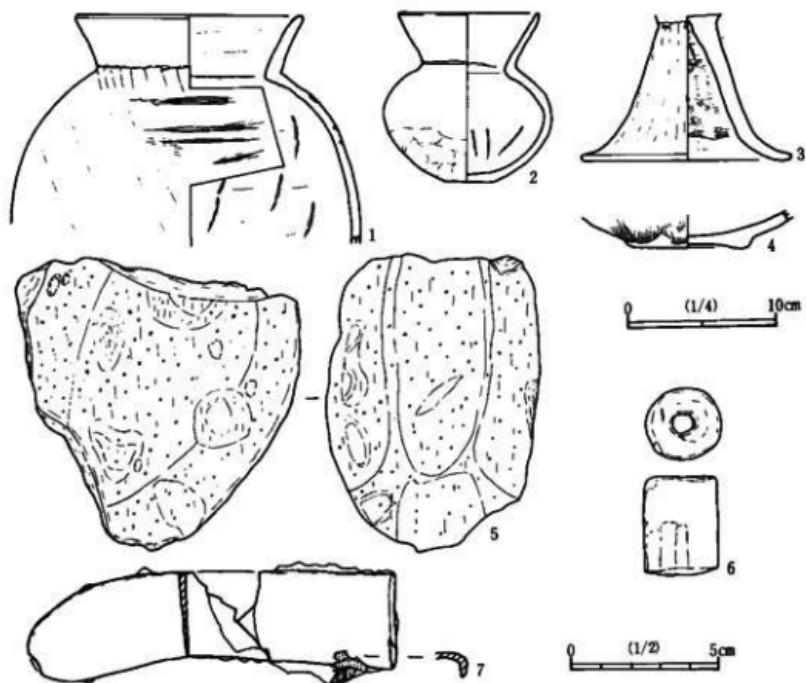
本住居址は、調査区南東端の15-10・15グリッドに位置しており、その大部分が調査区外に所在するため一部分しか調査が出来なかった。その為規模は確定できないが、調査した部分からみて一辺が5.7m以上であることは確実である。炉と検出した一辺を基に主軸を想定するとN-26°-Wとなる。掘り込みは深くしっかりしており壁もほぼ垂直に立上る。覆土は表土から観察することが出来たが、他の遺構と比して特に変化はなく自然埋没状態を示している。床面は堅く踏み固められており、調査範囲においては周溝・柱穴・貯蔵穴共に検出出来なかった。炉が検出出来たが調査区外にかかるため約半分しか調査出来なかった。深さは、8cmを測る。

遺物等出土状況 炉の北側の床面で灰褐色の粘土塊を2点検出した。3の有孔円板は床面より約7cm浮いた状態で検出している。他は覆土中よりの出土で破片である。



1. 黒褐色土(ロームを少し含む)
2. 黒褐色土(ロームを多く含む、炭化物を含む)
3. 線褐色土(ロームを多く含む)
4. 喰褐色土(ソフトロームを少し含む)

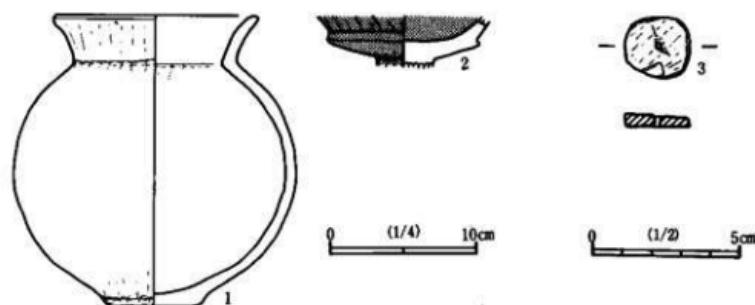
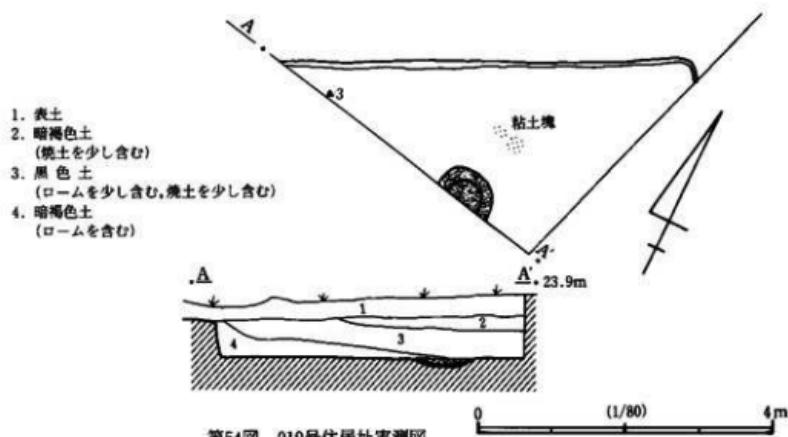
第52図 018号住居址実測図



第53図 018号住居址出土遺物実測図

018号住居址出土遺物一覧 (第53図)

番号	名 称	遺 存 度	口 径 高 () 推定	成 形・整 形・調 整 等	出土 居 席	備 考
1	壺	肩部以上 完 形	15.5 —	口縁部外側ヨコナデ、内面ヨコナデ後ミガキ。 肩上部外側ヘラケズリ後ミガキ、内面ヘラケズリ後ミガキ。	床 面 密 着	胴上部に長さ 7cm、深さ2 mm程の数条の 割みが2か所に 認められる。
2	壺	ほば 完 形	9.7 11.3	口縁部内外面ヨコナデ。肩上部ヨコナデ、下 部ヘラケズリ。内面ヘラケズリ後ナデ。	床 面 密 着	
3	高 壕	脚部ほば 完 形	—	脚部外側ヘラケズリ後ミガキ、内面上部ヘラ ケズリ、下部ハケメ後ナデ。腰部ヨコナデ。	P. 檻 土	
4	壺	底 部 1/2	—	肩下部外側ハケメ、内面ナデ。	檻 土	器面磨耗
5	輕 石	—	長さ9.8cm、幅9.7cm、厚さ7.3cmを測る。凹石状の形態を呈し、上方・左方を欠損する。表面に小さな孔みを数個有する。覆土。			
6	土 磬	—	長さ3.2cm、直径2.4cmを測る。側面には一部ヘラケズリが認められる。上下両側から直径0.8cmの穿孔 が行なわれている。覆土。二次焼成が認められる。			
7	鐵	—	長さ12.4cm、幅3.2cm、厚さ0.2cmを測る。中央付近に一部破損あり。基端部に折り返しを有するが大 半を欠損する。基端部近く刃部に木質付着。刃部中央付近研ぎ減りが認められる。覆土。			

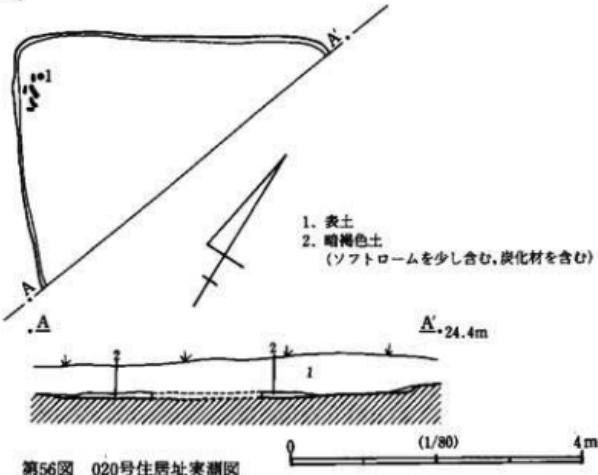


019号住居址出土遺物一覧 (第55図)

番号	名 称	遺 存 度	口 窓 器 ()推定	成 形・整 形・調 整 等	出土層位	備 考
1	甕	%	(13.9) (19.6)	口縁部外側ミガキ、内面ヨコナデ後ミガキ。 肩部外側ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキ(?).	覆 土	二次焼成 器面剥離
2	高 壺	下 部 完	—	壺下部外側、ハケメ後ヨコナデ、後部以下ヘ ラケズリ後ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ。赤 彩。	覆 土	
3	有孔円板	—	—	直径2.2cm、厚さ0.5cmを測る。中央に直径2mmの穿孔が1か所認められる。仕上げが悪く表面に擦痕 が残る。側面も多面で棱が認められる。滑石(軟質)。床面直上。		

020号住居址 (第56・57図)

本住居址は、調査区南東の16—1グリッドに位置しており、遺構の約半分は調査区外にあるため調査不可能であった。又掘り込みが浅いため遺存が悪く、確認面からの深さは、約5cmしか残っていなかった。調査した範囲から推定すると、3.6m×4.5mの長方形を呈すると思われ、長軸方向はN—39°—Wとなる。掘り込みは前述の通り、大変浅く約5cmしか残っていないため壁の立上りも不明瞭であった。床面には一部に炭化材がみられ、焼失住居と思われるが遺存が悪いため断言できない。床面は堅く踏み固められている。周溝・柱穴・炉等の掘り込みは、何も検出されなかった。



第56図 020号住居址実測図



第57図 020号住居址出土遺物実測図

020号住居址出土遺物一覧（第57図）

番号	名 称	遺 存 度	口 横 器 高 ()推定	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	ミニチュア	完 形	5.6 4.7	外面上部ハケメ、下部ヘラケズリ後ナデ。内面口縁部ヨコナデ、脚部ヘラケズリ後ヨコナデ。	床 面 密 着	二次施成
2	甕	底 部 保	—	脚下部外面ハケメ、内面ナデ。底部木葉痕。	覆 土	二次施成
3	鐵 鉄	長さ4.3cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmを測る。両端を上方に折り返し、上部で結合させた形でいわゆる半月形を呈す。中央部が使用によって磨耗している。覆土。	—	—	—	—
4	鐵 製 品	長さ3.5cm、幅2.0cm、厚さ0.35cmを測る。一端を折損する。厚さが一様で扁平な鉄板を加工したもの。鍛鉄の可能性もあるが、頭部に穿孔は認められない。覆土。	—	—	—	—

遺物等出土状況 西コーナーに炭化材が少し検出されており、1のミニチュアが近接して検出されている。3の鍛鉄、4の鉄製品は、確認面からのもので本住居址に伴うものではないかも知れない。

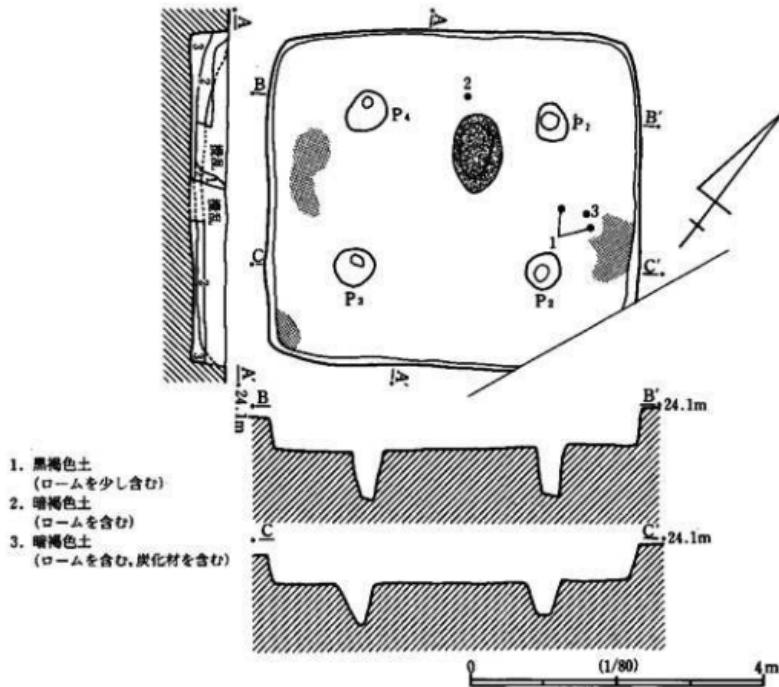
021号住居址（第58・59図 図版14）

本住居址は、調査区東側12-11・12・16・17グリッドに位置しており、東コーナーが調査区外のため調査出来なかったが、ほぼ全容を調査することができた。本址は4.6m×5.1mの長方形を呈し、主軸方向はN-37°-Wを測る。煙の耕作によって覆土は大きく攢乱されており一部床面まで達していた。掘り込みは深くしっかりしており、壁もほぼ垂直に立上る。覆土は自然埋没状態を示し、床面近くには焼土・炭化材片を含んでいる。堅く踏み固められた床面には、焼土・炭化材片が分布し、焼失住居と考えられる。周溝は検出されなかった。柱穴は4本検出され（P₁～P₄）、柱間距離各2.2m、2.5mの規則正しい配列を示している。貯蔵穴等は検出されなかった。炉はP₁、P₄の中間やや中央寄りに検出され、110cm×70cm、深さ16cmを測る。

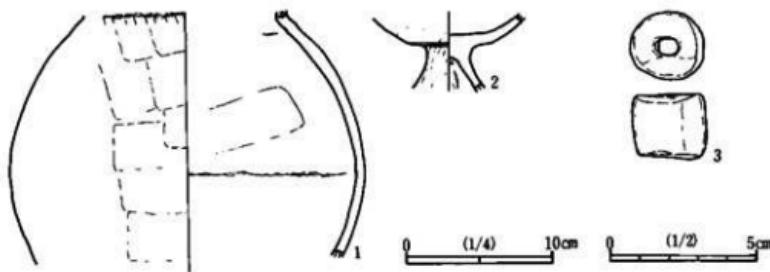
遺物等出土状況 床面から焼土・炭化材片が検出されている。遺物は床面に密着したものではなく、いずれも破片で床面から約20cm浮いた状態で検出されていて埋没途中的廃棄によるものと考えられる。

021号住居址出土遺物一覧（第59図）

番号	名 称	遺 存 度	口 横 器 高 ()推定	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	甕	脚 部 保	— —	脚部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ。	覆 土	二次施成 器面剥離
2	高 壁	脚 部 保	—	脚下部外面ミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ。 脚部外面ハケメ後ミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ。	覆 土	—
3	土 壤	長さ2.1cm、直径2.4cmを測る。直徑0.7cmの穿孔が認められる。二次施成を受けている。覆土。	—	—	—	—



第58図 021号住居址実測図



第59図 021号住居址出土遺物実測図

注

(1) 貝類の同定にあたっては、当千葉県文化財センター 主任調査研究員 小宮 孟氏に同定を頼った。

第3節 歴史時代

本遺跡で検出された歴史時代の遺構は、火葬墓2基である。その他、該期の遺構・遺物は全く検出されなかった。

1号火葬墓（027号址）（第60・61図 図版20・22）

本址は、調査区北側7-7グリッドに位置する。表土除去後、遺構確認面精査の際に骨蔵器の検出により所在が確認されたが、当初掘り込みが不明瞭でプランが確認出来ず、そのため骨蔵器を中心に半裁して掘り下げ、土層断面の観察により掘り込みプランを確認した。土壌の掘り込みは65cmの円形を呈するものと思われ、深さ15cmで、一度平坦な径35cmの底となる。その底に更に骨蔵器を納めるための径13cm、深さ5cm、底径5cm程の掘り込みがあり、そこに骨蔵器が据えられていた。覆土は黒褐色土で焼土粒を少し含んでいた。骨蔵器は土師器の甕が用いられており、前述の土壌の小さな掘り込みに正置して納められていた。甕の内部には、火葬人骨の細片が約半分ほど納められ、残り上半部は、褐色土が充満していた。火葬人骨は細片のため詳細は不明であるが頭蓋骨片、大腿骨片の存在したことと、その量からみて1人の火葬骨を納めたものと思われる。骨蔵器は検出時には既に口縁は欠損して存在せず、蓋にあたるものも他の遺物も検出されなかった。

1号火葬墓出土遺物

1は骨蔵器で、土師器の甕の転用である。口縁部を除きほぼ完形である。口縁直下からゆるやかにふくらみ、胴上部で最大径を示し、ゆるやかにすぼまり一度稜を持って底部へ至る。底部径は4.8cmを測る。外面は、ヘラケズリが行われ、胴部の一部にミガキが認められる。内面はヘラケズリ後ナデが行われている。器厚は2~3mmと薄く、胎土は砂粒を多く含んでいる。色調は橙褐色で底部周辺は黒色を呈している。

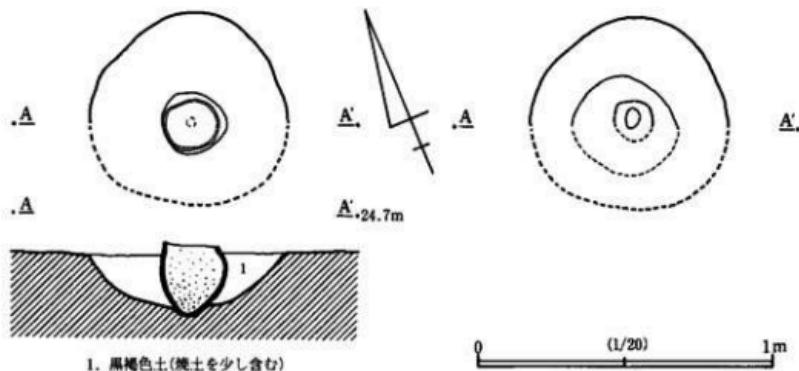
2号火葬墓（028号址）（第62・63図 図版20・22）

本址は、1号火葬墓に近隣し7-6グリッドに所在している。1号火葬墓との距離約5mを測る。本址は018号住居址の壁際に位置し覆土と壁の一部を切って掘り込まれている。1号火葬墓同様に遺構確認面精査の際の骨蔵器検出により確認された遺構である。1号火葬墓同様掘り込みが不明瞭で特に018号住居址覆土との識別が出来ず住居の調査と併行して調査を行った。土壌の掘り込みは、75cm×60cm、深さ20cmの横円形になると思われ、底は径約20cmの円形を呈している。覆土は黒褐色土でやや固くしまっていた。骨蔵器は二つの容器が組み合わされて用いられたとみられ底部の欠失した須恵器の甕（瓶）の破片の下から人骨片の入った土師器の容器が検出された。外容器とみられる須恵器の甕は、表土堆土時の外力により破損され

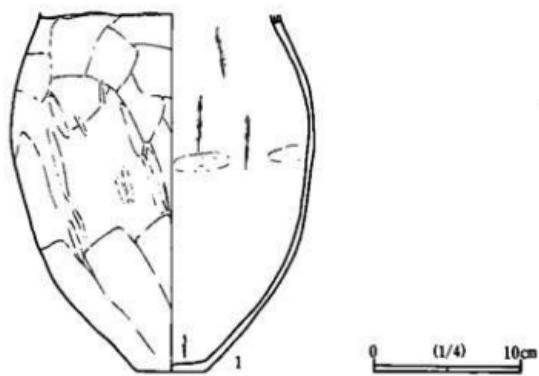
ており、原位置を保つと考えられる破片は少なかった。内容器とみられる土師器の容器は、土壙底面に接して正置されていた。外容器の須恵器の甕は、底部が欠失していることから、内容器の土師器に火葬骨を納め、それを外容器の須恵器の甕に納めて埋納したものと思われる。人骨片は火葬されているが、細片のため詳細は不明である。以上の骨蔵器・火葬骨の他は、蓋にあたるものも他の遺物も検出されなかった。

2号火葬墓出土遺物

1は、須恵器の甕である。底部を欠損する以外はほぼ完形で口径 29.5 cm を測る。口縁部は折り返しがみられ短く「く」の字状に外反している。胴部は口縁直下よりややふくらみを持ちながら下り、ゆるやかにすぼまっている。胴部外面は、タタキが行われ、一部ナデによってタ

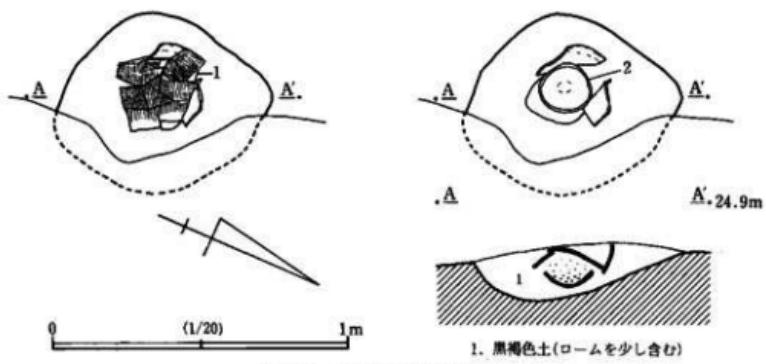


第60図 1号火葬墓実測図

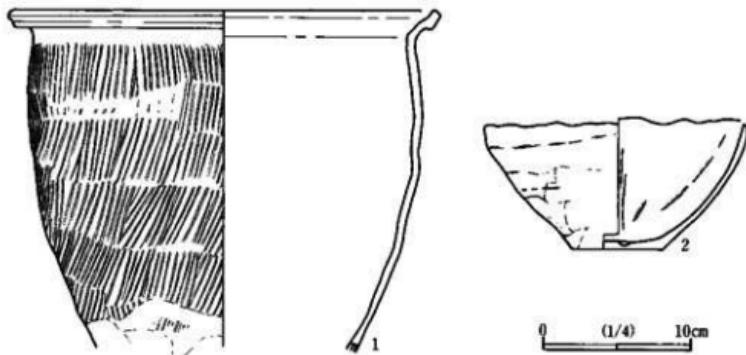


第61図 1号火葬墓出土遺物実測図

タキを磨消している。底部近くは、ヘラケズリが行われる。内面はオサエの後ナデが行われている。胎土は砂粒を多く含み、焼成はあまりよくない。灰白色を呈している。2は土師器の塊である。骨蔵器の内容器として用いられている。甕の底部を転用して口縁として仕上げたものらしく、口縁は薄く小波状を呈している。口径 17.9 cm、器高 8.8 cm を測り、口縁から底部まではほぼ直線的にすばまっている。口縁部はナデが行われ、胴部はヘラケズリ後ナデが行われる。内面は、ヘラケズリの後ナデが行われる。底部内面中央に直径 0.9 cm、深さ 0.3 cm の窪みが認められる。胎土は砂粒を多く含み、橙褐色を呈している。



第62図 2号火葬墓実測図



第63図 2号火葬墓出土遺物実測図

第4節 そ の 他

(1) 時期不明の遺構

1号溝（025号址）（第64・65図 図版21）

本溝は、調査区をほぼ南北に走る溝である。北側は1-20グリッドに端を発し、南側は14-19グリッドへ至り更に南の調査区外へ続くほぼ直線状の溝で、方向はN-11°-Wの方向に走っている。幅は30cm~90cm、深さは5cm~55cmと一様ではない。断面は浅い所では皿形、深い所ではV字形を呈している。覆土は黒褐色土を主体としている。中央付近から、滑石の扁平な破片が1点出土している。

1号溝出土遺物

1は溝の中央付近より出土した滑石片である。長さ7.2cm、幅7.0cm、厚さ1.6cm、を測り扁平な板状を呈している。緑色片岩質である。

1号土壙（025号址）（第66図）

本址は、12-7グリッドに位置し2.5m×1.5m、深さ58cmを測る長円形土壙である。東壁はやや緩かに立上るが、他の壁は垂直に近く立上っている。底面は堅くしまっている。覆土は黒褐色土を主とし、ロームを多く含んでいる。確認面の覆土中央部に薄い焼土の散布がみられた。遺物は土師器の細片が2~3片出土したが図示できるようなものはなかった。

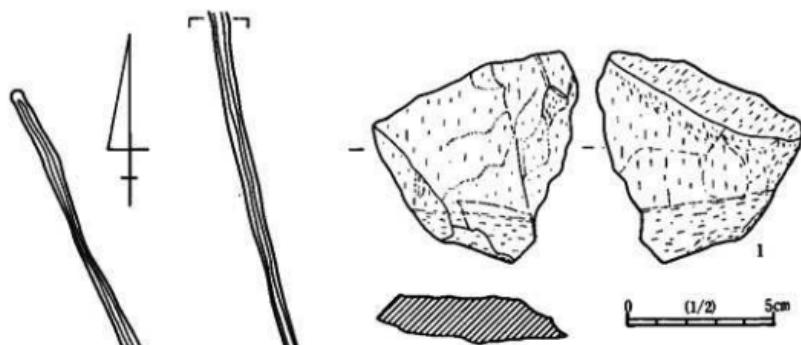
(2) 表面採集及び遺構内出土の縄文式土器（第67図）

本遺跡内において縄文時代の遺構は検出されなかつたが、表面採集及び住居址覆土内より縄文式土器片が極く少量検出されている。それらを一括してここでとりあげる。

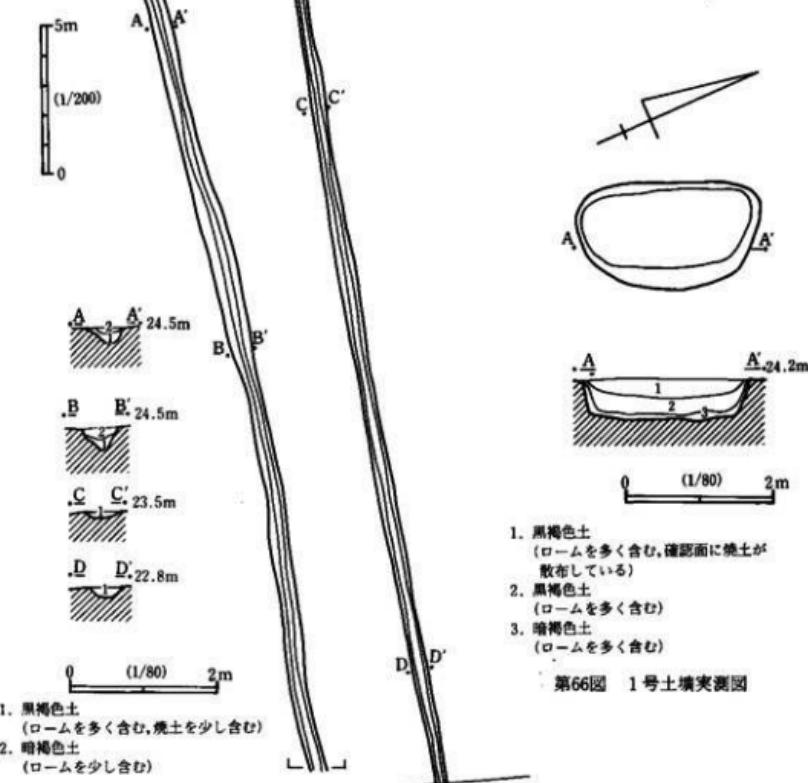
1は条痕文を有する口縁部片である。波状を呈すると思われる口縁部の横位に1条の隆帯が認められ、隆帯には貝殻腹縁によると思われる刻みがみられる。又、波頂部から縦位に高い隆帯が1条みられ、それにも同様な刻みがみられる。地文は、隆帯部以上は横位、以下は縦位の磨消と思われる条痕がみられ、隆帯以下にはその上に斜行する沈線文が何条かみられる。内面にも外面同様の横位の磨消と思われる条痕がみられる。胎土に纖維の混入はほとんど認められず、雲母の目立つ砂粒を多く含んでいる。早期末~前期初頭の土器と思われる。

2は縄文のみられる胸部の破片である。連続刺突文による2条の区画の下に磨消縄文帯を持ち、その下に一部沈線で区画された縄文がみられる。胎土は、砂粒を多く含んでいる。

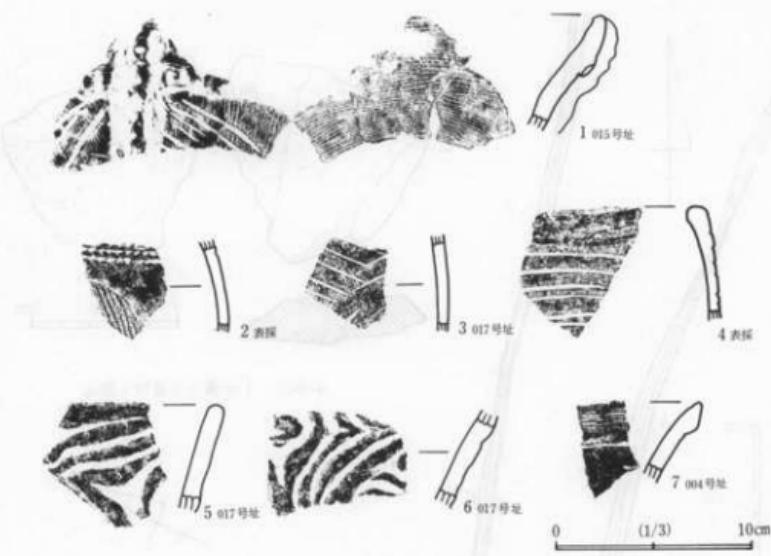
3は沈線のゆるやかに交差する胸部片で胎土は石英粒を多く含んでいるが、堅致である。2・3共に加曾利B式と思われる。



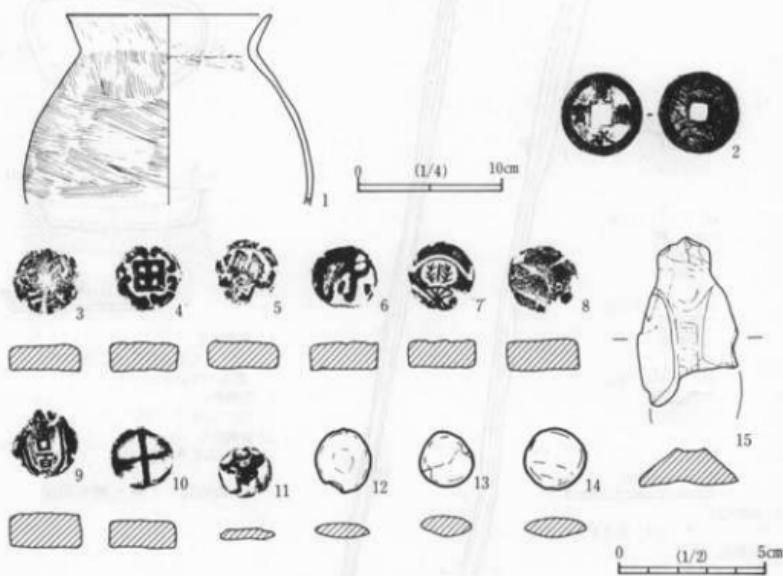
第65図 1号溝出土遺物実測図



第64図 1号溝実測図



第67図 繩文土器拓影図



第68図 表面採集遺物及び近世以降の出土遺物実測図

表面採集及び近世以降の出土遺物一覧（第68図）

番号	名 称	遺 存 度	口 径 器 高 ()推定	成 形・整 形・調 整 等	出 土 層 位	備 考
1	甕	胴上部	14.2	口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ。胴部外面ハケメ。胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	表 採	
2	古 銭	寛永通寶。（新寛永）	直径2.8cm、厚さ1.4mm、孔径6.3×6.5mm、銅銭、背面11波。表採。			
3	泥 面 子	直径2.4cm、厚さ0.85cmを測る。型押成形素焼で、表面は磨滅しており、絵柄は不明。表採。				
4	泥 面 子	直径2.4cm、厚さ0.95cmを測る。型押成形素焼で、表面に緑色塗装の痕跡が認められる。絵柄は文字「田」。表採。				
5	泥 面 子	直径2.35cm、厚さ0.9cmを測る。型押成形素焼で、表面は一部磨滅している。絵柄は不明。007号住居址覆土。				
6	泥 面 子	直径2.25～2.3cm、厚さ0.95cmを測る。型押成形素焼で、表面は一部磨滅している。絵柄「源」。007号住居址覆土。				
7	泥 面 子	直径2.4cm、厚さ0.9cmを測る。型押成形素焼。絵柄は、家紋「重ね扇に抱き柏」。009号住居址覆土。				
8	泥 面 子	直径2.3～2.45cm、厚さ1.0cmを測る。型押成形素焼。表面は磨滅しており、絵柄は、不明。015号住居址覆土。				
9	泥 面 子	直径2.45cm、厚さ1.2cmを測る。型押成形素焼。一部破損。絵柄は、貨幣「當百」。015号住居址覆土。				
10	泥 面 子	直径2.25cm、厚さ1.0cmを測る。型押成形素焼で、表面に緑色塗装の痕跡が認められる。絵柄は家紋「丸に十」。021号住居址覆土。				
11	泥 面 子	直径1.85cm、厚さ0.45cmを測る。型押成形素焼。表面はやや磨滅している。絵柄は「奴」。008号住居址覆土。				
12	基 石	直径1.8～2.05cm、厚さ0.5cmを測る。手捏ね素焼。012号住居址覆土。				
13	基 石	直径1.75～1.85cm、厚さ0.7cmを測る。手捏ね素焼。012号住居址覆土。				
14	基 石	直径2.0cm、厚さ0.7cmを測る。手捏ね、素焼。018号住居址覆土。				
15	泥 人 形	現存長5.65cm、幅3.45cm、厚さ1.2cmを測る。型押成形素焼で、下部を破損する。形象「舞」。012号住居址覆土。				

4は口縁である。横行する沈線文によって施文され、内面はきれいに磨かれている。安行II式の粗製土器と思われる。

5・6は同一個体と思われ、5は口縁部、6は胴上部と思われる。波状を呈する口縁から胴部にかけて三叉文が観察される。内外面共によく磨きが施されている。胎土は黒雲母を多く含んでいる。安行IIIa式と思われる。

7は口縁部片で折り返し部との区間に1条の沈線がみられる。口縁には平行する燃糸文がみられる。胎土は荒く石英粒を多く含んでいる。千網式の粗製土器であろう。

(3) 表面採集遺物及び近世以降の出土遺物（第68図）

1は土師器の甕で五領式期のものとみられる表採品である。

2～15は近世以降の遺物を一括して図示する。2は「寛永通寶」の銅銭でいわゆる「新寛永」の四文銭である。3～15は素焼きの土製品で泥面子、基石、泥人形である。これらの土製品は、千葉県下の畠から数多く出土することが知られており、特に県北西部に多く確認されている。これらは江戸中期に登場したものと言われ、当時は「面模（めんがた）」「面打」「めんてう」「紋打」などと呼ばれたが後に泥面子と呼ばれるようになり、遊びのすたれた現在は、泥面子の名称で報告されていることが多い。本遺跡周辺でも畠から検出され、周辺遺跡の調査報告にも言及されていることが多い。これらは「江戸ゴミ」「花ゴミ」と称して江戸から畠作の肥料として

生ゴミと共にもたらされ、畠にまかれたものであろうとの指摘がされており本遺跡においても、⁽¹⁾そのように考えられよう。3～10は円筒形の泥面子と称されるもののうちで厚みのあるものである。11は泥面子のうちでも厚みのないもの。12～14は基石、15は蟻を形象した泥人形である。

注

- (1) 市川市立歴史博物館『泥めんこ』 1983

第3章 まとめ

第1節 先土器時代

花見川下流域の本遺跡周辺においては、今まで先土器時代の調査例もほとんどなく、わずかに島込東遺跡において尖頭器が出土し⁽¹⁾、谷津台貝塚の堆積土中より先土器時代のものとみられる尖頭器の出土が知られるのみであった。本遺跡において先土器時代石器ユニットが2か所検出されたことは特筆すべきことであり、当地域において今後の調査による資料の増加が期待される。

今回検出した2か所のユニットはC地点がVI層下位からVIIa層にかけてのもので、ナイフ形石器3、石刃2、敲石1、剥片14、礫片2という組み合わせで平面的な広がりも約4mの円内に取まるものであったのに対し、D地点では、IV～V層からVI層への境界にかけてのもので、ナイフ形石器1、剥片92、石核1、礫117と礫が圧倒する組み合わせを持ち、平面的広がりも南北約10m、東西約5mの広さを持つといったように出土状況の異なるユニットであった。

C地点は、よくまとまった出土状況を呈し、頁岩の切り出しナイフ形石器2点、両側縁加工のナイフ形石器1点、同石質の石刃1、チャートの石刃1、敲石1という組み合わせとなっていて刃器の卓越したユニットである。ナイフ形石器は、縦長剥片を切断したもの2点、横長剥片を用いたもの1点となっている。

D地点は南北に広い分布を示し、安山岩のナイフ形石器1点と石核1点、剥片92点及び礫117点と礫群が卓越したユニットである。礫はほとんど破碎された焼礫で、接合の結果原形の復元されるものは少なかったことから本遺跡へ礫片として持ち込まれた上で使用され、小片の破碎礫として廃棄されたものと考えられよう。石器については安山岩のものがほとんどを占めたが成品は1点しか検出されず他の成品は他所へ持ち出されたものとみてよいだろう。

C地点、D地点共に石器は切り出し形ナイフを主体とすることからナイフ形石器文化盛期のIIb期前後の所産とみることができ、D地点ではそれに加えて焼礫群を伴なったものとしてみてよからう。

注

- (1) 千葉市史編纂委員会 「千葉市史 史料編 1」 千葉市 1976
(2) 山口直樹他 「千葉市谷津台貝塚」 (財)千葉県文化財センター 1983

第2節 古墳時代

本遺跡においては、21軒の住居址を検出したが、そのうち出土遺物から時期の比定できるも

のが20軒あった。住居址からの出土土器は土師器のみで須恵器の出土はみられず、大別すると、五領式と和泉式に分けられる。土器分類に応じて住居址の時期を五領式期と和泉式期に分けると五領式期に比定できるのが、004号址、006号址、009号址、012号址、013号址、015号址、016号址、020号址、021号址の9軒となり、和泉式期に比定できるのが、001号址、002号址、005号址、007号址、008号址、010号址、011号址、014号址、017号址、018号址、019号址の11軒となる。

(1) 「S」字状口縁の壺について

五領式期の遺物の中で注目すべきものとして「S」字状口縁を呈する台付壺があげられる。本遺跡では2個体出土しており、013号址2と、015号址3があげられる。これらのうち015号址のものは覆土中出土の破片であり台部を欠損し、流れ込み又は廃棄によるものとみられる。器厚は厚めで球形を呈する胴部、口縁のS字を呈する棗もあまり明瞭ではなく、外面はやや盛り上がる稜が認められ、内面ではっきりした稜として、S字状口縁と認められ、外面のハケメも目が粗く肩部の横ハケメがみられず羽状に施されていることから退化する段階の、形態のくずれたS字状口縁の壺とみることができる。しかし併出関係が明確でないので宮脇遺跡の例にみられるような定型化以前の形式のものという見方も残しておく必要性があろう。

一方013号址のものは、床面に密着した状態で検出され、住居に伴うものとみられる。器形は、口唇部は内外面とも明確な稜を持つS字状口縁を呈し、胴部上位に最大径を持ち、そこから一気に台部へすぼまっている。台部は、ハの字状に開き、内面端部に折り返しがみられる。器厚は薄く3~4mmで、胎土に雲母片を少し含んでいる。器面のハケメに目をやると肩部までが左下がりの縦ハケメ、肩以下が右下がりの縦ハケメとなっており、肩部に横ハケメはみられない。以上のことから考えると東海系の元星敷期b類に分類されるものと非常に類似点が多く、定形化した段階のS字状口縁の壺としてとらえることができ、東海地方との関連を考えられる。

両者共に東海地方との関連のみられる土器であることは明らかであるが本遺跡での出土状態をみると、一方は住居址覆土の流れ込みの破片という出土状況であり、他方は床面出土の土器が他に1点しかなく器形を窺うには不十分であり、どちらも明確な共伴関係がつかめず、有機的な関係付けをすることが困難であり、出土した事実を述べるのにとどまらざるを得ないことがおしまれる。

(2) 滑石原石と破片、石製模造品の出土について

本遺跡において、和泉式期の住居址が11軒検出され、そのうち滑石原石、滑石破片、石製模造品を出土した住居についてみると、滑石原石は001号址、008号址の2軒、破片は001号址、005

号址、011号址の3軒、石製模造品は002号址、007号址、019号址の3軒で总数7軒となり11軒のうちの6割以上にあたる住居から出土している。更に五領式期の016号址からも滑石片を1点出土している。そのうち001号址のみが原石と破片を共に出土し、他の住居は破片若くは成品のみという変った出土状況を呈している。一般的に滑石原石、破片の出土で考えられることは工房址であるが、001号址についてみても原石1点に破片2点という状態で工房址と呼べるような出土状況ではない。002号址は双孔円板1点、005号址は破片1点、007号址は剣形品1点、008号址は原石1点、011号址は破片4⁽²⁾点という貧弱な出土状況を呈しておりいずれも001号址同様工房址と呼べるような出土状況を呈していない。

ここで該期の周辺遺跡に目を移してみると宮脇遺跡においては、工房址の検出はなく第6号住居址から白玉が4点検出されているのみである。やや隔たるが船橋市外原遺跡についてみると、類例が2、3見出せる。まず第3号址が滑石工房址であるとされ、「勾玉、白玉等の滑石製模造品やその製作途上のもの、滑石剝片等の材料が多量に発見され」ている。ついで第2号址、第8号址、第12号址にも注目すると、第2号址は原石1点、剝片僅かの出土が報告され、第8号址は原石1点、剝片、剣形品1点、白玉数点が出土し、第12号址では、剝片の出土が報告されており、本遺跡の001号址、005号址、008号址、011号址に類似した出土状況となっている。これらのうち外原遺跡では第8号址が「工房址に関係するもの」として報告されており、外原遺跡の集落は工房址とそれに関連した遺構を伴う集落としてとらえることができよう。本遺跡の場合にその集落構成をあてはめることができたらば工房址と断定できる遺構は検出されなかつたものの工房址に関係する遺構を持つ集落とみることは問題ないと思われる。この場合、工房址を調査範囲外に求めることが可能であろう。なぜなら、近世の根切り溝とみられる1号溝の覆土中より滑石原石が1点出土していることから、本遺跡周辺に工房址とは断定できないにせよ滑石工房に伴う遺構の存在の可能性を求めるることは可能と思われる。

(3) 軽石について

本遺跡検出の21軒の住居址のうち半数以上に当る11軒から軽石の出土が認められた。五領式期では004号址で3点、006号址で1点、013号址で2点、015号址で3点、016号址で9点、和泉式期では、005号址で8点、007号址で9点、008号址で5点、010号址で3点、017号址で1点、018号址1点となっている。今迄軽石の出土の報告例は多いが、それによって用途が解明されたとは言い難い。工房址とされた外原遺跡第3号址では多数出土しており「磨耗痕が明らかに見られ、おそらく砥石の役目をもつたものであろう」とされているが、一方、八千代市権現後遺跡の工房址とされるD-035、D-131、D-132、D-133号住居跡についてみると1点も出土していない。但しこのことによって軽石の砥石としての機能が否定されるものではなく、軽石の出土の記載のある報文には、工房址であるかないかにかかわらずそのほとんどすべてに磨耗

痕、磨滅痕といった表現がされており、時には窪みのみられるものもあることが知られる。つまり何かを磨くための砥石として用いられ、又何かを安定させるための窪みであると考えられる。滑石を磨くための砥石として用いられたのが外原遺跡の例とすると、他には何を対象物として磨いたのであろうか。

本遺跡においても工房址と関連した遺構からの出土のみでなく、通常の住居址からも出土しており直ちに特定の用途は限定できないと思われる。金属器の砥石としてみると、砥石の出土（002号址、004号址、011号址）していることから消極的にならざるを得ない。一方、特徴的なものも存在し、010号址15の赤色塗装の痕跡のあるものや、015号址9の数条の線刻の認められるもの、コークス状のものが認められるがやはり用途の限定には至らないと思われる。

注

- (1) 千葉市宮脇遺跡第11号住居跡では「S」字状口縁の台付甕と併出して口縁部に刺突文、クロス文のみられる受け口甕の出土が報告され、白井久美子によると定型化以前の段階のものとされている。
白井久美子「市原市上総国分寺台出土の東海系「有段口縁」變形土器について」『古代第71号』早稲田大学考古学会 1982
- 玉口時雄他『宮脇』宮脇遺跡調査団 1973
- (2) 破片4点のうち3点は、白玉の未成品に近いものとみることもできる。
- (3) 八幡一郎他「外原」船橋市教育委員会 1972
- (4) 阪田正一他『八千代市椎現後遺跡』千葉県文化財センター 1984

第3節 歴史時代

該期の遺構は、火葬墓2基の検出があげられる。検出時の状況が悪く遺存が良好とは言えないが、遺物・火葬人骨の検出により火葬墓と認定することができた。

1号火葬墓は、土壌内に人骨を納めた土師器の甕を埋納したもので甕も口縁が破損しており蓋の有無は確認できなかった。骨蔵器として用いられた土師器の甕は、集落の住居址から普通に出土するもので日用什器の骨蔵器への転用とみられる。火葬人骨については、細片であり分析が出来なかったが、1人分の火葬骨とみてよいと思われる。2号火葬墓も1号火葬墓同様に土壌内に骨蔵器を納めたものであるが、骨蔵器が1号火葬墓と異なっている。須恵器の甕を外容器とし、その中に内容器として土師器の塊を納めている。外容器の甕は底部を欠損しており、そのために内容器の塊を用いて火葬骨を納めたものと考えられる。内容器は甕を整形して塊に仕上げたものとみられ口縁は不規則な波状を呈し、器厚も薄くなっている。外容器、内容器共に1号火葬墓同様に日用什器の骨蔵器への転用とみてよからう。火葬人骨についても1号火葬墓同様に細片ばかりで詳細は不明であるが1人分の火葬骨と思われる。1号・2号火葬墓共に、骨蔵器として用いられた土師器・須恵器の年代からみて8世紀後半のものと思われる。

火葬墓は本遺跡においては2基のみの検出であり、検出の状況からみても周辺地域にも多数

群を成して存在するとは考えられず、又該期の普遍的な葬法とは考えられないことから、有識若くは有産階級の葬法として用いられたものと思われる。日用什器の骨蔵器への転用を考えると遺跡周辺に本火葬墓を構築した普遍的な集落内の有識・有産階級の存在が窺われる。

参考文献

- 千葉市史編纂委員会 「千葉市史 史料編1」 千葉市 1976
- 大原正義他 「佐倉市星谷津遺跡」 勅千葉県文化財センター 1978
- 大原正義他 「富津市岩坂大台遺跡」 勅千葉県文化財センター 1983
- 横山 仁 「市原市潮又北・瀬又南、千葉市大木戸・板倉町遺跡」 勅千葉県文化財センター 1984
- 古内 茂他 「千葉東南部ニュータウン 12」 勅千葉県文化財センター 1983
- 古内 茂他 「千葉東南部ニュータウン 15」 勅千葉県文化財センター 1984
- 山口直樹他 「千葉市谷津台貝塚」 勅千葉県文化財センター 1983
- 藤崎芳樹 「市原市番後台遺跡・神明台遺跡」 勅千葉県文化財センター 1982
- 沼沢 豊 「東寺山石神遺跡」 勅千葉県文化財センター 1977
- 阪田正一他 「八千代市権現後遺跡」 勅千葉県文化財センター 1984
- 岡川宏道 「千葉市東寺山戸張作遺跡」 勅千葉県文化財センター 1977
- 勅千葉県文化財センター 「房總考古学ライブラリー1 先土器時代」 1984
- 玉口時雄他 「宮脇」 宮脇遺跡調査団 1973
- 平岡和夫他 「エゴダ遺跡」 山武考古学研究所 1982
- 道沢 明他 「千葉市・宮野木原遺跡発掘調査報告書」 千葉市遺跡調査会 1981
- 栗本佳弘他 「京葉」 勅千葉県都市公社 1973
- 千葉県企画部企画課 「千葉県埋蔵文化財分布図」 千葉県広報協会 1979
- 千葉県教育委員会 「千葉県の貝塚」 千葉県文化財保護協会 1983
- 八幡一郎他 「外原」 船橋市教育委員会 1972
- 尾崎喜左雄他 「石田川」 「石田川」 刊行会 1968
- 加藤晋平・鶴丸俊明 「図録石器の基礎知識 I・II」 柏書房 1980
- 八王子市郷土資料館 「三～四世紀の東国」(特別展図録) 八王子市教育委員会 1983
- 村山好文 「房總における和泉式土器編年試案」『日本考古学研究所集報V』 日本考古学研究所 1982
- 上野純司 「南関東における古式土師式土器編年試論」『史館 第9号』 1977
- 熊野正也 「石田川式土器文化成立に関する一考察(前)」『史館 第10号』 1978
- 白井久美子 「市原市上総国分寺台出土の東海系「有段口縁」變形土器について」『古代 第71号』 早稲田大学考古学会 1981
- 市川市立歴史博物館 「泥めんこ」 市川市立歴史博物館 1983
- 山田遺跡調査団 「山田水呑遺跡」 山田遺跡調査団 1977

写 真 図 版



1. 遺跡遠景（航空写真）南西から



2. 遺跡全景（航空写真）東から

图版 2



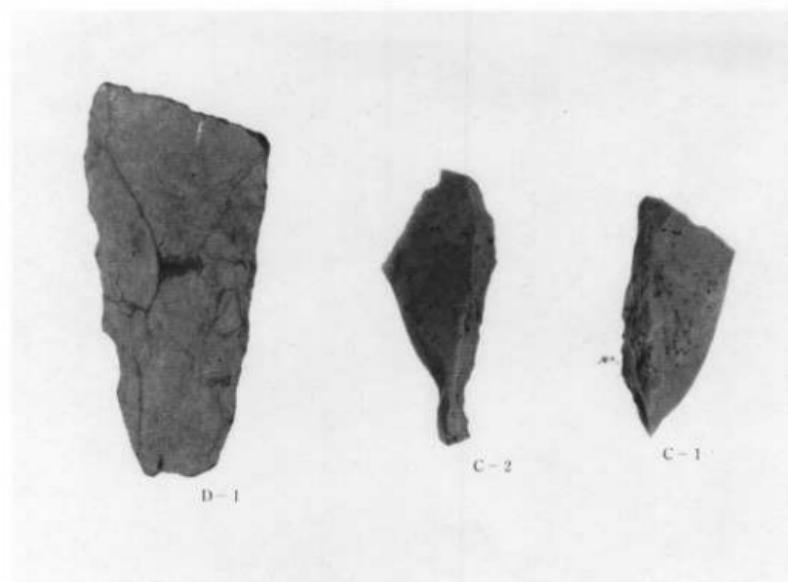
1. C 地点遗物出土状况



2. D 地点遗物出土状况



1. C 地点出土遺物



2. C・D 地点出土遺物

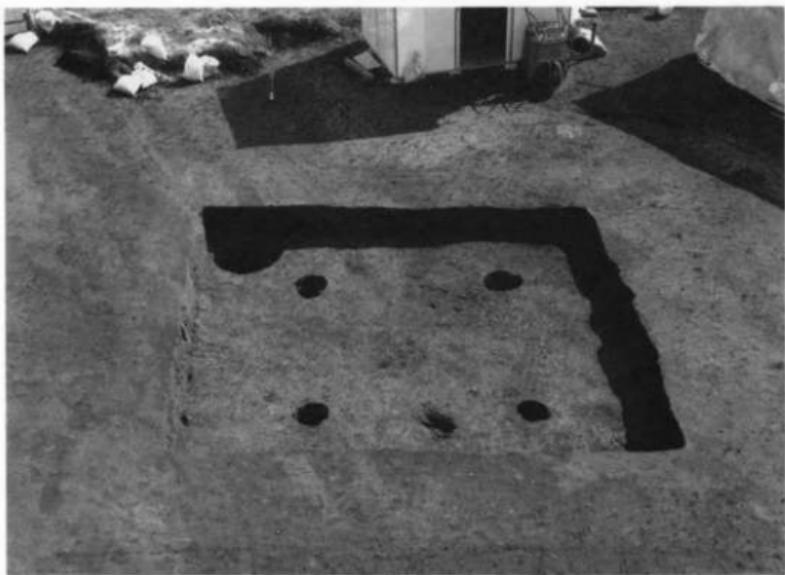
图版 4



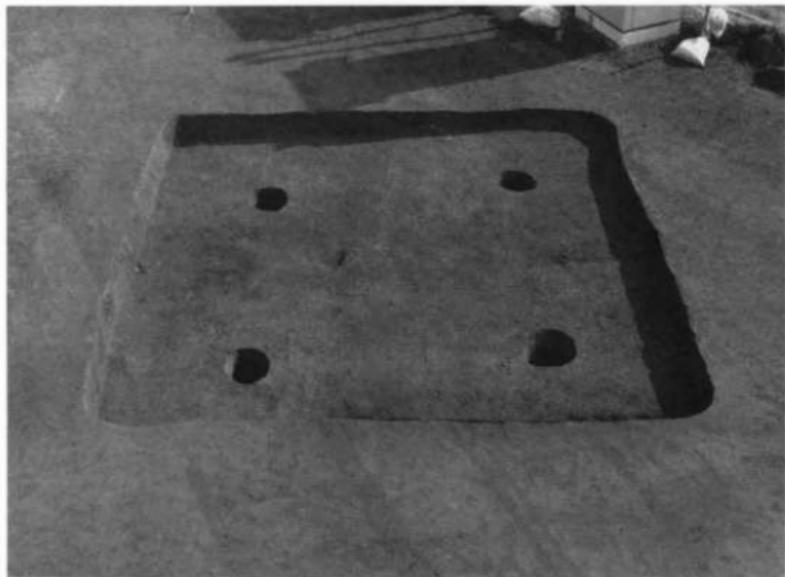
1 . 008 • 012 • 013号住居址



2 . 001 • 002 • 003 • 004 • 021号住居址



1. 001号住居址全景



2. 002号住居址全景

图版 6



1. 004号住居址全景



2. 004号住居址遗物出土状况



1. 005号住居址全景



2. 006号住居址全景

図版 8



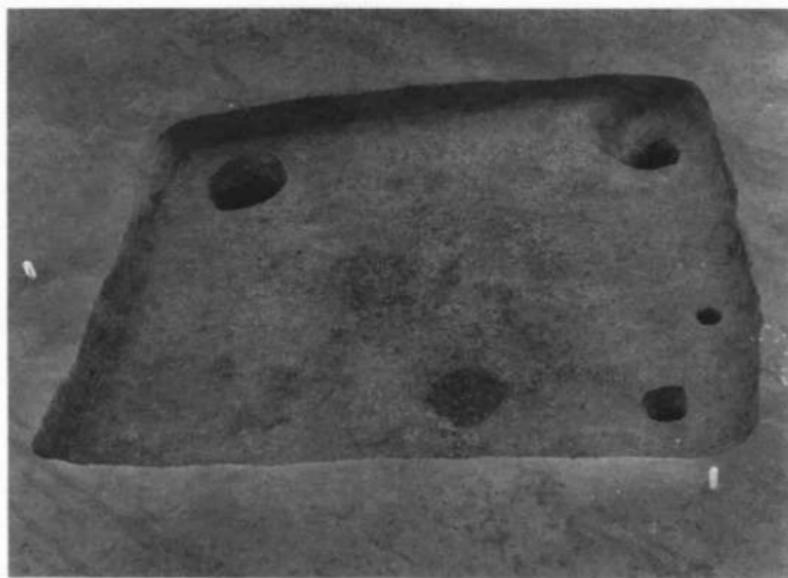
1. 007号住居址全景（手前右は004号住居址）



2. 007号住居址遺物出土状況



1. 008号住居址遺物出土状況



2. 010号住居址全景

図版 10



1. 010号住居址遺物出土状況



2. 010号住居址遺物出土状況

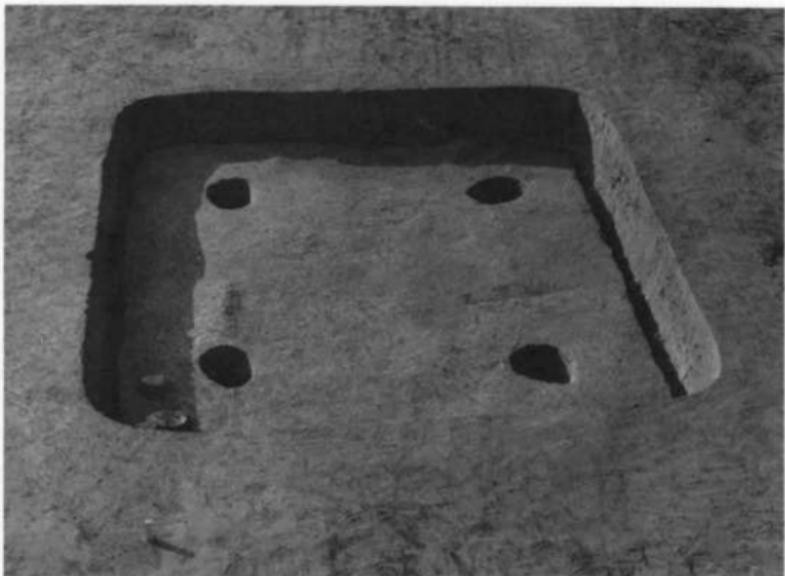


1. 011号住居址全景



2. 012号住居址遺物出土状況

图版 12



1. 013号住居址全景



2. 015号住居址全景



1. 016号住居址全景



2. 017号住居址全景

図版 14



1. 018号住居址全景（左壁の掘り込みは2号火葬墓）



2. 021号住居址全景



001・002・004 号住居址出土遺物

图版 16



005 - 10



006 - 3



006 - 1



007 - 17



006 - 2



007 - 18



007 - 23

005 · 006 · 007号住居址出土遗物



007-1



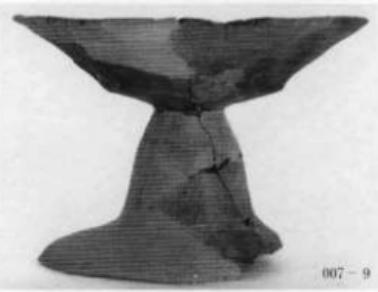
007-5



007-4



007-7



007-9



007-11



007-21

007号住居址出土遺物



008-1



008-3



008-5



008-4



008-6



010-3

008-010号住居址出土遗物



010-1



010-6



012-1



012-2



015-1



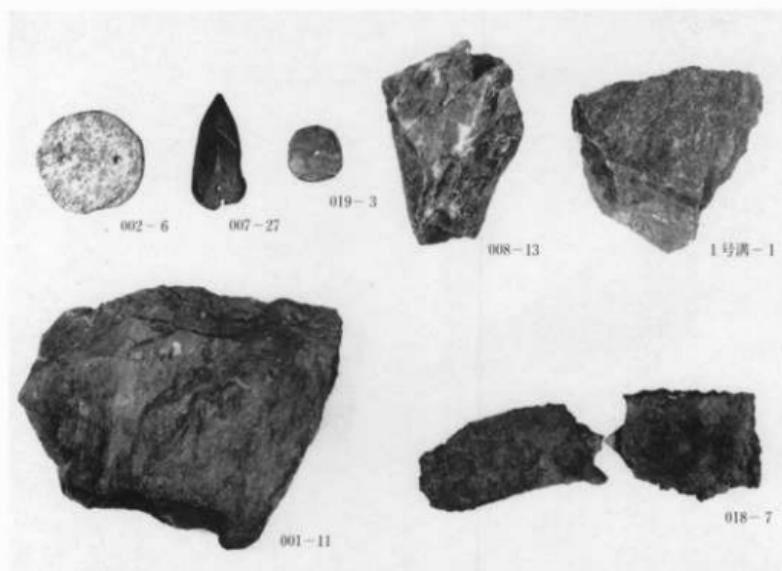
013-2

010 • 012 • 013 • 015号住居址出土遗物

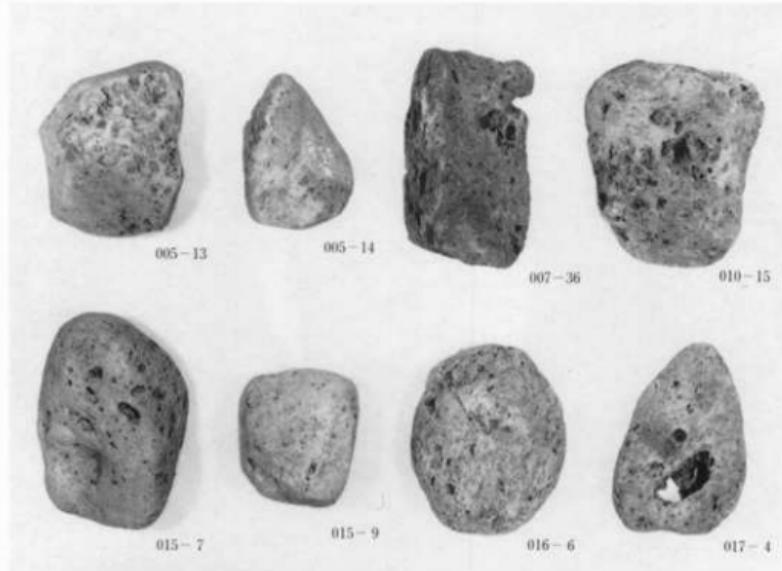
图版 20



015・017・018号住居址、1号・2号火葬墓出土遺物



1. 石製模造品、滑石原石、鉄製品



2. 軽石

図版 22



1. 1号火葬墓 (027)



2. 2号火葬墓 (028)

昭和60年3月15日 印刷

昭和60年3月30日 発行

千葉市賽輪遺跡

発行 住宅・都市整備公団 東京支社
東京都千代田区九段南1-6-17

財團法人 千葉県文化財センター
千葉県千葉市葛城2-10-1

印刷 株式会社 弘文社
千葉県市川市市川南2-7-2
